福岡市

多々良込田遺跡 II

福岡市東区多の津所在遺跡群の調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第53集

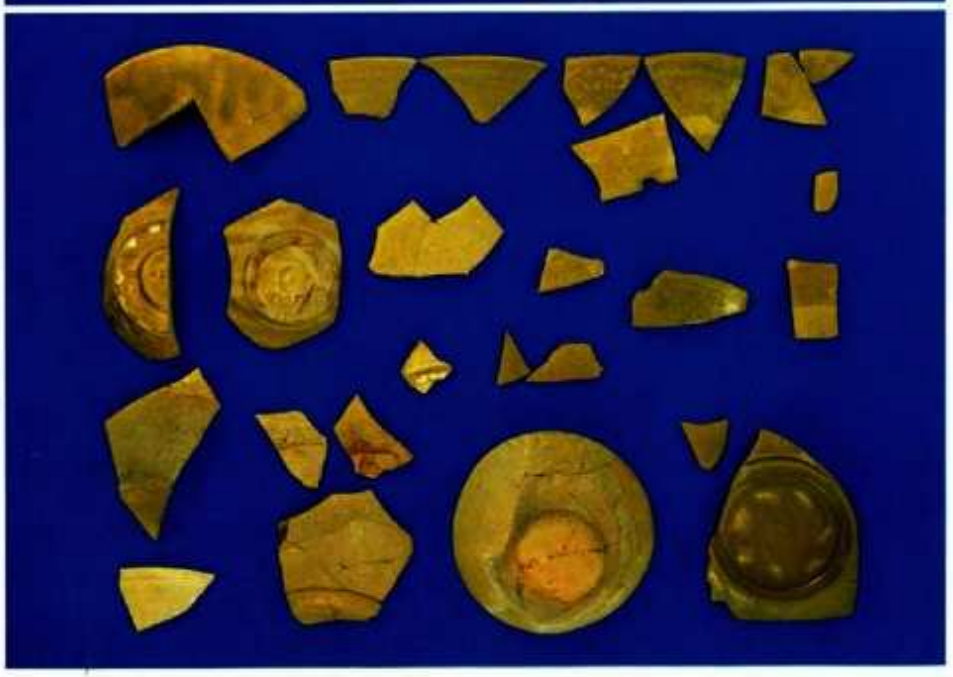
福岡市教育委員会
No.
埋蔵文化財センター

1980

福 岡 市 教 育 委 員 会

2589
5

昭和 55. 9. 29
[illegible]市教育委員会文化課蔵書
No. 2509



福岡市埋蔵文化財調査報告書　第53集

多々良込田遺跡

－福岡市東区多の津所在遺跡群の調査－

１９８０年３月

福岡市教育委員会

序

この報告書は，福岡市が昭和45年度に福岡市東区多々良地区内に福岡市流通業務団地を設置した際、発掘調査を行った多々良遺跡（第二十集）と同一地域内における報告書です。

今回の発掘調査は、流通業務団地内に倉庫を建設するに当って、埋蔵文化財の存在が確認されたため、国庫補助事業により実施いたしました。

発掘調査の結果は、報告書に見られるように弥生時代から古墳時代に至る集落跡及び律令時代の建物群と、建物群をとりまく溝から中国製磁器や京都や近江で作られた緑釉陶器が多量に出土し、官衙に匹敵するような重要な遺跡であると考えます。

本書が市民各位の文化財保護思想育成に活用されると共に、学術研究の分野において、役立つことを願うものであります。

なお、調査に当りまして、有益な助言をいただいた調査指導員の先生方を始め、関係各位の多大のご協力と文化財に対する深いご理解に深甚な感謝の意を表します。

昭和55年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　西　津　茂　美

例言

1．本書は、福岡市東区多の津２丁目の倉庫建設に伴い、福岡市教育委員会が1979年３～６月に実施した多々良込田遺跡第３次調査の発掘調査報告である。

2．発掘調査は、78年度内調査は原因者の負担により、79年度調査は国庫補助を受けて実施した。

3．本書の執筆はつぎのとおりである。

Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ１Ｃ・３、Ⅵ、　柳沢一男

Ⅴ２　亀田修一（九州大学大学院生）

Ⅴ１Ａ・Ｂ　福尾正彦（九州大学大学院生）

別表　久保智康・田中秋郎（九州大学学生）

4．現場での遺構実測作業は市文化課技術職員、整理の遺物実測作業は九州大学院生・学生諸君の協力をえた。

5．本書に掲載した写真は、現場調査は柳沢が出土遺物は柳沢ならびに堀秀夫君（九州産業大学学生）・白石公高氏が撮影したものを使用した。

6．本書に使用する方位はすべて磁針である。真北との偏値は、西偏6°40′である。

7．本書の編集は柳沢が担当し、執筆をお願いした方々の協力を得た。

8．なお、出土遺物のうち馬歯・鉄滓等の鑑定・分析は時間の関係上本書に収録することができなかった。次年度報告に行いたい。

本文目次

I　調査に至る経過 …… 1
II　遺跡の位置と環境 …… 3
III　調査の概要 …… 6
　1．既往の調査 …… 6
　2．発掘区の設定と名称 …… 7
　3．第3次調査日誌 …… 7
　4．第3次調査の概要 …… 9
IV　遺　構 …… 13
　1．柵 …… 13
　2．掘立柱建物 …… 13
　3．土坑・土坑墓 …… 19
　4．井戸 …… 21
　5．溝 …… 21
V　遺　物 …… 22
　1．土器・土製品・施釉陶磁器 …… 22
　2．瓦類 …… 31
　3．金属・石・木製品 …… 32
VI　まとめ …… 34
　別　表 …… 51

図版目次

巻首図版（原色）　第３次調査出土越州窯系青磁
PL.１ 遺跡周辺空中写真(1964年国土地理院撮影 1: 40,000)
PL.２（上）第３次調査地区調査前全景（南西から）
（下）I期調査区全景（南西から）
PL.３（上）I期調査区全景（南東から）。（下）II期調査区全景（東から）
PL.４（上）C・２区建物群全景（南から）。（下）同建物群全景（北から）
PL.５（上）SB01(北から)・(下) SB02・13(南から)
PL.６（上）SB03～05(南から)・(下) SB03(南から)
PL.７（上）SB04・05(西から)・(下) SB03～05(北から)
PL.８（上）SB06～08(南から)・(下) SB06～08(北から)
PL.９（上）SB08・09(南から)・(下) SB02・05～08(北から)
PL.10（上）SB11(東から)・(下) SB05掘方3・SB02掘方2・SB04掘方3
PL.11（上）井戸SE01(北から)・(下) 土坑墓SX01(西から)
PL.12（上）SK06(南西から)・(中) SK06、丸瓦・鵜羽口・(下)SK07、丸瓦と鉄滓
PL.13（上）SD04(西から)・(中) SD04(発掘区西壁断面)・(下) 同東壁断面
PL.14（上）SD04と南側建物群(西から)・(中) SD04下層出土遺物(軒丸瓦)
（下）SD04下層出土遺物（馬歯）
PL.15 第３次調査出土、瓦
PL.16 第３次調査出土、土器I
PL.17 第３次調査出土、土器II
PL.18 第３次調査出土、施釉陶磁器I
PL.19 第３次調査出土、施釉陶磁器II
PL.20 第３次調査出土、土製品・鉄製品
PL.21 第３次調査出土、銅・石・木製品

挿図目次

Fig.1　多々良込田遺跡周辺主要遺跡分布地図 …… 2
Fig.2　内橋廃寺出土瓦（森貞次郎氏採集）…… 4
Fig.3　多々良込田遺跡調査地区位置図（1:2500）…… 5
Fig.4　多々良込田遺跡地形図（1:1000）…… 折り込み 6－7
Fig.5　多々良込田遺跡第１次～第３次調査区遺構配置図(1:500)…… 8

Fig.6　時期別遺構配置図（1:800）…… 10
Fig.7　発掘区西壁断面図（1:80）…… 12
Fig.8　掘立柱建物実測図Ⅰ（1:100）…… 14
Fig.9　掘立柱建物実測図Ⅱ（1:100）…… 15
Fig.10　掘立柱建物実測図Ⅲ（1:100）…… 16
Fig.11　掘立柱建物実測図Ⅳ（1:100）…… 18
Fig.12　土坑・土坑墓・井戸実測図(1:40,1:30)…… 20
Fig.13　溝ＳＤ04発掘区東壁断面図（1:80）…… 21
Fig.14　稽屋・席田郡の条里と駅路（1:25000）…… 折込み 36—37
Fig.15　出土遺物実測図Ⅰ（包含層出土土器）…… 37
Fig.16　出土遺物実測図Ⅱ（包含層出土土器）…… 38
Fig.17　出土遺物実測図Ⅲ（包含層出土土器）…… 39
Fig.18　出土遺物実測図Ⅳ（包含層・ＳＫ01・03出土土器）…… 40
Fig.19　出土遺物実測図Ⅴ（ＳＫ03・04・06出土土器）…… 41
Fig.20　出土遺物実測図Ⅵ（ＳＫ07・08・09出土土器）…… 42
Fig.21　出土遺物実測図Ⅶ（ＳＫ09・10・12・ＳＥ01出土土器）…… 43
Fig.22　出土遺物実測図Ⅷ（ＳＸ01—ＳＤ17・ＳＤ21出土土器）…… 44
Fig.23　出土遺物実測図Ⅸ　ＳＤ21・小竪穴出土土器）…… 45
Fig.24　出土遺物実測図Ⅹ（小竪穴出土土器）…… 46
Fig.25　出土遺物実測図Ⅺ（施釉陶磁器）…… 47
Fig.26　出土遺物実測図Ⅻ（瓦）…… 48
Fig.27　出土遺物実測図XIII（瓦）…… 49
Fig.28　出土遺物実測図XIV（金属・石・木・土製品）…… 50
付図　第１～３次調査区遺構実例図（1:200）

表目次

Tab.1　遺構表示記号…… 6
Tab.2　出土土師器の調整手法…… 22
Tab.3　掘立柱建物群一覧…… 33
別表

I　調査に至る経過

「多々良込田遺跡」は、1970年に山陽新幹線建設ルート内の分布調査によって発見され、遺物散布地として登録された。その後1972～73年にかけて福岡市教育委員会は新幹線路線敷内の発掘調査を実施した。その結果、この遺跡が多々良川左岸の沖積微高地上に位置し、弥生時代以降平安時代にかけての集落址ならびに官衙的な施設の存在が明らかになった。その成果は『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第32集）として公表されているが、遺跡の範囲は新幹線路線敷から広く東西・南に広がることが推測されるに至った。

1977年10月に至って、山陽新幹線の発掘調査地区東側に隣接する地域7500㎡に倉庫建設の申請が出された。申請地区に遺跡の拡がる可能性の強いことから、市文化課は現状保存の旨申請者と協議を重ねた。しかしながら、この地区一帯が流通業務地区に指定され他の転用がみとめられない現状であり、土地所有者の状況は困難なものであった。そのため、倉庫建設は止むなしと判断し、まずその年の11月、申請地全域に20ｍのグリッドを設定し試掘調査を行った。その結果は予想されたように弥生～平安時代にわたる遺構・遺物が検出された。試掘成果をもとに、設計変更を含め協議し、申請地内を二次に分けて調査すること、遺構状況によっては基礎工事法を変更することとして調査を実施することになった。

以上の経過を経て、市教育委員会は1978年、79年の２次に分けて倉庫建設地の発掘調査を行った。なお、多々良込田遺跡の調査は、山陽新幹線に伴うものを第１次、1978年度実施分を第２次、79年度実施分を第３次とする。本書はその第３次調査の報告にあたる。すでに公表されている第１次調査報告を『多々良込田遺跡Ⅰ』とし、本報告をそのⅡとする。

本報告は概報の域をでるものでなく、第３次調査の成果のうち、溝ＳＤ04を除く奈良～平安期の遺構・遺物に限って行い、他は次年度に報告したい。

第３次調査の構成と組織はつぎのとおりである。

調査依託者	蓑原ハツ他７名
調査主体者	福岡市教育委員会（文化課）
事務担当	三宅安吉（埋蔵文化財第一係長）・古藤国生
現場担当	柳田純孝（埋蔵文化財第二係長）・柳沢一男（担当）
〃 補助	宮内克己・福尾正彦・横大路俊明・種定淳之介・久保智康・田中秋郎・松永幸男（以上九州大学考古学研究室）
整理補助	亀田修一・福尾正彦・久保智康・田中秋郎（以上九州大学考古学研究室）
調査協力者	樋口万亀子・徳永マツ子・野川桂子・徳永久子・大神キミ子・河辺チサエ・相良由美子・光安富子・井上寅雄・徳永弘・柴田スマ子・黒木ヤス子

加藤キク・後藤美代子・池見ツネヨ・蓑原シズノ・後藤満代・松田サヨ
萩尾重光・長アズミ

なお調査にあたって、福岡県文化課・九州歴史資料館の諸氏、鏡山猛・森貞次郎・横山浩一三島格・北条暉幸・日野尚志の諸先生からは貴重な助言を頂いた。また文化財の意義を充分認識され協力を惜まなかった施主、大高建設の皆さんには衷心より謝意を表したい。

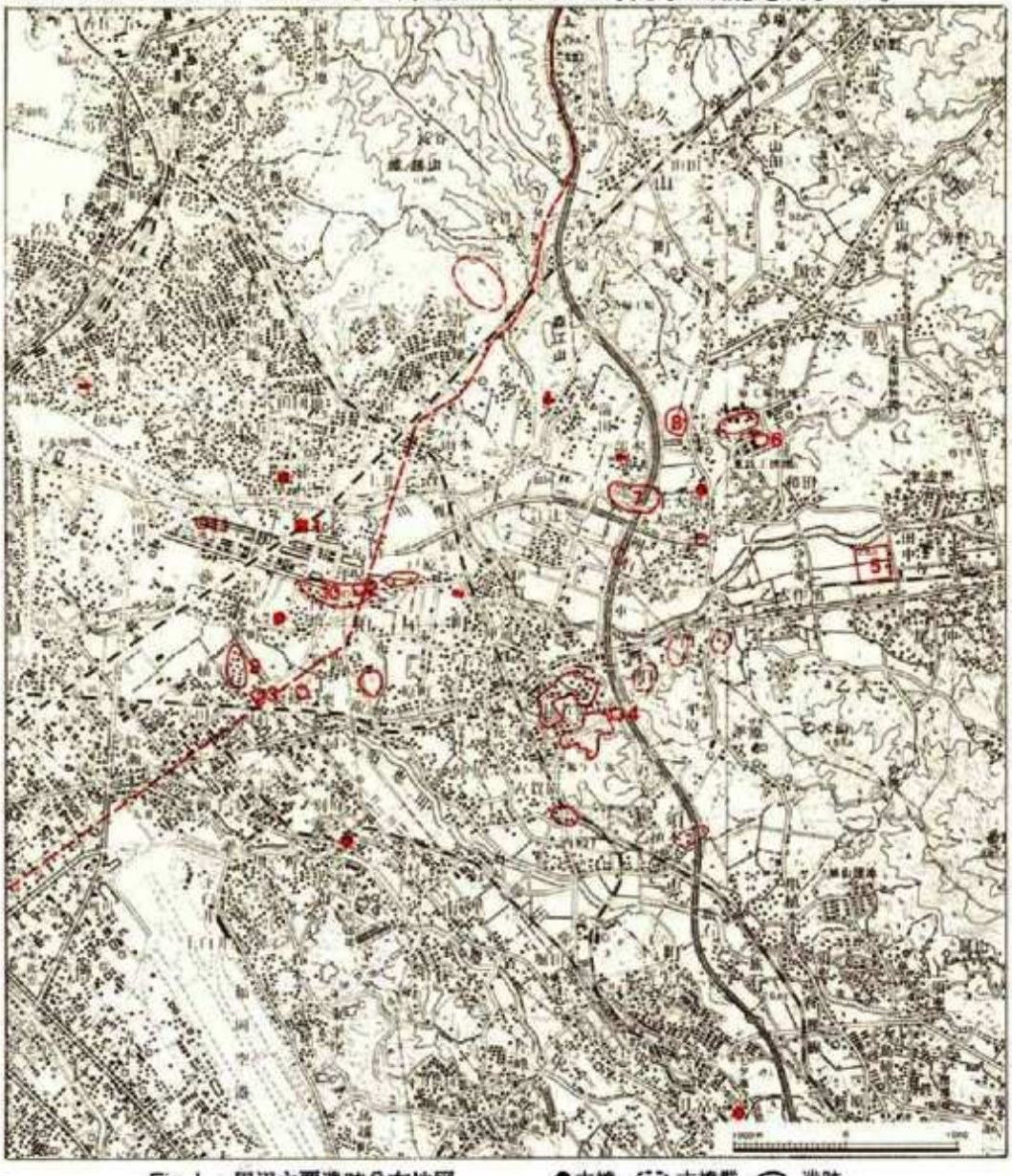


Fig. I　周辺主要遺跡分布地図　●古墳　古墳群　遺跡
□官衙・寺院址　……は推定西海道(日野氏による)

1.多々良込田遺跡　2.内橋廃寺　3.「夷守駅」推定地　4.駕与丁廃寺　5.「粕屋郡家」推定地
6.和田部木原遺跡　7.蒲田遺跡群　8.水ヶ元遺跡　9.柚須遺跡　10.広畑遺跡　11.多々良遺跡

II．遺跡の位置と環境

博多湾に臨む福岡平野部は、北に向って突出する幾つかの山塊丘陵地に限られ、その間を貫流して湾内にそそぐ河川沖積によって形成された小平野からなる。多々良込田遺跡は、その東北端の粕屋平野の河口つけね近くに位置する。ちなみに国土地理院作製の5万分の１地形図(福岡）では北より9.4cm、東より7.8cmの一帯が遺跡の位置である。

粕屋平野は、北より多々良川・須恵川・宇美川の三河川を主流として、河口近くにデルタを形成している。また、各河川の上流部にはそれぞれの小沖積平野を形成しており、粕屋平野はこれらの総称である。

多々良込田遺跡は、平野北端を流れる多々良川の左岸、沖積微高地（沖積段丘？）上にあり現在の多々良川水面より約２ｍほどの高さになる。遺構を包蔵する現水田面は3.6～3.7ｍであり、旧氾濫原との比高は１ｍ前後みとめられる。本遺跡から海岸線までは約４km、叙上三河川の合流点からは２kmほど上流である。

本遺跡は、以下の章で述べるように古墳時代前期の集落址ならびに律令時代前半に属する官衙的様相の強い施設からなる。本報告は後者を中心に記述するので、とりあえず律令時代粕屋平野の遺跡を概観しておきたい。

律令時代の粕（糟）屋郡は、香椎・志珂・厨戸・大村・池田・阿曇・柞原・勢門・敷梨の九郷を管する中郡である。各郷は現存する遺称地名との対比によって、香椎郷は福岡市香椎、志珂は同志賀島、阿曇郷は同和白・粕屋郡新宮、柞原郷は久山町、勢門郷は篠栗町、池田郷は粕屋郡古賀町に各比定され、この六郷については異論はないようである。残る厨戸・大村・敷梨の三郷は、未だ比定について直接の遺称地が見あたらず異論が多い。例えば、大村郷についていえば太宰管内誌では新宮町青柳周辺に、大日本地名辞書では宗像郡席内郷に含ませる考えもある。

近年、井上辰雄氏は、厨戸郷は宇美八幡宮に関係した厨に由来する郷名の可能性があり、大村郷は粕屋町あたりに比定した方がよいのではないかとされている。[①] また日野尚志氏は、厨戸郷を粕屋町から多々良川下流域に想定されている。[②] しかし、粕屋郡の範囲で残る地域は、宇美町・須恵町・粕屋町から福岡市東区の多々良川下流域一帯であり、これらの地域が上述の三郷にあたることは明らかであろう。

さて、つぎに現在の水田畦畔にその痕跡をとどめる条里についてみておきたい。この地域一帯の条里研究は、鏡山猛氏の研究を嚆矢[③]として、近年日野尚志氏によって積極的に進められている。氏は粕屋郡の条里を方向の違いによって７つの条里区に識別され、２つの条里区について坪並みを復元された。また粕屋郡家の所在にも触れ、それが勢門条里区に残る「郡町」の地

名と、『筑前国風土記』逸文にみる「糟屋郡　游大能泉　在郡東南　云々」の記事から求められるとして、篠栗町津波黒の「郡町」の三町四方を粕屋郡家と推定し、さらに駅・官道（西海道）を含んだ復元案を提起された[4]（Fig. 14）。

つぎに、粕屋平野内での律令時代前半期遺跡の分布はどうかというと、その実態はほとんど知られていない状況にある。調査例としては、多々良込田遺跡以外には、篠栗町和田部木原遺跡[5]、粕屋町駕与丁廃寺[6]、福岡市蒲田遺跡D地区[7]、水ヶ元遺跡をあげうるにすぎない。平安後期以降では、多々良遺跡[8]、蒲田遺跡D地区とその数を減じ、総じてここ数年の開発の進歩に比して調査例は少ない。

まず、奈良時代創建寺院としては、駕与丁廃寺・内橋廃寺の二寺があげられる。両者ともほとんど壊滅状態にあって伽藍配置等は不明である。前者は、奈良時代後半の創建であり、郡家推定地に近いことから郡寺としての可能性が強い。後者は、多々良込田遺跡の東南 600mにあり、その東側が官道推定線に接する。これも壊滅状況にあって詳細は明らかでないが、森貞次郎氏によれば、官道線に沿って門らしき痕跡があり、その周囲から多量の瓦が出土したという（Fig. 2の瓦）。出土瓦は多々良込田遺跡のもの、また駕与丁廃寺出土瓦の一部と共通し、鴻臚館瓦の系統を引くものであり、8世紀後半代の創建としてよい。

和田部木原遺跡は篠栗・久山町境にあって、西にのびる低丘陵上に約40棟の掘立柱建物が検出された。7世紀末に始まり9世紀には姿を消す遺跡で、建物の配置状況から5～6期の建替えがみとめられる。建物配置の範囲はほぼ1町内に収まり、1期10棟前後で構成されている。

また粕屋郡家と推定される津波黒周辺、夷守駅と推測されている阿恵「日守」周辺の状況はほとんど知られていない。日守周辺では柚須遺跡が登録されているが、以前、地下3mのところから蛸壺と瓦器椀が出土したとあるにすぎない[9]。この報告作製時に周辺一帯を改めて分布調査を行ったところ、柚須から日守にかけては須恵川の沖積微高地（段丘？）がのび、その周辺から弥生・古墳時代の土器、龍泉窯系青磁等が採集された。

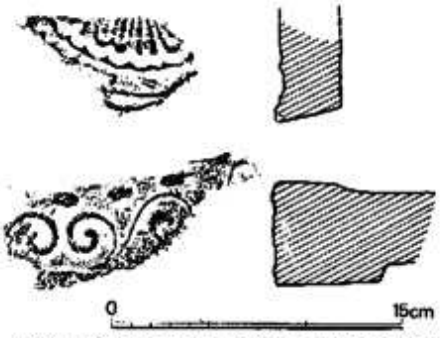
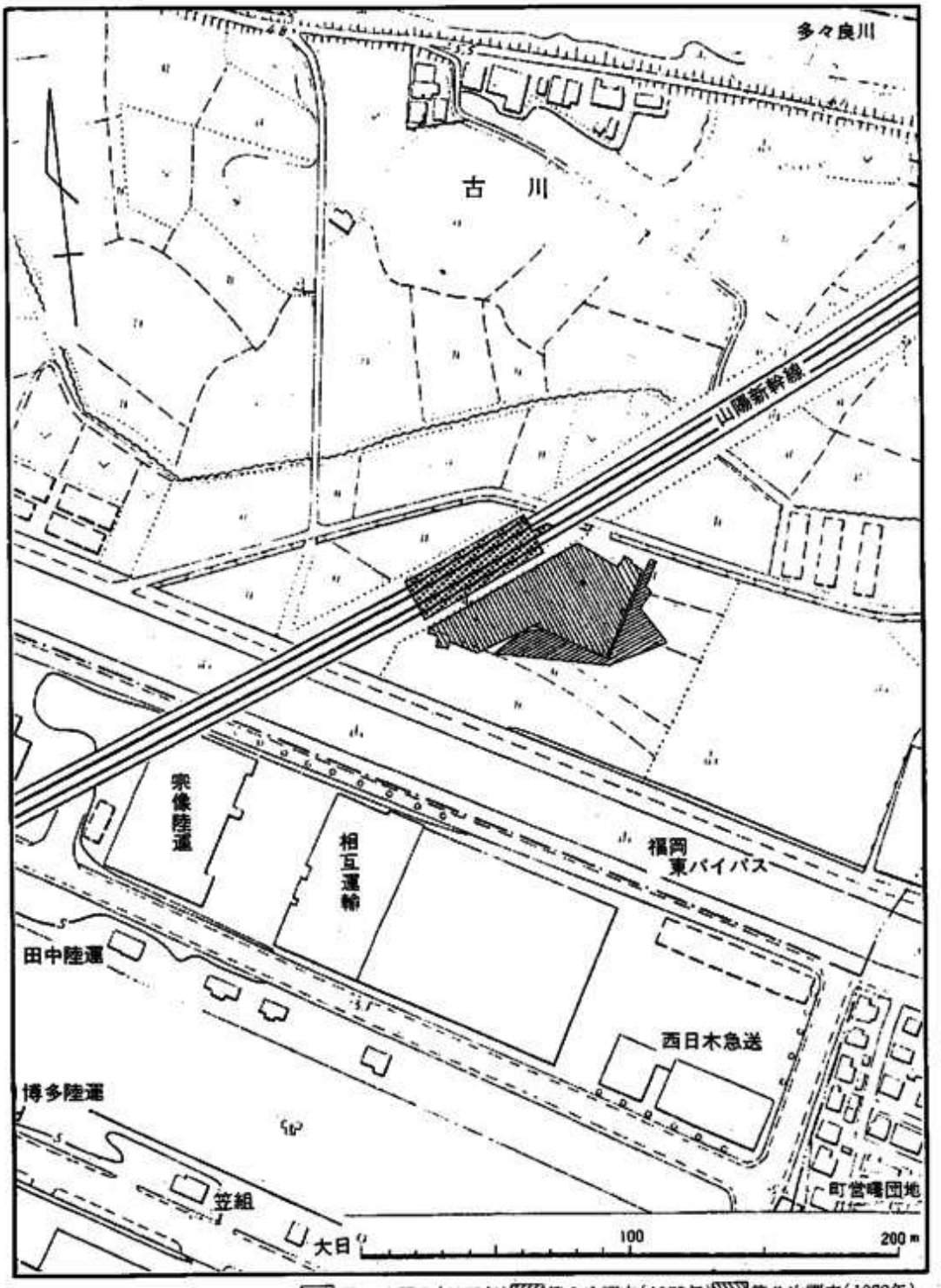


Fig.2　内橋廃寺出土瓦（森貞次郎氏採集）

註①井上辰雄「古代の粕屋」『多々良遺跡』所収（福岡市埋蔵文化財調査報告書第20集）　1972
②甘野尚志「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」『佐賀大学教育学部研究論集』24（1）　1976
③梶山猛『福岡県下の条里遺跡』「福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書」第12輯　1935
④註②文献
⑤1974～75年、福岡市教育委員会調査
⑥「駕与丁遺跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』I（福岡県教育委員会）　1970
⑦『蒲田遺跡』（福岡県埋蔵文化財調査報告書第33集）　1975
⑧『多々良遺跡』（福岡市埋蔵文化財調査報告第20集）　1971
⑨「福岡県遺跡等分布地図（粕屋郡編）」（福岡県教育委員会）　1979



第1次調査(1973年) 第2次調査(1978年) 第3次調査(1979年)

Fig.3　多々良込田遺跡調査地区位置図(1:2500)

Ⅲ　調査の概要

1．既往の調査

本遺跡は、1972年の山陽新幹線建設に伴う調査によって遺構の概要が明らかになった。その結果、古墳時代に属する集落の一部と、豊富な遺物の出土から奈良～平安時代にかけての官衙的な施設の存在が予想されたわけである。以下第1・2次調査の概要を記して、第3次調査報告の便をはかりたい。

第1次調査は、新幹線路線敷と側道を合せた幅21mのうち、16mを長さ56mにわたって実施し、調査面積は約750㎡である（なお3次調査の段階で遺構標示をTab.1のように統一し、それに合せて第1次調査の遺構標示記号を変更した）。遺構検出面は、暗茶褐色ないしは暗褐色の粘質土層であるが、調査区の北に行くにしたがって粒子が粗くなり砂質に変る。その下は粘土層を介して1.5～2mで砂礫層に至る。

検出した主な遺構は、竪穴住居址6棟、溝9条があり、他に土坑、ピット群がある。竪穴住居址ＳＣ01～06（旧名称Ｊ１～６）は、古墳時代の初頭から一部中期にかかる古式土師器の段階である。これらは、調査区北端にみとめられた沖積微高地の断崖面ＳＤ01に沿って営なまれている。出土土師器のなかには、北部九州で初めてまとまった内容をもった「庄内式」平行期の土器群が検出され、それに加えて吉備の酒津式土器甕（才の町Ⅱ式か？）が伴って出土した。

９条の溝のうち、ＳＤ04・08・09を除く６条が古墳時代前～中期に属する（第１次調査報告ではＳＤ05・06・07は律令期となっているが、第３次調査区の延長では律令期の土器は一点を含まないので訂正されるべきであろう）。竪穴住穴址と溝の重複関係は、すべて溝が新しい。

律令期の遺構としては、溝ＳＤ04・08・09、土坑、ピット群がある。溝ＳＤ04は幅４～５ｍ深さ40～60cmを測り、奈良時代後半から平安時代前半期の豊富な遺物が出土した。とくに、大宰府出土品に等しい文様博や多数の瓦類、また越州窯系磁器、緑釉陶器が相当数検出され、一般集落に伴う溝とは考えがたい内容である。ＳＤ08はＳＤ04にほぼ直交方向にのびる。

ＳＤ04の南西側には多数のピット群がある。その中には明らかに柱掘方とみとめられるものもあるが、建物として平面規模を推定できるまでに至っていない。

第２次調査は、遺跡東端部の600㎡を実施した。主な検出遺構は古墳時代前～中期の溝、掘立柱建物ＳＢ11の南側柱列、柵ＳＡ01・ＳＡ02のほか、東端部で平安時代中頃の段落ちが検出されている。

Tab. 1　遺構表示記号

Ｓ　－　遺　構			
A	柵・塀	E	井　戸
B	掘立柱建物	K	土　坑
C	竪穴住居地	X	その他
D	溝		

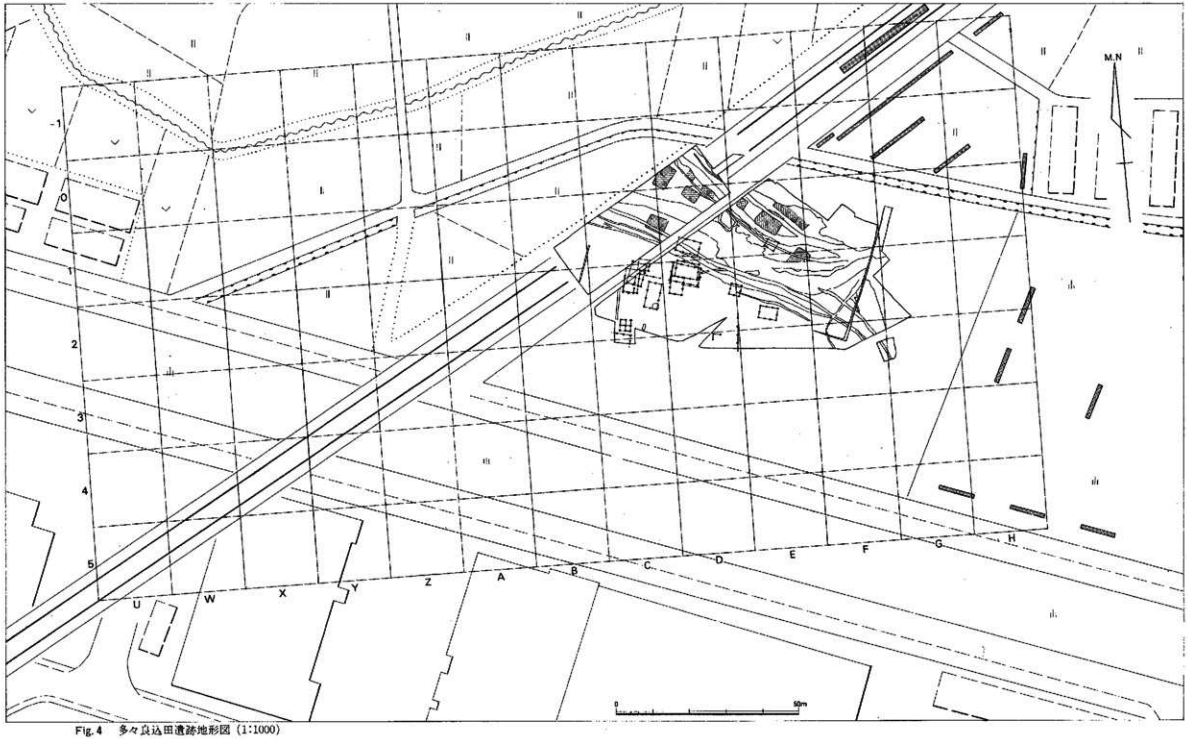


Fig. 4　多々良込田遺跡地形図（1:1000）

2．発掘区の設定と名称（Fig. 4）

第１次調査では、山陽新幹線の工事軸線に合せて発掘区を設定している。発掘区は工事軸線を基線として南北を各８ｍの二区分し、発掘区東北端より７ｍから西南端までの48ｍを各８ｍで区画した６区に分け、計12区を設けた。したがって、発掘区は一辺８ｍのグリッドを一単位として、Ａ１区・Ｂ１区～Ａ６区・Ｂ６区としている。

第２次調査の際にあたって、周辺の試掘調査のデータをもとに遺跡の拡がりがある程予想されたので、その範囲全体に一辺20ｍのグリッドを設定した。このグリッドは、いわば大区画にあたり、東西の軸をＷ～Ｚ、Ａ～Ｈの12区、南北の軸を-1・０～５の６区に区分し、各グリッド名称はその交わりを読むことにした。たとえば、南北がＡ列、東西が３列の一区画はＡ３区と標示される。

大区画のグリッドの内部は、さらに一辺４ｍで区画した計25個の小グリッドを設けて遺物取り上げや現場での遺構観察単位とした。小グリッドの名称は、大グリッドに準じ、ａ～ｂ、１～５の小文字で表現した。しかし報告書の表現では、かえって煩雑になるので、遺構の位置については大グリッドの糸辺にあたるという説明に統一した。したがって、第３次調査区は、Ｃ２区・Ｄ１区南東半、Ｄ２区……という地区表示となる。なお第１次調査地区の遺構位置をしめすばあいも、叙上の地区標示を使用する。

3．第３次調査日誌　（1979年３月22日～６月８日）

３・19～22　ユンボを使用して表上（水田耕作土・床土）の除去作業を行い、並行して、包含層の発掘を行う。耕作上・床土には土師・須恵器の細片がまばらに入っている。遺物包含層の厚さは一定せず、Ｃ２区では５～10cmの厚さがあるが、Ｄ２区では薄くほとんどみない部分もある。

３・26～４・５　遺構面検出作業。この間降雨が多く、排水作業に手間どる。発掘区西壁に沿って溝切りを行う。第１次調査区からつづくＳＤ01・02・03・04・05・06のほかに、新たな溝が数条検出された。

４・６～18　ＳＤ04北側、Ｅ２区に検出された古墳時代の竪穴住居址、溝などの発掘調査を行う。竪穴住居址は６棟だが完存するものはない。ＳＣ08は五角形のベッド状遺構をもった大型の竪穴住居址。総じて出土土器の量は少ない。１×１間の掘立柱建物ＳＢ12を検出。

４・20～５・２　ＳＤ04・05・06といった発掘区中央部を発掘。第１次調査で律令時代の溝とされた05・06からは須恵器等はみられず、弥生終末期を若干含んだ古式土師器のみが出土した。23日よりＳＤ04の発掘を開始。上層（黒褐色粘質土・淡青灰色砂質土）から黒色土器（Ａが多）、緑釉陶器、越州窯系青磁が検出されはじめた。27日同下層より銙丸鞆、青銅製釣針が

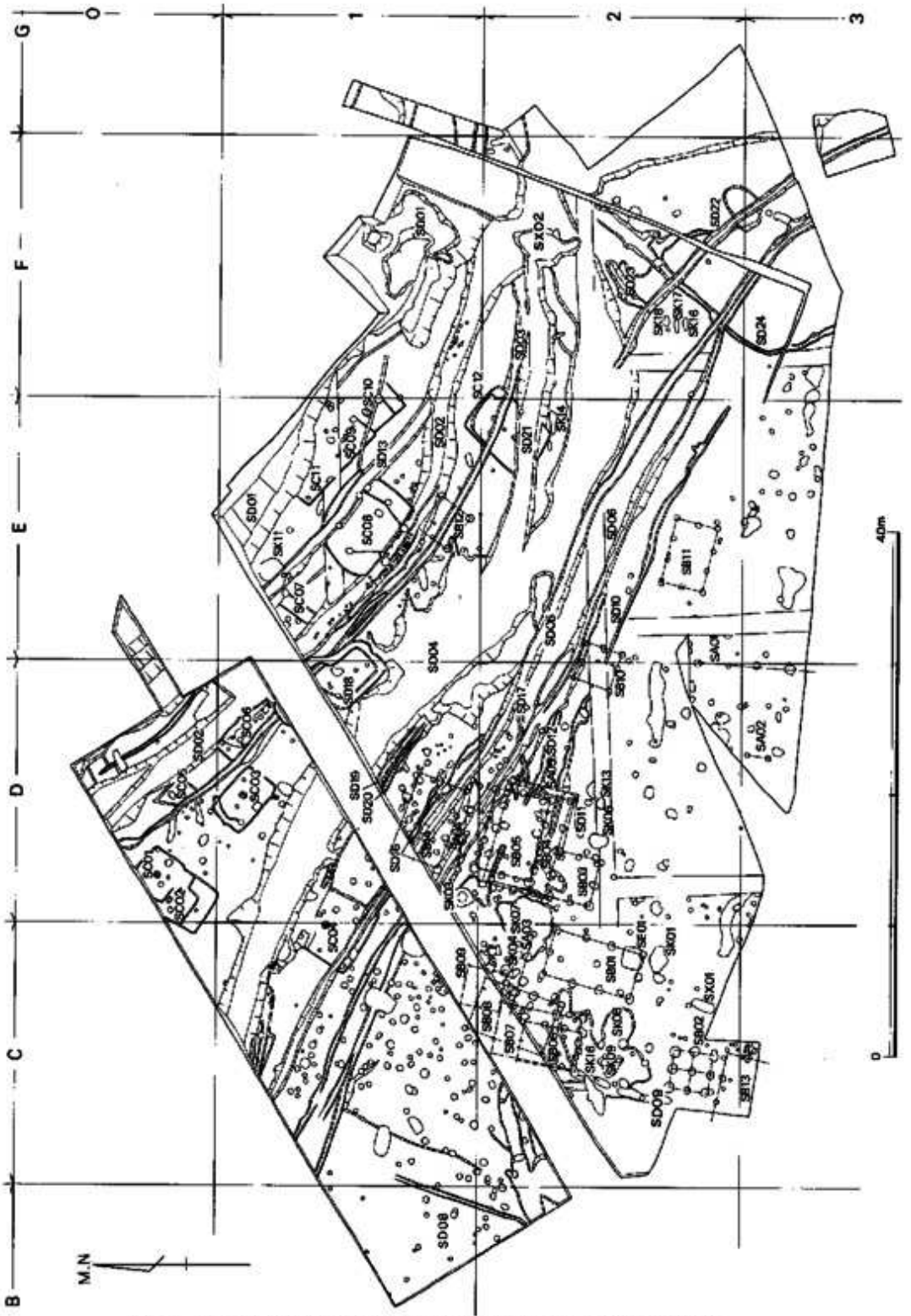


Fig.5　多々良込田遺跡第１次～第３次調査区遺構配置図（1:500）

出土。30日、下層より鴻臚館系丸瓦出土。また下層を主体にして、馬歯が多数出土した。

５・４～10　ＳＤ04の南側に検出された律令時代遺構の発掘にかかる。ＳＢ06～09、04・05の周辺は掘立柱以外の小竪穴、土坑などが混在しており、建物のまとまりに困難をきわめた。

５・12～24　検出遺構の実測を行う。この間、各遺構細部写真の撮影。建物部分については実測終了後に再度精査後、掘方の半分を切り、断面図作製。24日、県文化課技師上野精志君、大門古墳群調査中事故により他界された（合掌）。

５・26　緊急係会議。発掘現場における安全対策を再度確認。

５・25～28　　第Ｉ期発掘区埋め戻し。

５・29～６・２　第II期発掘区の表土除去作業（ユンボ使用）

６・３～６　遺構検出作業後、ただちに遺構発掘作業に移る。ＳＢ11を検出。ＳＤ04はゆるく弧を描きながら、第２次調査によって確認された段落ちに流れこむ。新たにＳＤ22・23・24という古式土師器を含む溝が検出され、第２次調査区に連接することが判明した。

６・６～８　II期調査区の写真撮影、実測を行い、８日にすべての調査を終る。

４．第３次調査の概要(Fig. 5・6・7)

第３次調査地区は、73年に行なわれた第１次調査区の南に接し、大地区表示のＣ２、Ｄ１・２・３、Ｅ１・２、Ｆ１・2区が含まれ、調査面積は約2100m²である。

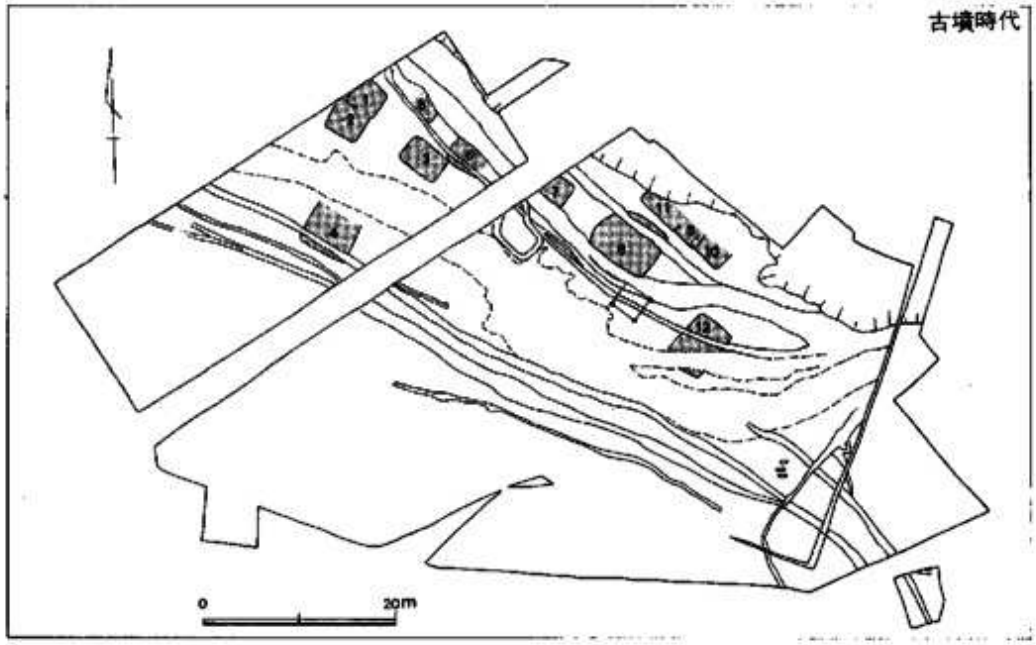
当調査区で検出された遺構は、溝25、竪穴住居址６、掘立柱建物14、柵５、井戸１、土坑16土坑墓１である。出土遺物では、弥生時代中期後半を上限とし、Ｃ２区から数片の土器片が採集されているが、明確な遺構を伴わない。弥生時代終末期（西新式）から、古式土師器Ｉ・II・IIIＡ期①にかけて、竪穴住居址・溝・掘立柱建物などで構成される集落をなしている。ついで奈良後半から平安時代前半代に、溝・柵・掘立柱建物・井戸などからなる施設が造営されている。その後の遺物はみとめられない。以下、古墳時代・律令時代の遺構を概観しておきたい。

古墳時代

当遺跡の立地する沖積微高地断崖面に沿って検出された。遺構検出面は、標高約 3.0mにあり、茶褐色粘質土の上面であるが、断崖面に向って砂質に変る。

竪穴住居址は６棟検出され、第１次調査を合せて12棟となる。また当調査区では１×１間の掘立柱建物ＳＢ12も検出された。竪穴住居址ＳＣ９～11を除いて、いずれも古墳時代の溝に切られている。これらの出土遺物は整理が終了していないので詳しいことは不明だが、第１次調査におけるＳＣ01～ＳＣ06出土土師器とほとんど変るところがない。また住居址相互の重複があって、数回の建て替えが行なわれている。

この期に属する溝は13条検出されている。その方向は、微高地北端線にほぼ平行し東南から西北に向う。ＳＤ10を南端として、その南側には存しない。この期の古式土師器が、ＳＤ10を



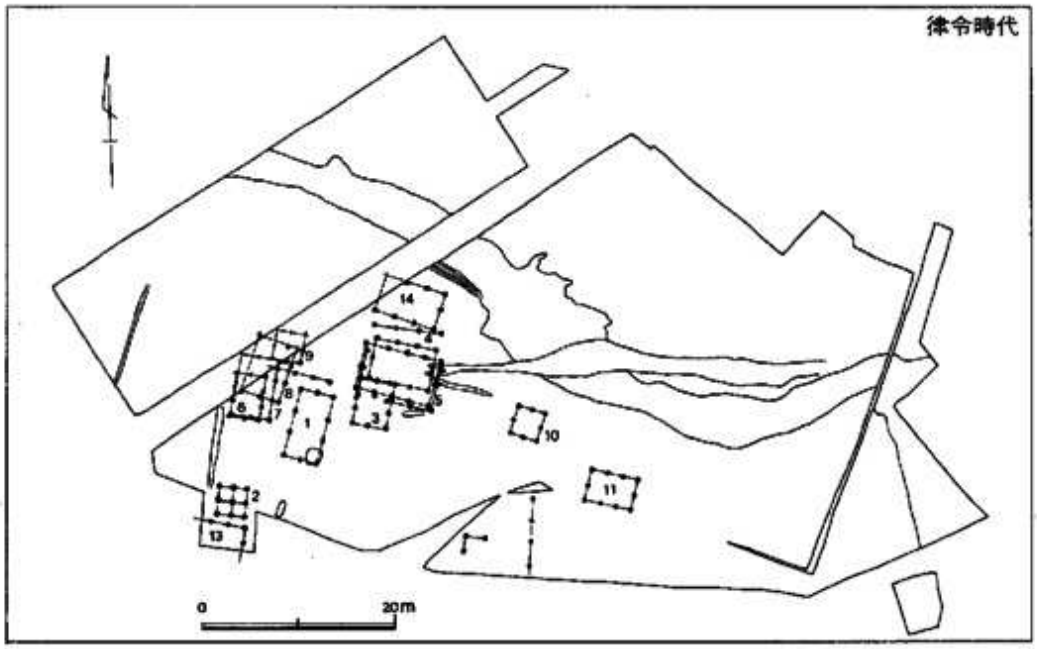


Fig.6　時期別遺構配置図（1:800）

境にしてほとんど出土しないことからみても、古墳時代集落が限られた範囲内に形成されたと解される。微高地端のＳＤ01は、ＳＣ11を切り崩していることと、攻撃斜面状の急な断崖面をなすことなどから、多々良川の度重なる氾濫によって生じた段落ちと思われる。この段落ちが古墳時代集落形成期に、現在の東端よりどれほど延びていたか知るよしもない。後の奈良時代溝ＳＤ04によって完全に消滅した住居址も予想されるところであり、１・２棟の住居址の増加が推測されてよいであろう。なお、ＳＣ01・02以西にこの期の生活空間が拡がることは　溝の延長によっても明らかである（古墳時代の遺構・遺物については、次年度報告予定）。

律令時代

当調査区で検出されたこの期の主な遺構は、掘立柱建物13・柵３・溝７・土坑10・土坑墓１がある。この段階では、ＳＤ01は完全に埋没しており、ゆるく多々良川に向って下降する微高地となっている。

この期の遺構配置状況は、溝ＳＤ04を北限として、その南西に拡がる。東端は、第２次調査の際Ｆ２区で検出された段落ちＳＤ25を境にしていると思われる（ただし、ＳＤ25が人工的なものか自然の形成か明らかでない）。南側はＣ３区の一部にＳＢ13が検出されており、西側においても、ＳＤ08以西に柱穴らしきピットがみとめられることから、南、西ともに遺構の拡がりが予想される。

掘立柱建物は、東西棟５、南北棟５、方形の建物３からなり、そのうちに高倉床庫と思われる２×２間の総柱建物２棟を含む。全体的に建物の規模は小さい。建物は最高３回の重複があって、繰り返し建て替えられたものである。掘方の切り合いは少なく、04・05→03、07→06、井戸ＳＥ01→ＳＢ01の先後関係があるにすぎない。

第１次調査区のＢ１・２、Ｃ１区での建物配置構成が不明のため如何ともいいがたいが、当調査区内における建物配置は、東西棟ＳＢ04・05・14を軸にして、西側に南北棟あるいは倉庫を東側に小型の建物を配する。これらが単一時期の造営でないことはもちろんだが、建物の配置に一定性のある点、方向に関しても糟屋郡条里に近似する一群があって注目される。

溝はＳＤ04埋没後にＳＤ17（ＳＤ21に続く）が掘削され、両者とも東端の段落ちＳＤ25に接続する。ＳＤ04は、第１次調査と同様に豊富な遺物を出土し、今回は新たに石帯、銙帯などが加った。上・下２層に分れ、下層は８世紀中葉～９世紀前半のものが多く、上層は９～10世紀の中葉頃までの遺物を含む。ＳＤ09は小溝だが、建物群の方向に一致するもので、第１次調査区にのび、屈曲している。土坑は不整形なものが多い。また出土遺物も細片で、性格のわかるものもないが、ＳＫ06には焼土・木炭片・灰などが多量に入っており、そのなかから鞴羽口が検出された。またＳＫ08や柱掘方から鉄滓が出土しており、本遺跡内で製錬もしくは鍛冶が営まれたことをしめしている。

註①　古式土師器の段階は次の文献による。武末純一「早良平野の古式土師器」『古文化談叢』６　1979。

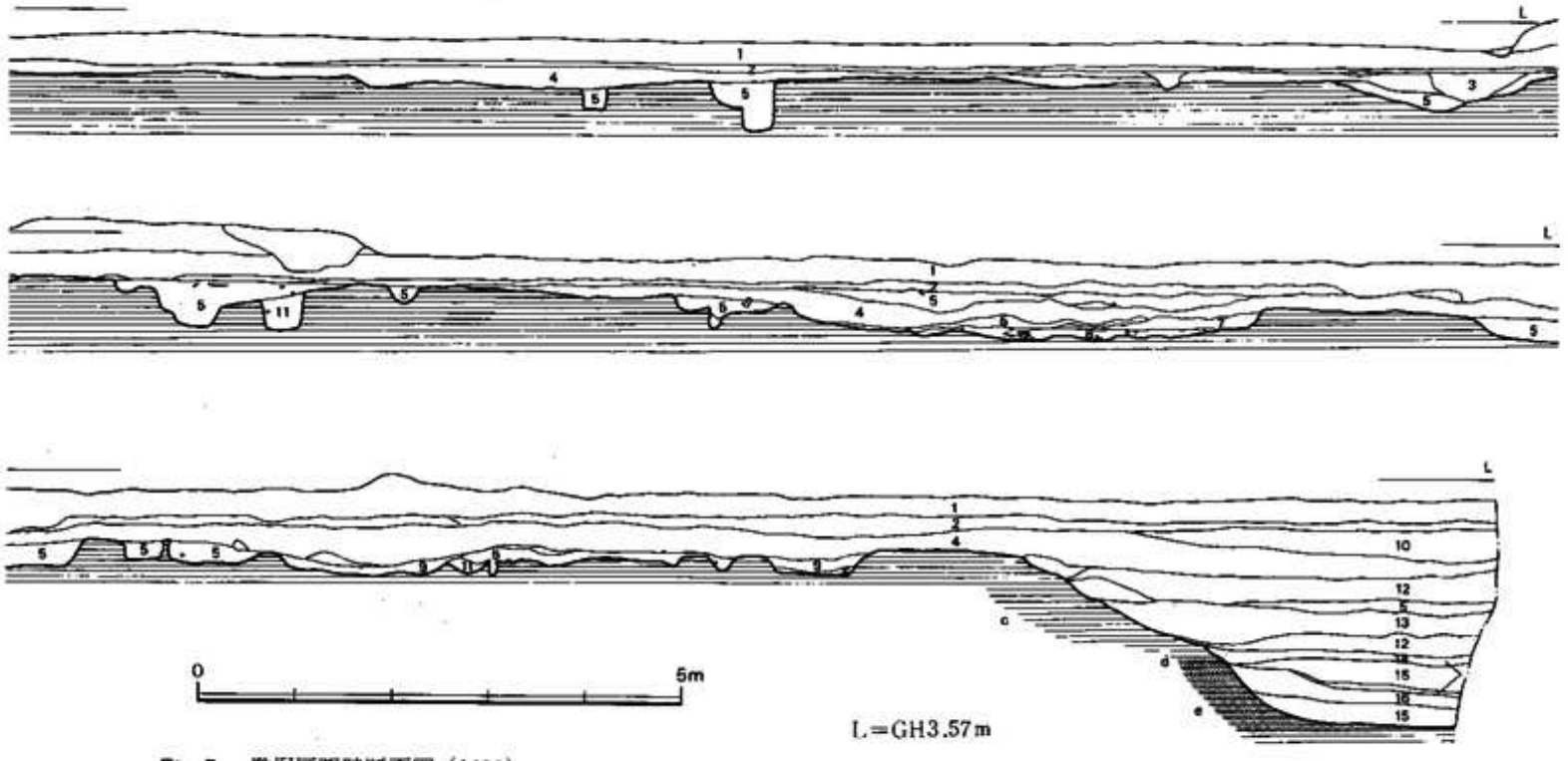


Fig. 7　発掘区西壁断面図（1:80）

a　盛 土	1.耕土	6.暗灰色細砂	11.黒色粘質土	16.暗青灰色粘質土
b　盛土(攪乱)	2.床土	7.灰褐色細砂	12.灰褐色粘質土	
c　茶褐色粘質土	3.暗褐色細砂	8.暗灰色粗砂	13.暗灰褐色粘質土	
d　暗青灰色細砂	4.淡黒褐色粘質土	9.淡青灰色細砂	14.青灰色粗砂	
e　暗青灰色砂礫	5.黒褐色粘質土	10.暗黄褐色粘質土	15.青灰色粘質土	

Ⅳ 遺　　構

包含層の残存状況からみて、発掘区南辺Ｃ１区ではさほどの削平は予想されない。しかし、中央部Ｄ２・３区ではほとんど包含層の認められないところもあり、こうした範囲での遺構検出面（発掘面）は、水田開墾によって削平されたと考えている。また今報告では扱わないが、Ｅ２・３区、Ｆ２区での竪穴住居址壁面の残りが５cm未満の部分もあり、多々良川氾濫原に近くなるにしたがって削平あるいは流出されている。

１．柵（付図）

本遺跡で検出された柵列は、これまで５列ある。第２次調査区に含まれるものが２列あるが建物群理解のためにここで述べることにする。

ＳＡ01　Ｄ２・Ｄ３区にかけて、その東端部に検出された南北方向の柵である。３間ほど確認されているが、以南は未掘区につづく。2.1m（７尺）の等間で、掘方は40～50cmの不整な円形。深さは25～30cmを測る。

ＳＡ02　Ｄ３区中央部北よりに検出された。鍵の手に曲る東西１間、南北１間分が確認されている。掘立柱建物の一部とも思われるが、伴う柱穴がないので柵としておく。東北1.6m、東西1.9mである。柱痕跡がみとめられる。深さは30cmを測る。

ＳＡ03　Ｃ３区東北隅に検出された東西方向の柵である。西端は未掘なので全長は不明である。柱間は1.8m（６尺）の等間。掘方は不整円形で、径30～70cmとバラツキがある。深さは20～30cmを測る。この柵はＳＢ05の南側柱に柱筋が通る。

ＳＡ04　Ｄ１区南西隅で検出された東西方向の柵である。３間分検出され、西側はＳＫ03から未掘区に至る。掘方は径30～50cmの不整な円形で深さ20～35cmを測る。柵柱間は2.4m（8尺）の等間である。

ＳＡ05　ＳＢ03の東・南・西側柱に平行する柵で、南西隅は空間になったと思われる。おそらくＳＢ03の目隠し塀であろう。柵柱間は2.4m（８尺）の等間。掘方は不整な円形で深さ15～25cmを測る。

２．掘立柱建物（Fig.８～11）

ＳＤ04を境に、その南側にのみ造営されている。とくにＣ２区からＤ２区にかけて繰り返しの建替えがみとめられる。Ｅ２区に検出された１×１間のＳＢ12は、埋土や建物規模から古墳時代集落址に伴う建物と思われるので、ここでは扱わない。

建物として平面規模が確認しえたものは13棟であるが、それでもまとめきれない掘方が点在

する。小竪穴＝柱掘方ではないが、検出棟数＋α は残念ながらみとめざるをえない。

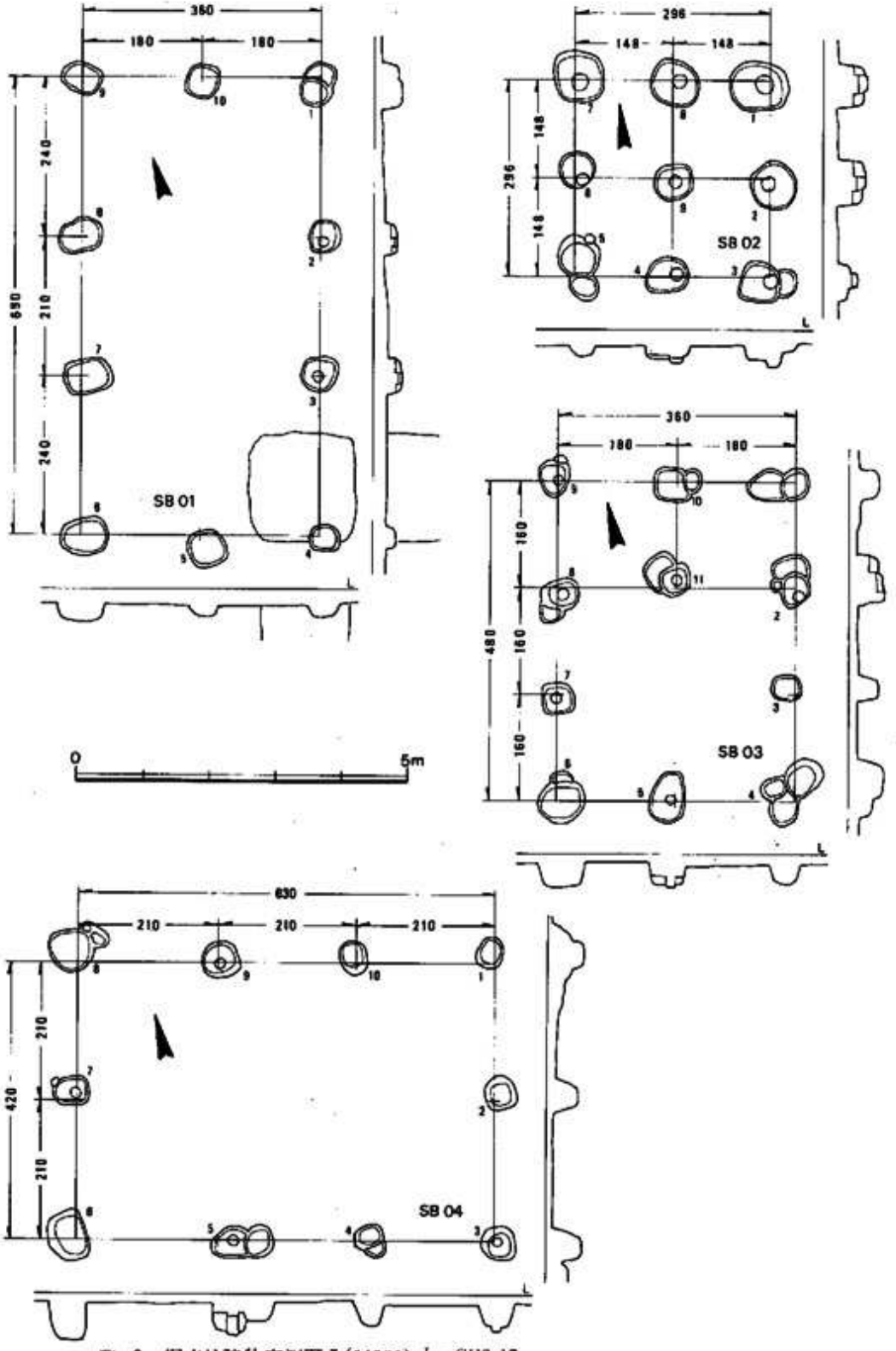


Fig.8 掘立柱建物実測図Ⅰ(1:100) L=GH3.17m

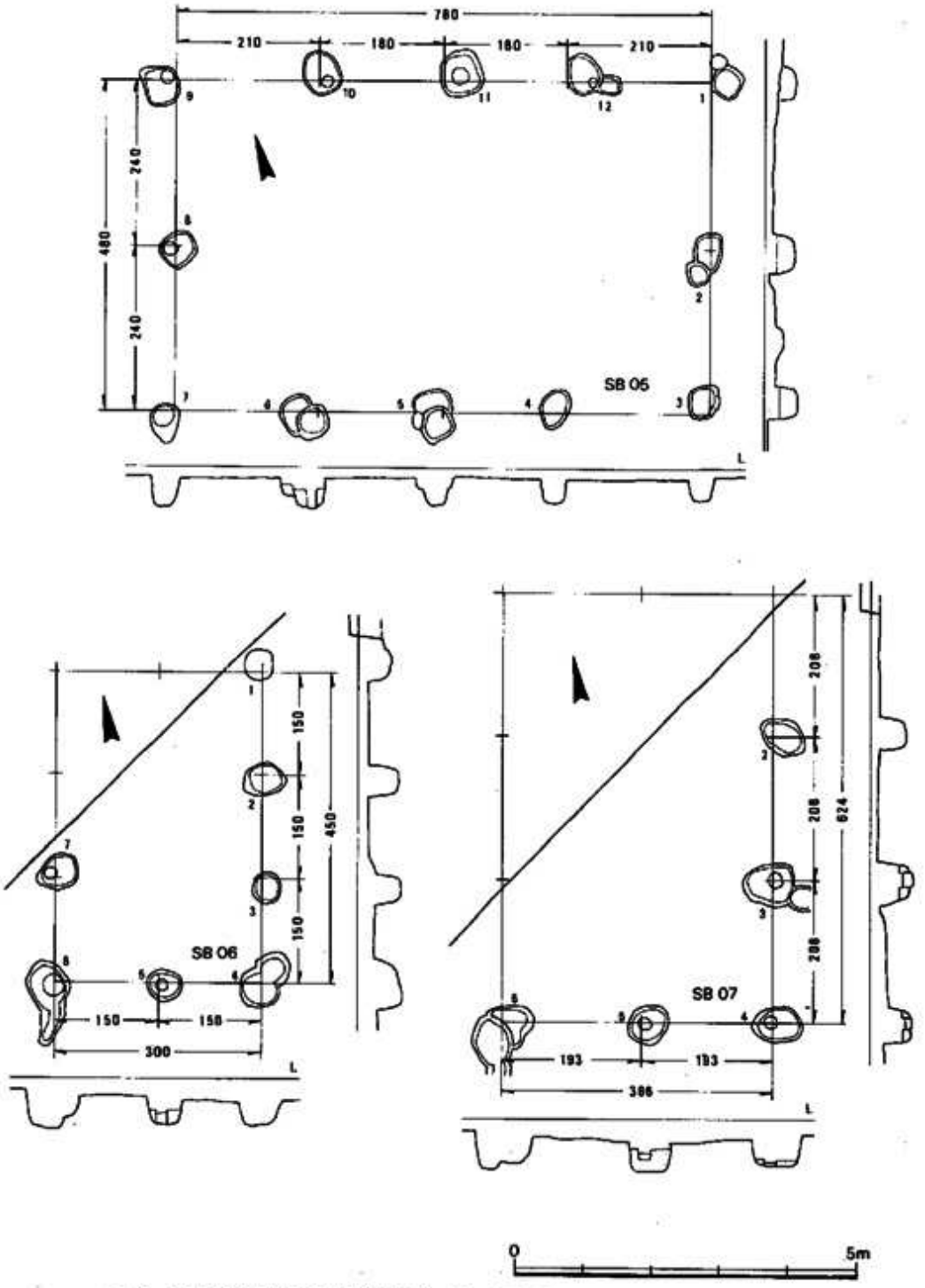


Fig.9　掘立柱建物実測図Ⅱ(1:100)　L=GH3.17m

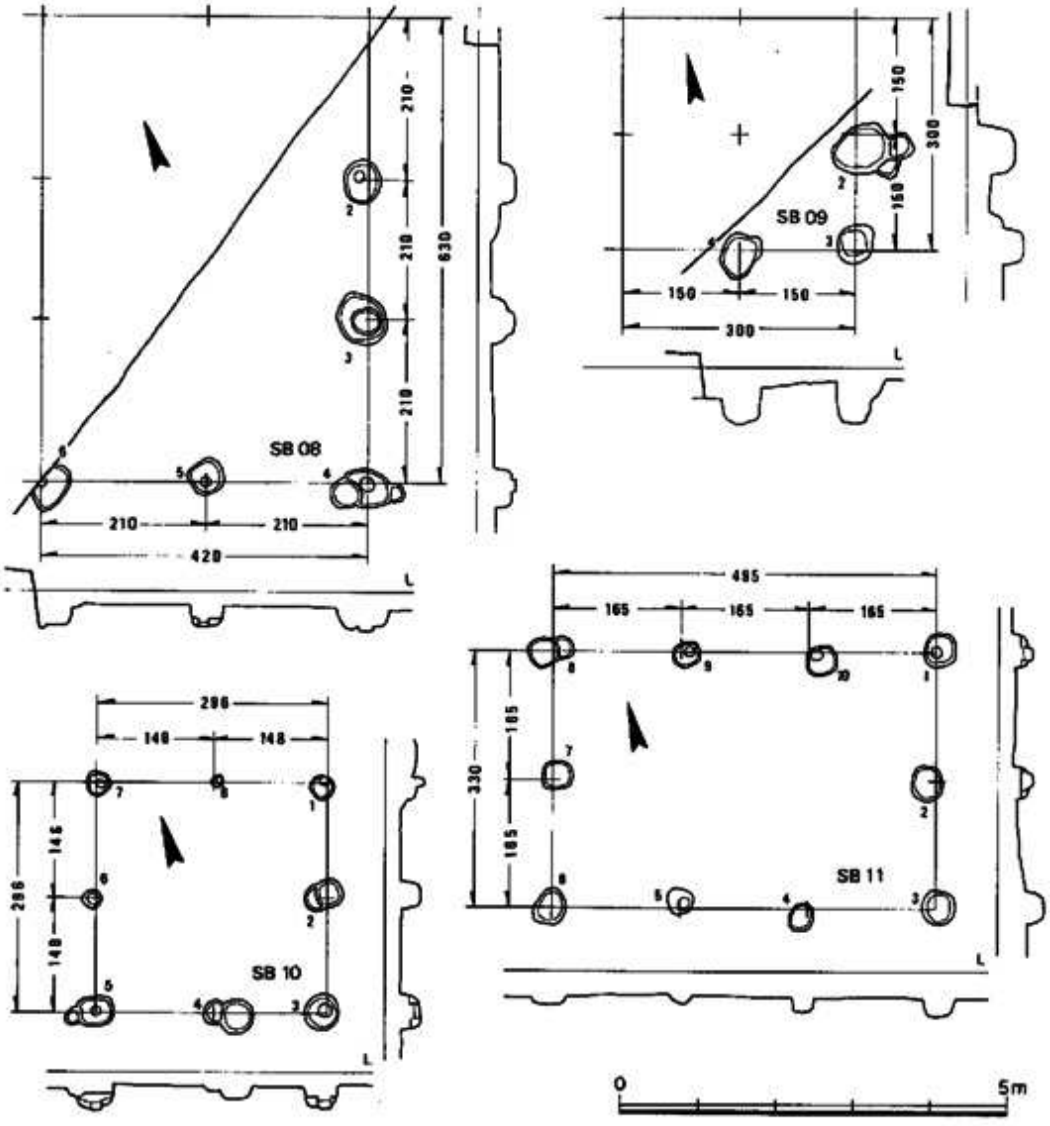


Fig.10 掘立柱建物実測図Ⅲ（1:100） L＝GH3.17m

ＳＢ01（Fig. 8） Ｃ２区中央東よりに検出された側柱だけの建物である。桁行３間、梁行２間の南北棟で実長は、桁行690cm、梁行360cmを測る。柱間寸法は桁が８・７・８尺、梁は６尺等間である。掘方は60～70cmの隅丸方形、深さは20～30cmを測る。西側柱の掘方は、すべて東西に拡長された形態で柱痕跡はみとめられず、抜かれたものであろうか。東側柱には、２個の掘方に径20cmの柱痕跡が残る。南東隅の掘方４は、井戸ＳＥ01埋没後に掘られており、本建物はＳＥ01後の造営である。

ＳＢ02（Fig .8） Ｃ２区の中央部南よりに検出された総柱の建物である。桁・梁とも２間の

正方形。実長は、桁・梁とも2.96mを測り、柱間寸法は各5尺の等間である。掘方は60～80cmの不整な方形で、深さは20～40cmを測る。西南隅掘方を除いて径20～25cmの柱痕跡がみとめられる。掘方埋土からは土師・須恵器の破片が出土したが、細片のため詳細は不明。

SB 03（Fig. 8） D２区の西よりに検出された側柱と床束柱をもつ建物である。桁行4.80m、梁行3.60mを測り、柱間寸法は、桁が16尺の三等分（≒5.3尺）、梁は６尺の等間である北の梁間柱の南１間に床束柱がある。掘方は40～70cmの不整な円形で、深さは30～45cmを測る。掘方の半分近くに柱痕跡がみとめられる。掘方１はＳＢ04、掘方２はＳＢ05の掘方と重複し、ＳＢ04・05より新しい。掘方埋土から土師・須恵器が出土しているが細片で詳細は不明。

SB 04（Fig. 8） D２区、西北よりの検出された側柱だけの建物である。桁行３間、梁行２間の東西棟。実長は、桁行6.30m、梁行4.20mを測り、柱間寸法は桁・梁とも７尺の等間である。掘方は40～70cmの不整方・円形で、深さは35～60cmを測る。掘方のいくつかに径15cm前後の柱痕跡が認められる。掘方埋土より土師・須恵器片が出土したが細片のため詳細不明。

SB 05（Fig. 9） D２区、西北よりに検出された側柱だけの建物である。今回の調査区では最大規模をもつ。桁行３間、梁行２間の東西棟である。実長は桁行7.80m、梁行4.80mを測り、柱間寸法は、桁が７・６・６・７尺、梁は８尺の等間と思われるが、桁の柱間は一定せずバラツキがある。掘方は50～60cm、方形・楕円の不整形で、深さは30～45cmを測る。北側柱には径15～20mの柱痕跡がみとめられる。掘方埋土から土師器・須恵器の細片が出土した。ＳＢ04とは重複するが、掘方の切り合いはない。

SB 06（Fig. 9） C２区、中央部北よりに検出された側柱だけの建物である。北西端は未掘であるが、桁行３間、梁行２間の南北棟と考えた。実長は桁行4.50m、梁行3.0mで、柱間寸法は桁・梁とも５尺の等間である。掘方は40～60cmの不整な円形で、深さは30～50cmとバラツくが建物規模からすると深いようである。一部に径15cm前後の柱痕跡がみとめられる。掘方埋土から土師・須恵器の細片が出土した。ＳＢ07と重複し、掘方７はＳＢ07の掘方を切っている。

SB 07（Fig. 9） ＳＢ06に重複して検出された側柱だけの建物である。西北半は未掘だが、桁行３間、梁行２間の南北棟と考えた。実長は桁行が３間だとすれば6.24m、梁行は3.86mを測り、柱間寸法は桁が７尺等間、梁は6.5尺の等間である。掘方は50～70cmの楕円形で、深さは40～45cmを測り、径18～20cmの柱痕跡がみとめられる。掘方５は、掘方内を一度埋めた後に柱を据えている。掘方埋土から土師・須恵器細片が出土した。

SB 08（Fig. 10） C２区北よりに、ＳＢ06・07と重複して検出された。西北半は未掘だが、南梁柱間が等間であることから、桁行３間、梁行２間の側柱だけの南北棟建物と考えた。桁は柱間が南より７・６尺であるので、おり返して７尺を想定すると、桁行実長は6.0m、梁行実長は4.2mとなる。柱間寸法は桁が７・６・７尺、梁は７尺の等間である。掘方は50～65cmの不整な円、楕円形を呈し、深さ20～30cmとやや浅めである。掘方埋土から古式土師器の細片が出土し

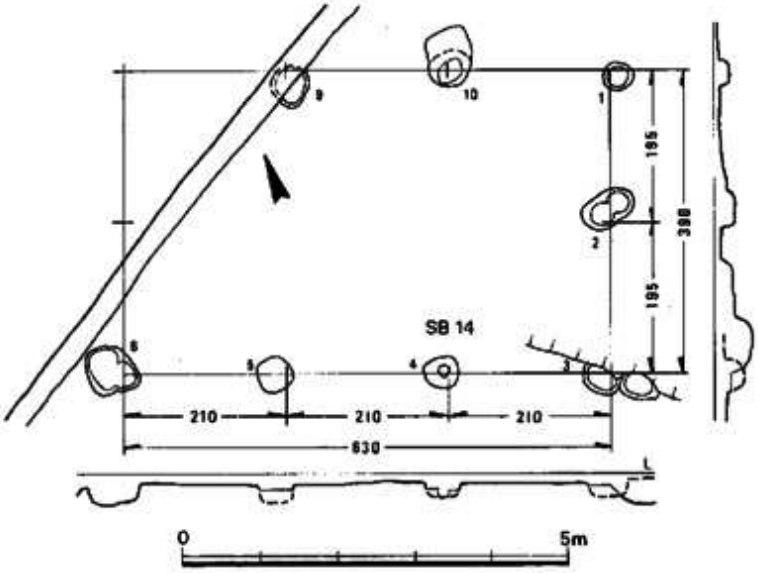


Fig.11 掘立柱建物実測図Ⅳ(1:100) L=G113.17m

たが、須恵器片はみとめられなかった。

SB09 (Fig. 10) C２区、東よりの北端部で検出された。SB08の北半に重複する。その西北側大半が未掘のため断定しえないが、掘方の形態・深さがきわめて類似することから一つの建物と考えた。その規模は、第１次調査区に対応する掘方がみとめられないことから、桁・梁２間を想定した。また掘方が他に較べて深いことを勘案して、総柱の建物に復元した。

予想される柱間寸法は５尺等間で、SB02とほぼ同規模となるであろう。掘方は50～70cmの不整円形で、深さは50～60cmを測る。掘方３はSK04と重複し、それより新しい。掘方埋土から土師・須恵器の細片が出土した。

SB 10 (Fig. 10) D２・E２区にかけて検出された側柱だけの建物である。桁・梁行ともに２間の方形で、実長は一辺3.0m、柱間寸法は５尺の等間である。掘方は25～40cmと差が大きい。掘方８は溝と重複し、その下底面での検出のため、家屋荷重による柱基底凹部の大きさである。掘方の深さは10～20cmを測る。掘方埋土から奈良期の土師・須恵器細片が出土した。

SB 11 (Fig. 10) E２区の中央部に検出された側柱だけの建物である。桁行３間、梁行２間の東西棟建物で、実長は桁行4.95m、梁行3.30m、柱間寸法は5.5尺の等間である。掘方は30～40cmの不整な隅丸方形を呈し、発掘面から10～20cmの深さである。柱痕跡は数個の掘方にみとめられ、その径は15cm前後である。掘方内埋土から奈良期の土師、須恵器が出土した。

SB 13 (付図) C２区からC３区にかけて検出された側柱だけの建物である。そのほとんどが未掘区に入るので規模は不明である。建物の方向は、東西の柱間が６尺、南北が５尺と思われるため、本遺跡の小規模建物例からみて東西棟になる可能性が強い。掘方は径40～50cmの円

形をなし、35～45cmの深さである。

SB 14（Fig. 11） Ｄ１区の西南隅で検出された側柱だけの建物である。西端部は未掘のため明らかでなく、桁行は３間もしくは４間である。梁行は２間で、実長は桁が6.3ｍ（３間）、梁行3.9ｍを測る。柱間寸法は桁が７尺、梁が6.5尺の等間であろう。掘方は径40～50cmの不整な円形で、発掘面から20～30cmの深さである。掘方埋土から古式土師器の細片が出土した。

３．土坑・土坑墓（Fig. 12・付図）

律令時代に属する土坑は、主なもので10ヶ所検出された。しかし、土坑内埋土・覆土から出土する遺物は土器といっても細片が多く、年代を限ったり、用途・性格を示唆するような出土状況をしめすものはない。

SK 01（Fig. 12） Ｃ２区南東隅よりで検出された。2.1ｍ×1.4ｍの不整形をなす。深さ約10cmほどの浅い土坑である。覆土は黒色土。

SK03（Fig. 12） Ｄ２区西南隅に検出された。短径1.4ｍ、長径1.6ｍの楕円形。深さ15cmを測る。覆土は黒色土である。遺物は少量の土師・須恵器片および瓦小片が出土した。

SK 04 Ｃ２区北西隅で検出された。建物ＳＢ09と重複し、その掘方に切られている。覆土は黒色土。土師・須恵器破片が出土した。

SK 06（Fig. 12） Ｄ２区の中央部西よりに検出された。長径1.5ｍ、短径1.0ｍの不整な楕円形を呈し、深さは５～10cmと浅い土坑である。埋土は黒色土中に、焼土・灰を相当含んでいた。土師・須恵器片・瓦片のほか鞴羽口片（Fig. 28）などが出土した。

SK 07 Ｃ２～Ｄ２区の北よりに検出された。4.5×4.1ｍの不整な平面形で、深さは10～15cmと浅い土坑である。土師・須恵器片のほか瓦片、鉄滓なども出土した。ＳＡ03と重複しているが、それより新しい。

SK 08 Ｃ２区の中央部に検出された。長径3.4ｍ、短径2.4ｍの楕円形で、深さは25cmである。覆土は黒色土、土師・須恵器等が出土した。

SK 09 Ｃ２区の中央部ＳＫ08の西に接して検出した。20×1.6ｍの不整形、深さは20cmである。覆土は黒色土。土師・須恵器片が出土した。

SK 10 Ｃ２区中央部西よりに検出された。長さ1.4ｍ、幅0.4ｍの隅丸長方形、深さ25cmを測り、墓坑かと思われたが、明確な副葬遺物を伴なっていなかった。埋土は黒褐色土、土師・須恵器小片が出土した。

SK 12 Ｃ１区南西隅に検出された。発掘区端の溝切りの際検出されたため、大部分が未掘区に入っており、平面形は明らかでない。

SK 13（Fig. 12） Ｄ２区中央部に検出された。長径0.9ｍ、短径0.6ｍ、深さ10cmほどの浅い土坑である。覆土は黒色土。土師・須恵器の破片が少量出土した。

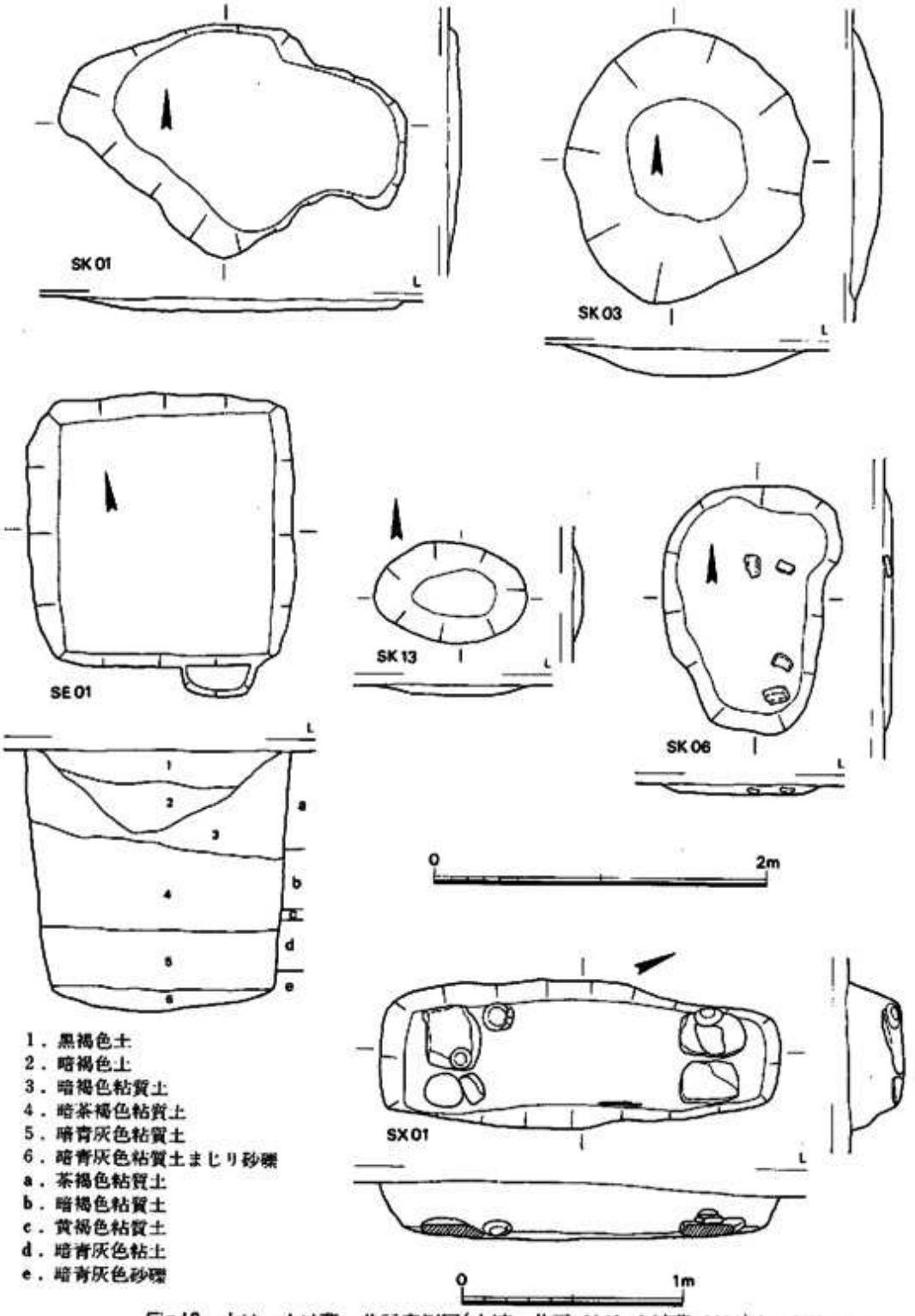


Fig.12 土坑・土坑墓・井戸実測図(土坑・井戸 1:40、土坑墓 1:30) L=GH3.17m

SX 01（Fig. 12） C２区の中央部南よりに検出された。長1.8ｍ、幅0.65ｍの隅丸長方形、深さ25cmほどの墓坑である。木棺等の棺の使用はみとめられない。床面の南・北端に、扁平な石材（花崗岩・砂岩）を敷く。頭位は明らかでないが、墓坑の形状では南に向けた葬位が想定される。副葬品としては、東壁に沿って刀子１（Fig. 28）、土師器杯３点（Fig.22）がある。

4．井　　戸

SE 01（Fig. 12） C２区、中央東よりに検出された。ＳＢ01は、井戸埋没後の造営である。東西・南北ともほぼ1.6ｍ、底面も1.3×1.4ｍの方形を呈する。深さは1.6ｍほどで床面は中央部が少しくぼむ。井戸枠は残存しておらず、埋没時に取りはずしたのであろう。井戸の湧水点はｄ・ｅ層の境にあり、水量は豊富である。埋土は２次にわたって行なわれている。出土遺物は５・６層（下層）と１・２層（上層）にまとまってみられ、３・４層にはほとんど含まれない。木製品はすべて６層からの出土である。下層は瓦を本体として、小量の土師・須恵器片が、上層は土師・須恵器片が出土している。上層と下層では出土遺物の年代が逆転しているが、これは上層が周囲の土砂を集めて埋められたことをしめす。

5．　　溝

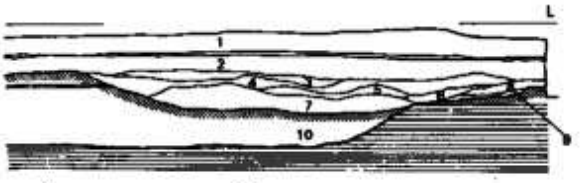


Fig.13　SD04 発掘区東断面図（1:80）

ＳＤ04　第１次調査区より連続し、Ｄ１区からＥ２区に検出された。東は第２次調査区で段落ちに接続する。溝幅は 4.5～6.5ｍを測り至るところに拡幅部分があって一定しない。深さは40～50cmである。溝底レヴェルは東・西両端で20cmほど西側が低く、溝底にうすく砂層堆積があることから、小量の水の流れがあったと思われる。覆土は大きく上下２層にけられる。出土土器器は下層では略８世紀中～９世紀前半のものが多く、上層は10世紀中頃までのものを含む。本報告では、特殊遺物のみを収録した。

ＳＤ17･ＳＤ21　連接する一つの溝でＤ２区からＦ２区に直線的にのび、東端はＦ３区の中ほどで溜桝状の土坑ＳＸ02に接続して終る。ＳＢ04埋没後に掘削されたもの。出土遺物は土師・須恵器・黒色土器・越州窯系青磁・石帯などが出土した。覆土からの出土土器は８世紀代のものから10世紀中頃までを含むがＳＤ04埋没後の掘削であるから、溝の存続年数は短かかったと思われる。

SD 11　Ｄ２区中央部に検出された小溝。長さ約４ｍ、幅0.7ｍ、深さ10ｍ。遺物は微量である。

SD 12　Ｄ２区北より検出された小溝。長さ７ｍ、幅0.5ｍ、深さ15cm。遺物は小量である。

V 遺　　物

以下に報告する第３次発掘調査において出土した遺物は、包含層、土坑、井戸、溝、小竪穴などから検出されたものである。弥生時代から平安時代までの各時代の遺物を含んでいるが、今回はほぼ律令時代の遺物に限ってのみ報告する。該期の遺物はパンコンテナ約20箱分あるがその整理は完全に終了している訳ではなく、今後整理し、詳細に検討しなければならないところも多く残されている。特に全出土量の３分の２近くを占めるＳＤ04出土の遺物は、「特殊遺物」以外はほとんど未整理である。

今回の調査で出土した遺物は、材質からみると大きく土器・土製品・施釉陶磁器、瓦、金属製品（銅製品・鉄製品）、石製品、木製品に分けられる。これらの遺物、さらには伴った遺構の所属時期を決定する際の重大な指標となる土器、とりわけ土師器はいわゆる古式土師器から平安時代のものまで多量に出土しているが主体を占めるのは、奈良時代から平安時代にかけての土器である。多々良込田遺跡の性格を示唆するのは「特殊遺物」の存在であろう。特に瓦、施釉陶磁器は前回の出土資料と合わせると、かなりの個数にのぼり、本遺跡が一般集落遺跡と区別されることを暗示している。漠大な量を占めるＳＤ04出土土器の整理を通じて、本遺跡の性格はさらに追求・解明されねばならない。とりあえず復元・図化されたものを紹介し、遺物の概要を記すにとどめたい。

１．土器・土製品・施釉陶磁器

A．土　　器　（Fig.15～24，PL.16・17）

出土した土器はかなりの量にのぼっており、器種、年代的にもかなり変化に富んでいる。ために、いかなる基準をもとに分類するか苦慮されたが、時期による変化を比較的鋭敏に反映していると思われる調整手法をもとに分類し、説明を加えたい。この分類を試みた理由としては当地方の歴史時代の土師器に須恵器の調整手法の影響が看取されることが大きな理由となっている。また当地方において歴史時代の土師器編年の基準となっている大宰府周辺遺跡においても奈良時代から平安時代初期に関する資料は豊富でないのが現状であることによる。今回は、多量の土器を出土したＳＤ04出土の資料の整理が終わっていないため、このような分類に修正を加える可能性も残されているが、概観したところでは大きく修正する必要はないと思われる。基本的には土師器の分類を目的としていたが、上記のような理由により便宜的に須恵器にも適用している。なお、分類

Tab.2 出土土師器調整手法の分類

	調整手法		調整方法
a	ヘラみがき	0	不調整
b	ヘラ削り	1	回転利用
c	ナデ	2	一定方向
		3	不特定方向

した基準はTab. 2のようである。

この分類は、ロクロから切り離す場合に「ヘラ切り離し」をしていることを前提として試みている。

包含層出土土器（Fig. 15～18）

包含層出土の土器はＳＤ04に次ぐ量を示し、パンコンテナおよそ２箱分ある。その出土量の大半は、土師器および須恵器で占められるが、若干の黒色土器Ａをも含んでいる。土師器と須恵器では、土師器の破片数が多い。器種もかなり変化に富んでおり、土師器では蓋、高台をもたない杯Ａ、高台を有す杯Ｂ、甕、などが認められ、須恵器においても蓋、杯Ａ、杯Ｂ、皿、甕、長頸壺などがある。出土した土器のほとんどは小片となっており、今回、実測しえたものは、それらの約２割程度である。

土師器（Fig. 15・16）

蓋（１～３、19）　やや高い擬宝珠形のつまみを有すると思われるもの（１・２）と輪状のつまみを有するもの（19）がある。１・２の天井部内外面はａ１手法である。３の天井部外面はｂ１手法を上半に、下半にはａ１手法を施している。19は高台付の皿になる可能性も残されているが、天井部（体部）の伸び具合、口縁部の形状などは蓋としての特徴を備えるものであろう。天井部（底部）外面には、Ｃ３手法を施し、下半にはａ１手法を行なっている。いずれも淡橙褐色系統の色調を呈している。２は極めて小さい砂粒を胎土に若干多く含んでいる。

杯Ａ（４～12）　ⅰ　丸味を有する体部をもつ製品（４～６）　ⅱ　底部端が肥厚し、体部との境に段を有する製品（７・８）　ⅲ　前二者に比して小形の製品（９・10）に分けられる。これらの形状に対応するかの如く、調整手法も異なり、ⅰは体部外面をａ１手法（４）、もしくは底部から体部下半にｂ１手法（５・６）を行ない、ロクロの回転方向は時計方向である。ⅱ・ⅲは全てＣ３手法を採用している。この他に短く内彎気味の体部を有する製品（12）があり、底部には糸切り離しの状態をとどめている。なお、10は底部のほぼ中央に焼成後、両側から穿孔を行なっている。４～７、12は橙褐色、８・10は淡橙褐色、９は暗灰色を呈している。７・８は精良な胎土を使用しており、茶色粒子を含んでいる。

杯Ｂ（13～18）　13は高台の有無は明確ではないが、一応この項に含めておく。かなり大型の製品である。内面にはａ１手法を施している。いずれも磨耗が激しいが、15は底部に板目状圧痕が認められる。17は茶色粒子、16は黒色粒子を胎土に含んでいる。

甕（21～25）　いずれも基本的には肥厚する「く」の字状口縁を有し、胴部はあまり膨らまない製品であろう。大きさに大小ある。体部外面は刷毛目調整、内面は上に向かってヘラ削りを行なっているが、口頸部内面にまで刷毛目調整をしている製品がある（21・23）。26・27は甑もしくは把手付甕などの把手である。ともに牛角状を呈し、胴部から外上向に内彎しながらのびている。最終的にはナデによって仕上げている。

須恵器（Fig. 17・18）

蓋（29～42）　形態的には変化に富んでいる。特に29・30のように天井部が大きくくぼみ、天井部はＣ１手法(29)、もしくはＣ３手法（30）である。天井部の調整手法はｂ１手法を行なうもの（31・37・39)、Ｃ１手法もしくはＣ３手法と思われるもの（32・35・38・40・44）がある。なお、ヘラ削りの際のロクロの回転方向は明確な資料では時計廻りである。天井部内面は基本的にはナデによって仕上げているが、その範囲には大小がある。あまり砂粒を含まないものが多い。

杯Ａ（43・44）　口径に比して器高は低く、口縁が外反する製品（43）と器高の高くなる製品（44）がある。44は多くの砂粒、石英粒を含んでいるが、このような胎土は他の製品では認められない。

杯Ｂ（45～53）　底部と体部の境に明瞭なる稜を形成し、どっしりと安定した低い高台を有しているが、52のように端部が内外に若干突出するものもある。底部の調整手法が明確に判明するものは少ないが、50のようにＣ１手法のものと47・51・52のようにＣ３手法によると思われるものがある。45の焼成はやや甘く重ね焼きを行なった痕跡を明瞭にとどめており、重ねられた部分以外は淡黒灰色を呈している。

皿（54）　底部と体部との境に明瞭な稜を伴い、体部は短く外反する。深みのある製品である。底部にはＣ３手法が認められる。

甕（55・59）　55は頸部でややしまり、斜め上方にひらく口頸部を有する製品となるのであろう。端部は中央がややくぼむものの平坦に仕上げられ、左右に突出する形態をとっている。59は大きく二段に外反する口頸部を有する製品である。

56・57は壺、もしくは鉢の底部になると思われる。体部下半はヘラ削りに伴って砂粒が時計廻り方向に移動している。56ではヘラ削りが底部にまで及ぶのに対し、57ではそれは認められない。58は縦に長くのびる体部に、太く長い口頸部をのせた壺になるのであろうか。体部下半には回転ナデを施している。

黒色土器Ａ（Fig. 15）

図示しえたのは高台のつく杯Ｂと思われる底部一点のみである(20)。高台は低い厚手のつくりで若干外方へ向かう安定した形態をとっている。内面は幅５㎜前後のヘラみがきを行なっており、黒色に燻している。外面はＣ２手法によって仕上げている。微細なる小砂粒や雲母片を若干含んでいる。

ＳＫ01出土土器（Fig. 18）

約80片の土器破片が出土している。いずれも小破片のため、正確な個体数は判らないが、土師器が蓋、杯Ａ、杯Ｂ、高杯、皿、甕、など15個体前後、須恵器が蓋、杯など約12個体認められる。そのうち図示したのは土師器、須恵器各３個体である。

土師器（60～62）

蓋（60）は天井部から口縁部へ甘い稜を有しながら移行し、口縁端部は丸くおさめられている。高杯（62）は脚部のみ出土している。杯部については明らかでない。60・62はともに磨滅が激しく調整手法は明確にしえない。

須恵器（63～65）

蓋の天井部はＣ３手法もしくはＣ１手法（64）である。ともに天井部から口縁部へは甘い稜を有しつつ移行している。杯Ａ（65）は整美なつくりで、Ｃ３手法を施している。

SK 03出土土器（Fig. 18・19）

土坑出土の土器の量としては、最も多く次いで多いＳＫ04・ＳＫ08出土土器の約２倍量ある。図示しえたものはそのうち約１割にも満たない。残りの破片も図示した土器と同様の特徴を備えている。須恵器よりも土師器のほうが多く、黒色土器なども含まない。

土師器（Fig. 18）

蓋、杯Ａ、皿、甕、などがある。蓋（66）の天井部は上半にロクロ回転が時計廻り方向のｂ１手法、下半にａ１手法を施している。内面はやや幅の広いａ１手法によって仕上げている。橙褐色を呈している。甕には図示したものの他に、粗い平行叩きのある体部破片を含んでいる。

須恵器（Fig. 19）

蓋、杯Ａ、杯Ｂ、高杯、皿、甕、長頸壺がある。蓋には口径に比して器高の高くなる製品（70～72）がある。いずれも口縁の折り曲げは小さい。天井部にはＣ３手法を採っていると思われる。71は胎土に若干多くの黒色粒子を含んでいる。杯Ｂは鈍重な観をうける杯部に比べてきゃしゃな高台がついている。73の体部が中途で外反するのに対し、74はまっすぐのびている。皿には底部が丸味をもつ製品（76）ともたない製品（75）がある。73～76の底部もＣ３手法である。

SK 04出土土器（Fig. 19）

土器の量は土坑出土の中では、ＳＫ03に次いで多い部類に属している。土師器がかなり多くを占め、須恵器の量は少ない。図示した量は１割にも満たない。

土師器（77～82）

杯Ａ、杯Ｂ、甕、がある。杯Ａには小形で底の深い製品（78）と肥厚した底部を有する製品（77）がある。77の体部下半から底部にかけては時計廻り方向のロクロを利用したｂ１手法が行なわれている。78の底部はＣ２手法で仕上げていると思われるがあまり明確ではない。杯Ｂ（79）の体部下半は最終的にはａ１手法をしているが、底部はｂ１手法であり、それに伴って砂粒が逆時計廻り方向に移動している。皿（80）の底部は時計廻り方向のロクロを利用したｂ１手法によって仕上げている。これらの土器は、いずれも橙褐色系統の色調を呈している。甕には大形の製品（82）と極めて小形の製品（81）があるが、この他にも平行叩きを密に施した

体部片がある。

須恵器（83・84）

蓋、杯、皿があるが量は少ない。蓋（83）の天井部、皿（84）の底部はＣ３手法によって仕上げている。84には焼き歪みが認められる。

SK 06 出土土器（Fig. 19）

破片の数は比較的多いが、そのほとんどは甕の体部片である。器壁の厚さによると、２個体以上はあるようである。個体数としては須恵器が多く、図示しえた土器も須恵器のみである。

須恵器（85～87）

いずれも蓋ばかりであるが、杯の蓋と思われる85・86と壺の蓋と考えられる87とがある。後者は口縁部がわずかに内彎気味に下り、端部近くで鋭く外反する製品である。天井部はｂ１手法を施している。85・86の天井部はＣ３手法によって仕上げられている。

SK 07 出土土器（Fig. 20）

須恵器よりも土師器を多く含み、黒色土器Ａ１点をも含んでいる。図示しえた土器は総量の約１割程度であり、土師器甕の胴部片が多い。

土師器（88～90）

杯と甕がある。杯Ｂ（88）は体部内面にａ１手法を施しており、底部はＣ１手法によって仕仕上げている。甕（89・90）には大小２種ある。

須恵器（91～95）

蓋、杯Ｂ、甕などが出土している。91は25、92は30と同一個体となる蓋である。杯Ｂ（94・95）は低く安定した高台をもち、口縁がわずかに外反する。94の底部はＣ３手法が認められる。94・95ともに焼成はやや甘い。

黒色土器Ａ（96）

内面を漆黒色に燻した杯Ｂとなる製品である。磨滅しているため内面の調整手法は明らかでない。高台は外方にまっすぐのびている。

SK 08 出土土器（Fig. 20）

図示した資料は、全体の１割にも満たない。土師器は蓋、杯Ａ、杯Ｂ、皿、甕があり、須恵器も同様の器種構成をしている。土師器の量が多いが、黒色土器Ａの杯Ｂとなる製品も含む。

土師器（97～100）

蓋（97）の天井部内外面にはａ１手法、外面にはｂ１手法を行なっている。杯Ｂ（98）、皿（99）の体部は内外面ともａ１手法である。99の底部はｂ１手法である。

須恵器（101・102）

蓋、杯Ａ、甕などがある。甕(101・102)はともに天井部にｂ１手法を行なっており、101では時計廻り方向のロクロを利用し、重ね焼きの痕跡が認められている。

SK 09 出土土器（Fig. 20・21）

約１割を図示した。土師器と須恵器は、土師器に甕体部片を多く含んでいるため、土師器が多めの観をうけるが個体数としてほぼ同様であろう。黒色土器などは認められない。

土師器（103～106）

蓋、杯Ａ、杯Ｂ、皿、甕がある。蓋(103）は天井部内外面にａ１手法を施した整美なつくりの製品である。杯Ａ(104）の体部下半、杯Ｂ(106）の底部にはｂ１手法を行なっている。

須恵器（107～113）

蓋、杯Ａ、杯Ｂ、皿、甕などを含む。蓋(107・108)の天井部は最終的にはナデによって仕上げているようである。杯Ｂ(109～113)の底部はＣ１手法によっているもの(113）とＣ３手法のもの(110～112)がある。109は、包含層出土の45と同一個体かもしれない。

SK 10 出土土器（Fig. 21）

出土した土器の量は50片に満たなく、それほとんどが、土師器甕の体部片である。

土師器（114）

蓋、杯、甕があるが、いずれも小片のため全体をうかがい知れるものは、ほとんどない。

須恵器（115・116）

蓋、杯Ｂ、甕合わせて５片ある。蓋(115）の天井部はＣ１手法によって仕上げている。

SK 12 出土土器（Fig. 21）

土師器が須恵器に対してかなり多いが、総量は少ない。黒色土器などは含まない。須恵器には、蓋、杯Ａ、甕などがあるが、いずれも小破片のため、全体の形状は明瞭ではない。

土師器（117・118）

皿(117）の底部はｂ１手法による。甕は小形の製品で、口頸部は短く外反し、端部内面に段を形成しているという特徴ある形態を呈している。内外面とも荒い平行叩きによって仕上げている。他に、口頸部が「く」の字形に外反する甕、杯Ａがある。

SE 01 出土土器（Fig.21）

井戸ＳＥ01は上層と下層に分けられる。土器で判断する限り、上層と下層の新旧は逆の感をうる。土器の出土量は上層から約50片、下層から６片であり、ともに土師器のほうが多い。

土師器（119～122、124）

119～122は上層、124は下層出土である。杯Ｂ(119・121）は橙褐色を呈すシャープなつくりの製品で底部から体部下半にかけて時計廻りのロクロを利用したｂ１手法を行なっている。120は体部下半にａ１手法を施している。甕(122・124）にも大小ある。

須恵器（123、125・126）

上層出土の杯Ｂ(123）は内彎する体部を有し、底部はＣ３手法で仕上げている。高台は内側からの強い回転ナデのため、粘土が下に突出し、不安定な形態となっている。下層出土の蓋(1

26・127）は扁平な形態のもので調整手法も、天井部にＣ３手法を施すという具合に共通しているが、その場合のナデは刷毛目状工具で行なっている。上層からは、蓋、皿も出土している。

SX 01 出土土器（Fig. 22）

土師器杯Ａのほぼ完形に近い資料３個体の他に埋土中からは須恵器５点、土師器４点出土しているが、いずれも小片のため、器種は判然としない。

土師器（127～129）

いずれも近い法量を示すが、体部ののびには若干の相異がある。129は磨滅が著しく、調整手法を明らかにしえないが、基本的には、全てＣ３手法によっていると思われる。127・128の体部の底部に近いところではｂ１手法を行なっている。

SD 17 出土土器（Fig. 22）

SD 17出土の土器の量はパンコンテナ約４分の３ほどあるが、土師器甕の体部片が圧倒的に多く、他の器種の占める割合は少ない。土師器、須恵器、黒色土器Ａ、黒色土器Ｂがある。

土師器（130～133）

杯Ａ、杯Ｂ、甕がある。杯Ａ（130・131）の底部はＣ３手法で仕上げていると思われる。杯Ｂ（132・133）には、図示した土器の他に小片のため図化できなかったが、丸味をもつ体部に外反する口縁部という10世紀代の杯の特徴を有する製品がある。

須恵器（134～138）

蓋、杯Ａ、杯Ｂ、甕、壺などがある。蓋のうち、134はＣ３手法、135はｂ１手法である。134は肩部が突出する形態のものである。杯Ｂは、底部と体部との境に稜を伴っている。

黒色土器（139～143）

内面だけを黒色に燻した製品（139～142）と内外面とも黒色を呈する製品（141）がある。いずれも磨耗が激しく調整手法を明らかにしえないが、139は体部内面にａ１手法を施している。他に50点以上の小片を含んでいるが、いずれも杯になるのであろう。

SD 21 出土土器（Fig. 22・23）

土器片は約50数点出土している。須恵器の出土量がかなり多くを占め、土師器は少ない。黒色土器片８点を含んでいる。

土師器（144～147）

杯Ａ、杯Ｂ、皿がある。杯Ａ（144）は底部から体部下半にかけて、ロクロの時計廻り回転を利用したｂ１手法を行い、体部では上半にまでさらにａ１手法を加えている。145は体部に丸味を有する杯Ｂになるのであろう。

須恵器（148～151）

蓋、杯Ａ、杯Ｂ、高杯、皿、甕、四耳壺など器種は変化に富んでいるが、いずれも小破片の

ため図示したものは少ない。杯B(149) の底部はC 2 手法で仕上げている。皿(150・151) はともに口縁が外反する形態である。C 3 手法で仕上げているが、150では目の細かい刷毛目工具で撫でている。

黒色土器 (152・153)

図示したのは黒色土器Aのみであるが、黒色土器B数点も含んでいる。杯B(153) は丸味を有する体部をもち、外反する口縁部を伴うと思われる。磨滅のため体部の調整手法は明らかでない。152は内面を口縁部までC手法で仕上げている。

小竪穴出土土器 (Fig. 23・24)

小竪穴出土として一括して説明するが、正確な出土地点については別表を参照にされたい。

土師器 (154～166)

杯Aには底部と体部との境の稜が明瞭な製品(156・159) とやや甘い製品(157・158)とがある。調整手法の明瞭な157では、底部から体部下半にかけてはb 1 手法、体部内面はa 1 手法を行なっている。この製品はあざやかな橙褐色を呈している。 は器表の磨滅しているものが多い。皿には普通の大きさの製品(161) とやや小型の製品(160・162) がある。底部はb 1 手法と思われるもの(161) とC 3 手法によると思われるものがある。甕はいずれも「く」の字に外反する口頸部を有するものであるが、外反度が大きくスマートな163・165と緩やかに外反する166、および肥厚する164がある。164の頸部には刷毛目工具の端部が認められる。

須恵器 (167～177)

蓋には器高の高い製品(167) と低い製品(169) がある。168の口縁部は大きく折り曲げている。167・169の天井部はC 3 手法によって仕上げているのに対し、170はC 1 手法により仕上げられている。杯Bでは、171が扁平な高台を有し、体部が大きく外反するという特徴ある形態を呈している。皿(173) は丸味をもつ底部になると思われるが、174、175はあまり丸味をもたず、底部はC 3 手法である。175は小型の器高の低い製品である。176は高杯の杯部であろう。厚味をもつ底部より緩やかに内彎し、口縁端部はややくぼむものの、ほぼ平坦に仕上げられている。底部はC 3 手法により仕上げている。177は口縁部が大きく外反し、端部が上方に突出している。平瓶の口頸部になるのであろう。

B　土製品 (Fig. 16・28, PL.20)

竈 (Fig 16—28)　全ての破片がそろっている訳ではないが、完形の資料を出土した福岡市博多区井相田遺跡出土の製品をもとにかなり大胆に復元した。ために、その大きさにはかなりの変動があると思われる。截頭砲弾形の一側面を大きく切り取り、その部分の周辺に幅広の庇をとりつけた製品となるのであろう。どっしりと安定した脚端部を有している。基本的には外面をタテ方向の刷毛目調整、内面をヘラ削りによって調整していると思われる。

土錘（Fig. 28－13・14）　3点ほど出土している。13はＳＤ17出土である。長さ6.3cm、径3.2cm、孔径0.9cm。土師質の製品で緻密なる胎土を使用している。淡い暗赤褐色を呈している。14はＳＫ04出土。長さ3.84cm、径1.6cm、孔径0.3cmを計る土師質の製品で、淡黄褐色を呈す。この他に包含層より14に等しいものが出土した。

鞴羽口（Fig. 28－15）ＳＫ06より出土。他に破片もあるが、形態のわかるものはない。15は長さが明確でないが、先端部が炉体内に挿入されたもので、一部に鉄滓の付着が認められる。孔は先端に向って細くなり、端部で２cmを測る。

C．施釉陶磁器（巻首図版　Fig. 25,PL. 18・19）

今調査では、溝および掘立柱建物の柱穴掘方から青磁・緑釉陶器が出土した。

青磁はすべて越州窯系の製品である。破片総数30片余り、器形全容を知ることのできる１点を含めて17個体が識別できた。内訳けは、Ⅰ類６点、Ⅱ類７点、Ⅲ類２点、不明２点である。①うち９点が図示可能であった。

Ⅰ類（２～５）全面施釉のもの。２はＳＤ04の上層と下層出土片が接合した。口径15.2cm、底部は蛇目高台であろう。釉は渋く、濃い黄緑色である。胎土な密で灰色・黒色の細粒をわずかに含む。３はＳＤ04上層出土。口縁部は外上方に屈曲する。釉は薄く、淡い青緑色。胎土は密で淡灰色を呈し、黒色・白色の細粒を含む。４はＳＤ04上層の出土。いわゆる蛇目高台の底部である。高台外端部は釉をかき取る。畳付外端に６ヶ所の白色砂の目痕があり、後に砥ぎ落し整える。釉は薄く濃黄褐色。胎土は密で灰白色を呈し、黒色・白色の細粒を含む。内底に目痕はない。５は幅広の蛇目高台、ＳＤ04上層の出土である。高台端部外面は釉をかき取る。釉は薄い緑褐色を呈し、発色はよい。高台畳付外端と内底周囲に白色砂の目痕が11～12個みとめられる。整調は行っていない。Ⅰ類としては他に２点ある。その１は低い輪高台状の底部細片。高台畳付外端は釉がかき取られている。内底に目跡がある。胎土は淡灰色、外底は重ね焼きのため赤褐色。その２は体部片で淡緑灰色の釉調である。胎土は密で灰色、白色・黒色の細粒を含む。ともにＳＤ04の上層出土。

Ⅱ類（１・６～９）　体部外面の下半を施釉せず露胎のもの。すべて椀形の器形である。１はＳＤ04上層出土、釉は薄く、くすんだ緑褐色に発色している。淡灰色の胎土は密、黒色細粒２mm程度の白色砂粒を含む。６はＳＤ17出土。釉は薄く、緑灰色、全面に細かい貫入がある。胎土は暗灰色、黒色の細粒を含む。７はＳＤ04上層の出土。中央部が凹んだ円盤状高台。内底外周の４ヵ所に白色砂の目痕。外底端の目痕は砥ぎ調整。釉は薄く緑褐色で、細かい貫入がある。外面の釉はほとんど剥離している。外底高台は重ね焼きのため赤褐色を呈する。８はＳＤ04上層出土。釉は薄く、緑褐色で全面に細かい貫入がある。内底外周に白色砂の目痕がある。外底の目痕は砥ぎ研がれ痕跡をとどめない。胎土は暗灰色、２mmの白色砂粒、黒色細粒を含む。

9はＳＢ01の掘方埋土から出土。８と同様の大形の椀形。器肉の厚い外底端を面取りしている。内底外周に白色砂の目痕があるが、外底のそれは砥ぎ調整。胎土は灰色だが内側は焼成が充分でなく灰白色である。釉は淡い緑灰色、細かい貫入があり、外面ではほとんど剥離している。他に体部の破片が１点ある。

Ⅲ類（10）　高く外方にのびる輪高台をもち、全面を施釉している。ＳＤ04上層出土。内底の見込みに圏線をめぐらす　体部外面に６体の沈線があり、六花に画された口縁部になるであろう。釉は薄くかけられ、褐色味のある緑灰色を呈し、発色はよい。胎土は密で、黒色・白色の細粒をわずかに含み、暗灰色を呈する。外底の高台内に７ケの白色砂の目痕がめぐり、内底のそれはない。他にＳＤ17から同様の体部破片が出土している。

白磁（11）　ＳＤ04上層出土。口縁端部の外面に小さな玉縁がつく。釉はやや厚めだが濁りがない。胎土は密、淡い灰色白である。

緑釉陶器（Fig. 25 PL.19）

すべてＳＤ04上層からの出土である。皿と小椀がある。12は須恵質の胎土にうすく施釉されたもの、緑色ないし深緑色を呈する。高台畳付内側が段をなす。近江産か？。13は高台畳付の一部に糸切り痕があり削出し高台と思われる。高台外面端はヘラによる面取りがある。硬質の胎土にうすく施釉され、淡いウグイス色である。山城産か？　14は体部の上位で屈曲して外反する口縁部をなし、内面に鈍い段がめぐる。硬質の胎土にうすく施釉され、濃い緑色で発色はよい。山城小塩窯の製品。第１次調査出土品（ＳＤ04）と接合した。底部は糸切り痕が残る。軟質の胎土に薄く施釉され濃い緑色に発色するが、斑点状に焼きむらがある。山城石作窯址出土の無釉陶器に類似する形態、手法のものがある。

２．瓦　　類（Fig. 26・27, PL. 15）

瓦は調査区全域から出土しており、総量はパンコンテナ２個分である。種類は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。

軒丸瓦（Fig. 26－１）

小破片であるため全体はよくわからないが、前回の発掘で出土している例（福岡市教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』1975. Fig. 84－３）と同じものと思われる。それによると、中房は蓮弁よりも低く、弁根部によって区切られている。蓮弁は１＋７ある。蓮弁はかなりくずれており、複弁七葉である。間弁は２本づつ配している。外区に珠文を19～20個配している。ＳＤ04の下層より出土しており、今回の調査での軒丸瓦は本例のみである。

軒平瓦（Fig. 26－２）

瓦当面の残りが少ないため全体はわからない。上外区は偏平でやや大粒の珠文を飾り、内区文様は唐草文であるが均正・偏行かはわからない。下外区はない。顎は深い段顎であり、タテ

ヘラ削りで形作っている。凹面には模骨痕がよく残り、先端部はヨコヘラ削りしてある。砂は少なく、非常に堅緻な焼きあがりの瓦である。ＳＥ01最下層で出土した。共伴土器は８世紀後半～９世紀前半に属するもので、本例もその範囲内に入ると思われる。

丸瓦（Fig. 27－５）

丸瓦は玉縁付丸瓦は検出できたが、行基葺丸瓦はわからなかった。側面は半截したままであり、タタキ文様は縄目文が確認された。

平瓦（Fig.26－６, Fig. 27－３・４）

平瓦は全体の大きさがわかるものは１点もないが、幅がわかるものが１点ある。それは狭端側で23.9cmである。側面調整はヘラケズリを１回、１回プラス面取り、２回、半截したままのものなどそれぞれある。その中でヘラケズリを１回ないし１回プラス面取りしたものが最も多いようである。タタキ文様は縄目文、格子文してそれをスリ消しているものがある。

タタキ文様

タタキ文様は軒先瓦ではわからないが、丸瓦・平瓦において、縄目文は全般的に細かい文様で、２cmに５本～８本ある。格子文は細い斜格子文で、図示した１点のみである。側面調整方法も異なり、これだけが半截したままである。

３．金属・石・木製品

Ａ．銙帯・石帯（Fig. 28－１～３ ,PL ．21）

１．銙帯の青銅製丸鞆　ＳＤ04下層出土。幅3.7cm、高さ2.4cm、深さ0.7cmを測り下位に長方形の透し孔がある。内面に３本の鋲がある。

２．石製の丸鞆。ＳＤ04上層出土。幅4.4cm；高さ2.7cm・厚さ0.8cm、裏面、測面とも丁寧に研磨され光沢を放つ。裏面端部に面取りが行なわれている。裏面に３ヶ所のかがり穴がある。黒色で裏面には縞状の切断痕がある。石材は不明。

３．石製の丸鞆。ＳＤ17出土。全体の⅓ほどの破片である。裏面端部に面取りが行なわれている。裏面にかがり穴１ヶ所が残る。表面・側面は丁寧に研磨され光沢を放つ。白みがかった淡い青色である。石材不明。

Ｂ．釣針（Fig. 28－４，PL. 21）

長さ４cmあまりの青銅製品である。頭部は、先端を丸く巻き込んで小孔をつくり、別の銅線を二重にまいて補強している。

Ｃ．刀子・釘（Fig. 28－８～12，PL.20）

8は土坑墓ＳＸ01の副葬品、両端部を欠くが現存長21cmと長めの刀子である。欠部は片関に対応する位置の背がゆるく内弯して境をなす。9はＳＫ01、10はＳＤ17、11はＳＫ09出土の刀子片である。12はＳＫ09出土の釘。上端部を欠く。断面は略方形である。

Ｄ．木製品（Fig.28－5～7、PL.21）

櫛（7）　ＳＥ01下層出土。高さ5.2cm、幅は不明である。長方形の横櫛で、肩を丸くしている。板目材を鋸で細く引きだしたもので歯数は3cmあたり20本である。木材不明。

他に用途不明品がある。5は幅1.3cm、両端は欠損している。器面は平滑に仕上げられている。一部に墨痕らしきものがあるが詳しくわからない。6は側面、両端面を欠く。表面は円滑に仕上げられている。片面に幅の一定しない鋭い刻線がある。その面の一部に黒漆状の薄い膜がうかがえるが詳細不明。また図示してないが桜皮がある。以上はＳＥ01下層から出土した。

註①越州窯青磁の分類は次の文献による。横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978

Tab.3　掘立柱建物一覧

建物番号	規模	方向	桁行		梁行		方位（磁北より）	高床	床面積
			実長	柱間尺	実長	柱間尺			
SB01	3×2	NS	690(23)	8・7・8	360(12)	6・6	N18°E		24.8m²
SB02	2×2		296(10)	5・5	296(10)	5・5	N7°E	○	8.7m²
SB03	3×2	NS	480(16)	5.3・5.3・5.3	360(12)	6・6	N12°E		17.2m²
SB04	3×2	EW	630(21)	7・7・7	420(14)	7・7	N15°30′		26.5m²
SB05	4×2	EW	780(26)	7・6・6・7	480(24)	8・8	N17°30′E		34.6m²
SB06	3×2	NS	450(15)	5・5・5	300(10)	5・5	N12°E		13.5m²
SB07	3×2	NS	624(21)	7・7・7	386(13)	6.5・6.5	N12°E		24.1m²
SB08	3×2	NS	600(20)	7・6・7	420(14)	7・7	N21°E		25.2m²
SB09	2×2		300(10)	5・5	300(10)	5・5	N12°30′E	○	9.0m²
SB10	2×2		296(10)	5・5	296(10)	5・5	N18°30′E		8.7m²
SB11	3×2	EW	495(16.5)	5.5・5.5・5.5	330(11)	5.5・5.5	N15°30′E		16.3m²
SB13							N12°30′E		
SB14	3×2	EW	630(21)	7・7・7	390(13)	6.5・6.5	N21°E		24.6m²

実長（　）内は1尺約30cmで割った数値

Ⅳ まとめ

本遺跡の調査は、今後に残された範囲も多いので、ここでは第３次調査で得られた所見と問題点を述べ、次回以降の調査に備えることにしたい。

まず、律令時代遺構の北限とみられる溝ＳＤ04の南側に掘立柱建物群が検出されたことは、遺跡の性格を推測するうえで重要な鍵となるであろう。発掘区では13棟の建物が確認できたがいま少し増える可能性がある。建物は数度にわたる建替えのため、重複が著しいわりには掘方の切合いが少なく各建物の時期序列の決定は困難である。したがって、まず建物の方位でもって幾つかの群にまとめ、そのなかでの配置と掘方埋土出土土器の検討を行い、一時期における棟数・構成を考えることにしたい。同一方位の建物が同時存在だと決定づけるためには、配置企画に基く造営であることを証明せねばならないが、本遺跡のような小規模建物群のばあい、どの程度の企画が行なわれたか疑問である。しかし、これ以外の有効な手段がないため叙上の方法を採ることにした。

13棟の建物は、桁・梁いずれかによって磁北からの方位を求めると次の５つの群に大別される。①Ｎ７°Ｅ、②N12°Ｅ～N12°30′Ｅ、③N15°30′Ｅ ④N17°30′Ｅ～N18°30′Ｅ ⑤N21°Ｅの群であり、これに溝・柵を加えると①群はＳＢ02、ＳＡ01、ＳＤ09 ②はＳＢ03・06・07・09、ＳＡ02・04 ③はＳＢ04・11、ＳＤ08 ④はＳＢ01・05・10、ＳＡ03 ⑤はＳＢ08・14で構成される。各群の間での建物掘方の重複関係は、ＳＢ03がＳＢ04・05を切っている。すなわち③・④→②群という推移である。そこで各群ごとに建物の構成をみると、①群は倉庫１棟と柵がある。②群は南北棟建物３棟に倉庫１棟で構成される群であるが、南北棟建物は掘方の重複関係からＳＢ07→ＳＢ06という推移があり、ＳＢ07を建替えてＳＢ06とＳＢ09が造営されたと思われる。③群は東西棟建物２棟と溝がある。ＳＢ04は３×２間の東西棟建物であるが、東西・南に目隠し塀をもち、この群の中心的な建物と思われる。第１次調査区のＳＤ08もこの群と同一方向であり、区画的な溝と考えられる。④群は、東西棟建物とその南西に付属する南北棟建物および小規模建物からなる。ＳＢ05は第３次調査検出の最大規模の建物であり、③群のＳＢ04とほぼ同一場所をしめていることは注目される。柵ＳＡ03はＳＢ05の南側柱に柱筋をそろえている。⑤群は東西棟建物１棟、南北棟建物１棟で構成され、その配置は④群に類似する。ＳＢ14が中心的な建物でその南側が空間となる。

このように、建物方向からまとめた各群の構成は、南側が未調査である点と西側での建物配置が明らかでないため全体像を理解しにくい面がある。しかし建物の構成をみたばあい、ほぼ単一時期としてはまとまった配置と思われる、とくに③・④・⑤群は中心的な建物を東西棟として北に置き、その南側の東西に小規模な建物を配する構成で「コ」の字形配置ともいうべき

ものであろう。このように③～⑤の建物群は、検出棟数に数棟を加えれば一つの群として整うが、①群のように１棟のみのばあい、建物配置ブロックが異なると考えられる。逆にいえば③～⑤群は性格の近いブロックとして設定されたといえる。

つぎに、①～⑤群がそれぞれの一時期の建物群であるとすれば、各群はどのような推移序列が求められるのか、そしてその造営開始期と終末期はいつ頃か、さらにこの遺跡の性格は何如なるものかという問題を解決しなければならない。いずれも今後の調査に俟たねばならないが若干の見通しを記しておきたい。まず建物の変遷序列は⑤群から①群へという推移が予測される。その根拠の一つは掘方の重複関係の明らかな③・④群→②群に求められる点であり、もう一つは①～④群建物の掘方埋土には須恵器が含まれているのに対して、⑤群建物ではそれを含まないという点にある。消極的な根拠ではあるが、各建物群の方位が序々に北に近づく経過を辿ったとして、その変遷を想定するものである。この点が誤まりなければ、これまで保留していた井戸ＳＥ01は、②群建物に切られているので、①群に付属すると解される。

さて、これらの建物群の年代は、包含層・土坑・井戸・溝等からの出土土器・瓦からみて、ほぼ８世紀後半にその上限を求めてよいであろう。⑤～①群の建物群を各Ⅰ～Ⅴ期とすれば、Ⅰ期（⑤群）は８世紀後半に造営され、９世紀初頭まで存続したことが、当該期に属するＳＥ01下層出土土器の下限から明らかとなる。以降のⅡ～Ⅴ期については積極的に年代をしめす資料がないので如何ともしがたい。下限については、未だ断定しうる段階ではないが、大略10世紀中頃を前後する頃と思われる。包含層出土土師器にみとめられる小皿や杯Ａでも径の小さいものが本遺跡の終末期に属する土器群と考えている。[①] またＳＤ04から出土した緑釉陶器のうちFig. 25 －14・15は山城石作・小塩窯址の製品で、10世紀後半代の年代が与えられるという教示を得た。[②] 大宰府の土師器編年との対比作業は、今後に残された課題である。本報告では、出土土器の大半を占めるＳＤ04出土土器の整理作業が終了していないため、各遺構ごとに土器の概要を述べた。ＳＤ04出土土器の検討を俟って、改めて出土土師器について報告することにしたい。

遺跡の性格を考えるうえで、各遺構から出土した瓦・施釉陶磁器・銙帯・石帯などは重要である。今回は出土しなかったが、第１次調査では大宰府出土品に等しい文様塼が出土している。瓦の出土量は、瓦葺建物の存在を推測するには少なすぎ、また調査区内にかかる建物も見あたらないが、単なる持ち込みにしてはその量が多い。１・３次調査で軒丸２種及び平瓦５種がみとめられ、内橋廃寺・駕与丁廃寺出土瓦に共通する。また１・３次調査を合わせて60片をこす越州窯系青磁や銙・石帯の出土は、本遺跡が官衙的な色彩の強い施設であることを示唆する。とくに越州窯青磁の出土量は鴻臚館・大宰府についで北部九州でもっとも多量といえる。精製品のⅠ・Ⅲ類の占める割合も全体のほぼ半数にあたる。Ⅲ類の青磁は重ね焼きを行なわない精製品で「大平戊寅」銘越州窯青磁に類する釉調といわれる。

Ⅵ まとめ

銙は、丸鞆の一点であるが、北部九州では初出資料である。長さ3.4cm(約1寸1分）を測るA系列の銙であり、巡方の規格に対応するとA3の銙帯が復元される。銙帯の使用は、官位授与にともなうのみならず、用いられた年代も限られるとされている。[③] 石帯2点のうち1点は、玉に近い石材かとも思われるが、今後の鑑定を俟ちたい。

以上の出土遺物をみるかぎり、本遺跡は官衙施設たる可能性が高い。しかし、未調査区の南・西側は今後の調査でどのような遺構が現われるか予想されない。問題は、本遺跡の全体規模と建物配置であり、第3次調査の所見では、さらに西・南に建物群が延長することは確実と思われる。先に述べた建物群変遷過程は、今後の調査で詳しく検証したい。

つぎに、本遺跡と条里地割について触れておきたい（Fig. 14)。日野尚志氏の復元によって、この地区の条里は周辺で若干の差異があるものの大略N20°E（国土地院作製5万分の1地形図の座標方位から）の地割方位が求められ、坪並みと条里名称も明らかになっている。[④] それによれば、本遺跡の1～3次調査区は、粕屋郡北七図八里の21坪東端部から22坪にあたる。建物群の方向との関係では、磁北との偏差（西6°21′）を修正すると③群（Ⅲ期）建物群が条里方位にほぼ一致することが知られる。詳しく繰作していないが、この期の構SD08はちょうど21・22坪の坪境にあたると思われ、条里地割と無関係ではないようである。一つの視点として考えてみる必要があろう。

最後に、本遺跡の東南600mほどに位置する内橋廃寺について一言記しておきたい。従来、この遺跡は寺院址として扱われ、本報告でもそのように記してきたが、いまのところ寺院址としての確証は得られていない。塔心礎・礎石、基壇はみとめられず、地元にはそれに関する云い伝えも残っていない。古い段階での削平によって壊滅したためかとも思われるが、昭和35年頃の変電所建設の際大量の瓦が出土しており、そうした可能性も少ないようである。その位置はあたかもH野氏の復元された官道（西海道）に沿うばかりでなく、見はらしのよい高燥な場所である。「爽守駅」の遺跡とされる日守から約1.3kmほど離れたこの内橋廃寺は、寺院址以外の遺跡として再考の余地が残されている。ここ1、2年のあいだに周囲の宅地化が進んでおり、早急な討策が臨まれる。

註① これらの土器は、大宰府編年のSK674期、五条編年のI－2B期に並行すると考えられる。横田賢次郎・森田勉「府出土の土師器に関する覚書」『九州歴史資料館研究論集2』1976　森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚書（2）」『九州歴史資料館研究論集3』1977　横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978　前川威洋ほか『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2・3・6・7・8（下）集　1975～78

② 京都市埋蔵文化財研究所百瀬正恒氏、平安博物館寺島孝一氏の教示による。

③ 阿部義平「銙帯と官位制について」『東北考古学の諸問題』　1976

④ H野尚志「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」『佐賀大学教育学部研究論集』24（I）1976

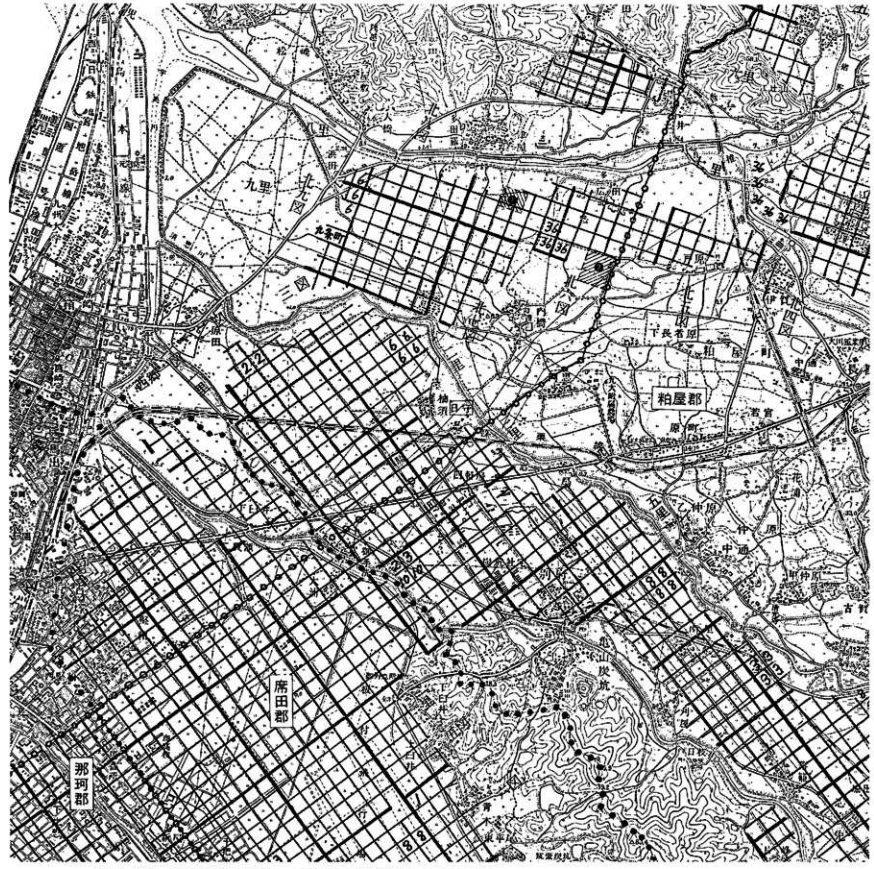


Fig.14　粕屋・席田郡の条里と駅路　⊖⊖⊖⊖ 駅路(西海道)　●●●は郡境

❶多々良込田遺跡　❷内橋廃寺

日野尚志　「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条理について」(『佐賀大学教育学部研究論文集24(Ⅰ)』1976) の付図に一部加筆

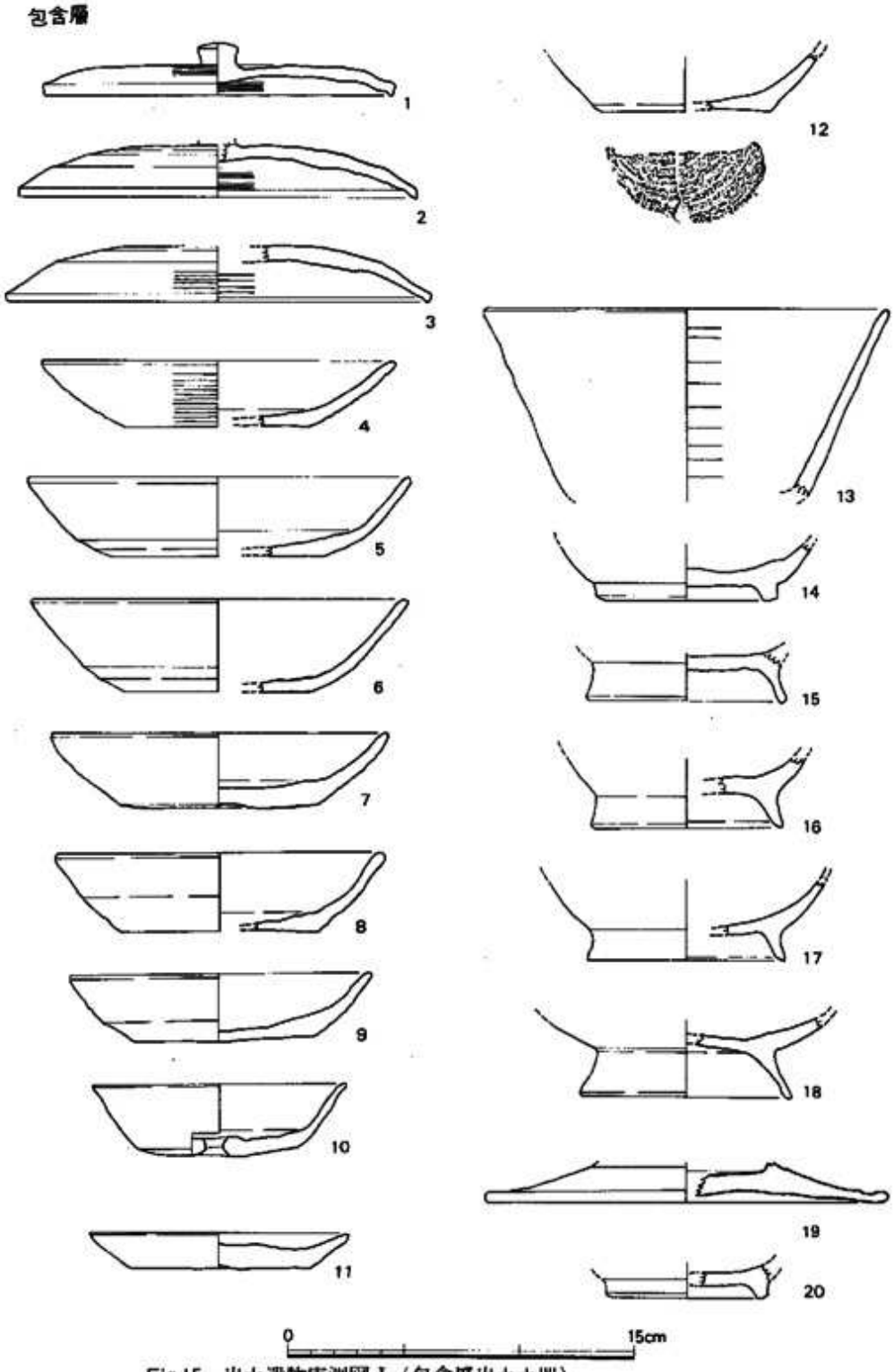


Fig.15　出土遺物実測図Ⅰ（包含層出土土器）

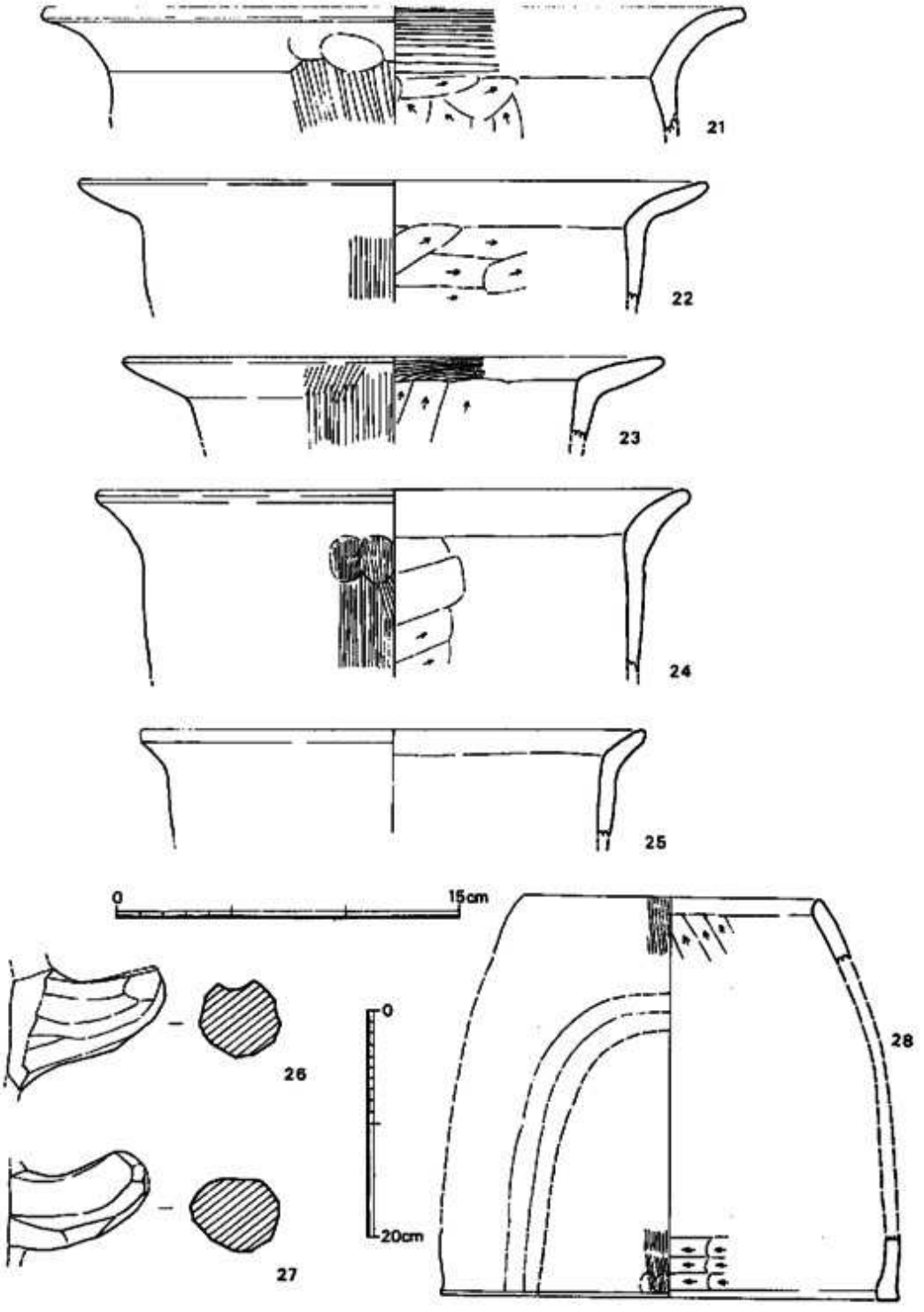


Fig.16　出土遺物実測図Ⅱ（包含層出土土器）

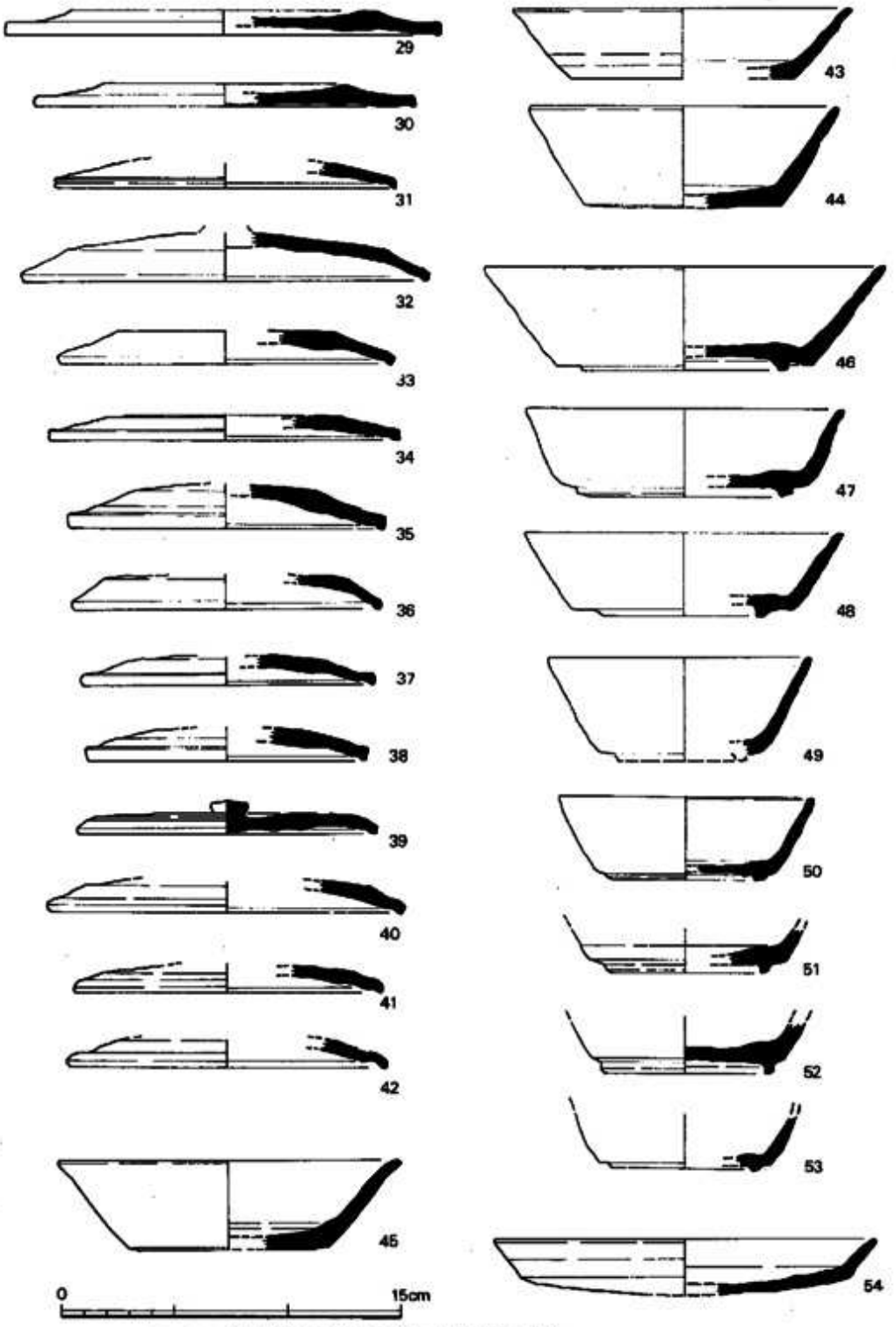


Fig.17　出土遺物実測図Ⅲ（包含層出土土器）

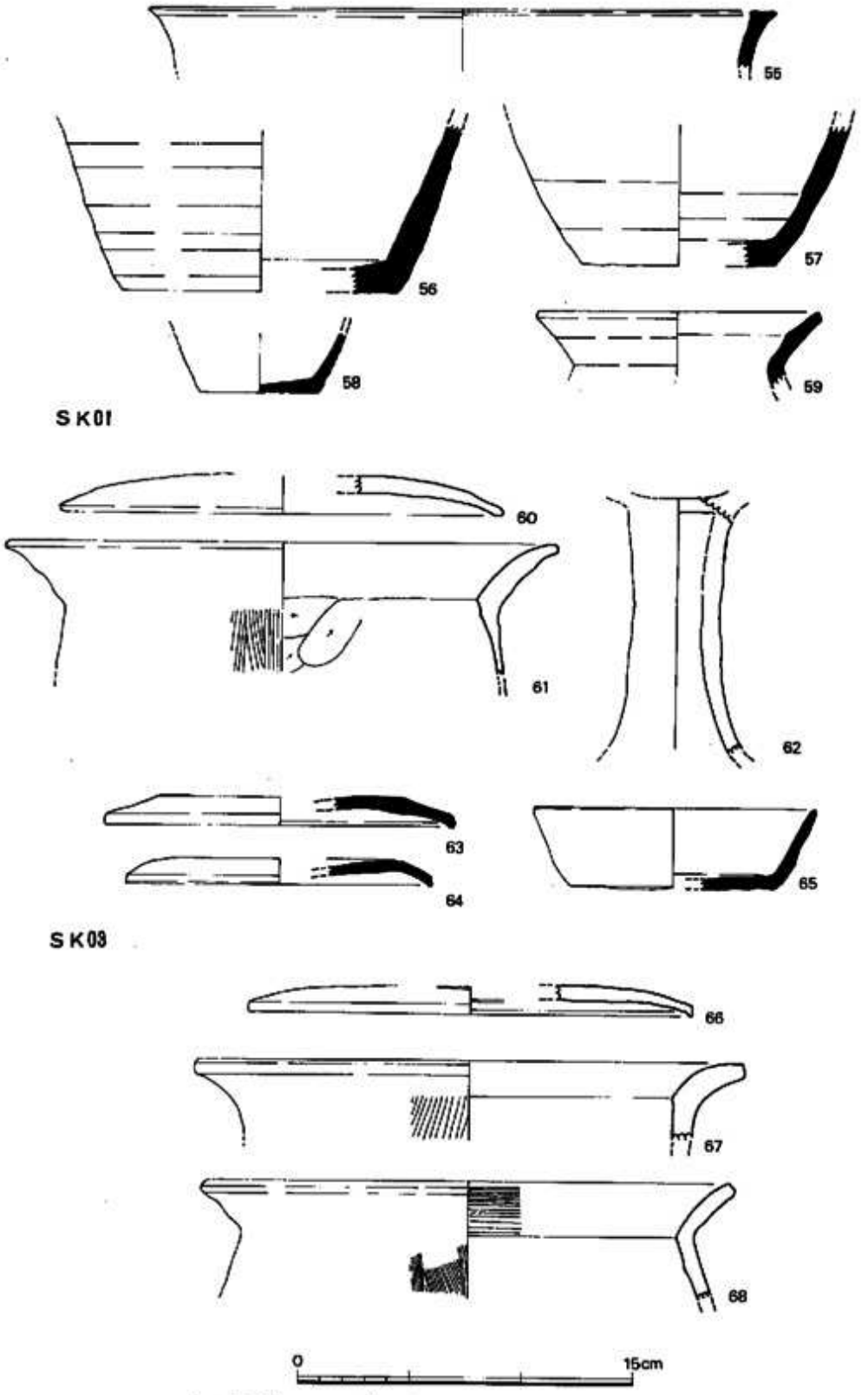


Fig.18　出土遺物実測図Ⅳ（包含層、SK01・03出土土器）

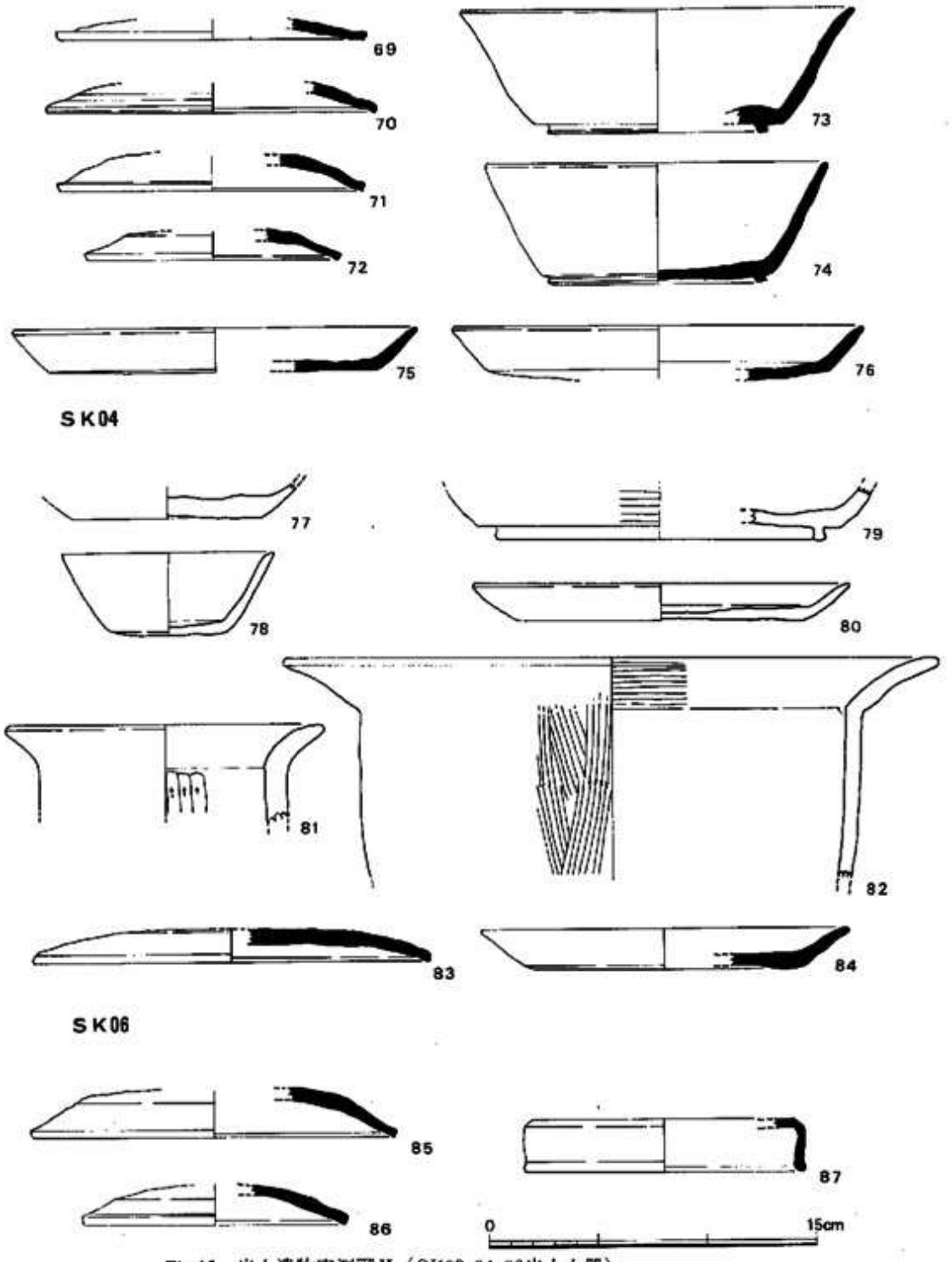


Fig.19　出土遺物実測図Ⅴ（SK03・04・06出土土器）

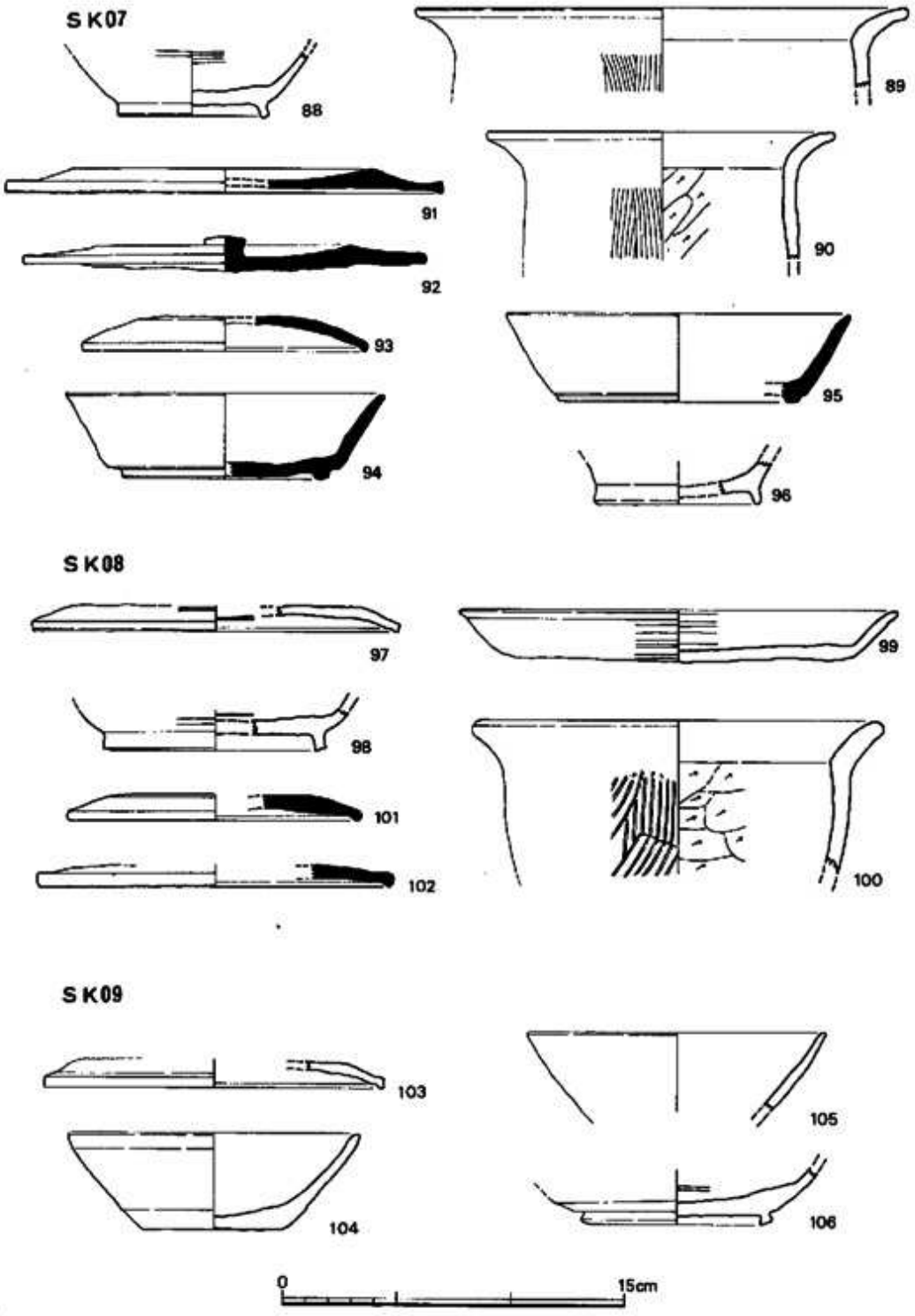


Fig.20　出土遺物実測図Ⅵ（SK07・08・09出土土器）

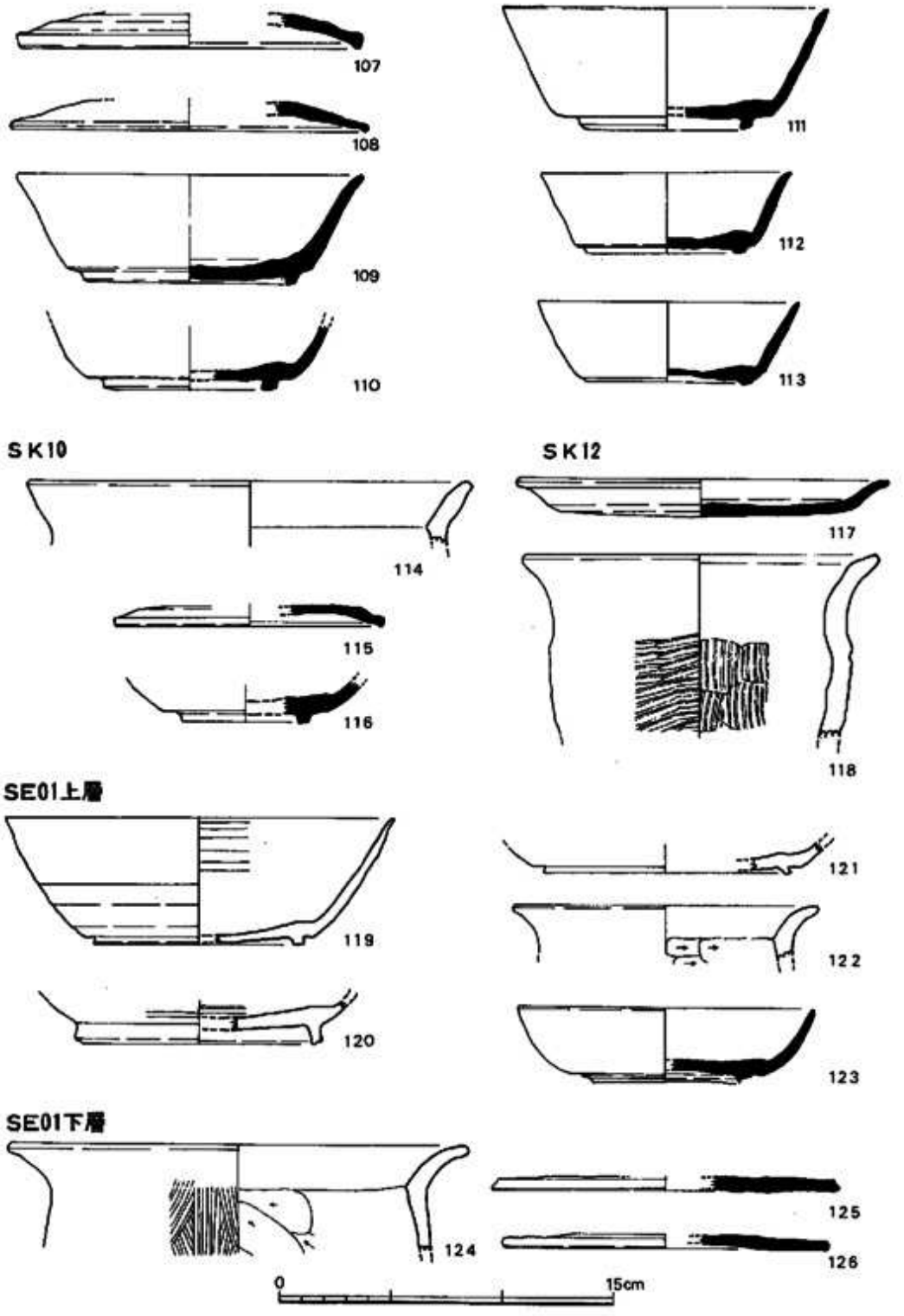


Fig.21　出土遺物実測図Ⅶ（SK09・10・12、SE01出土土器）

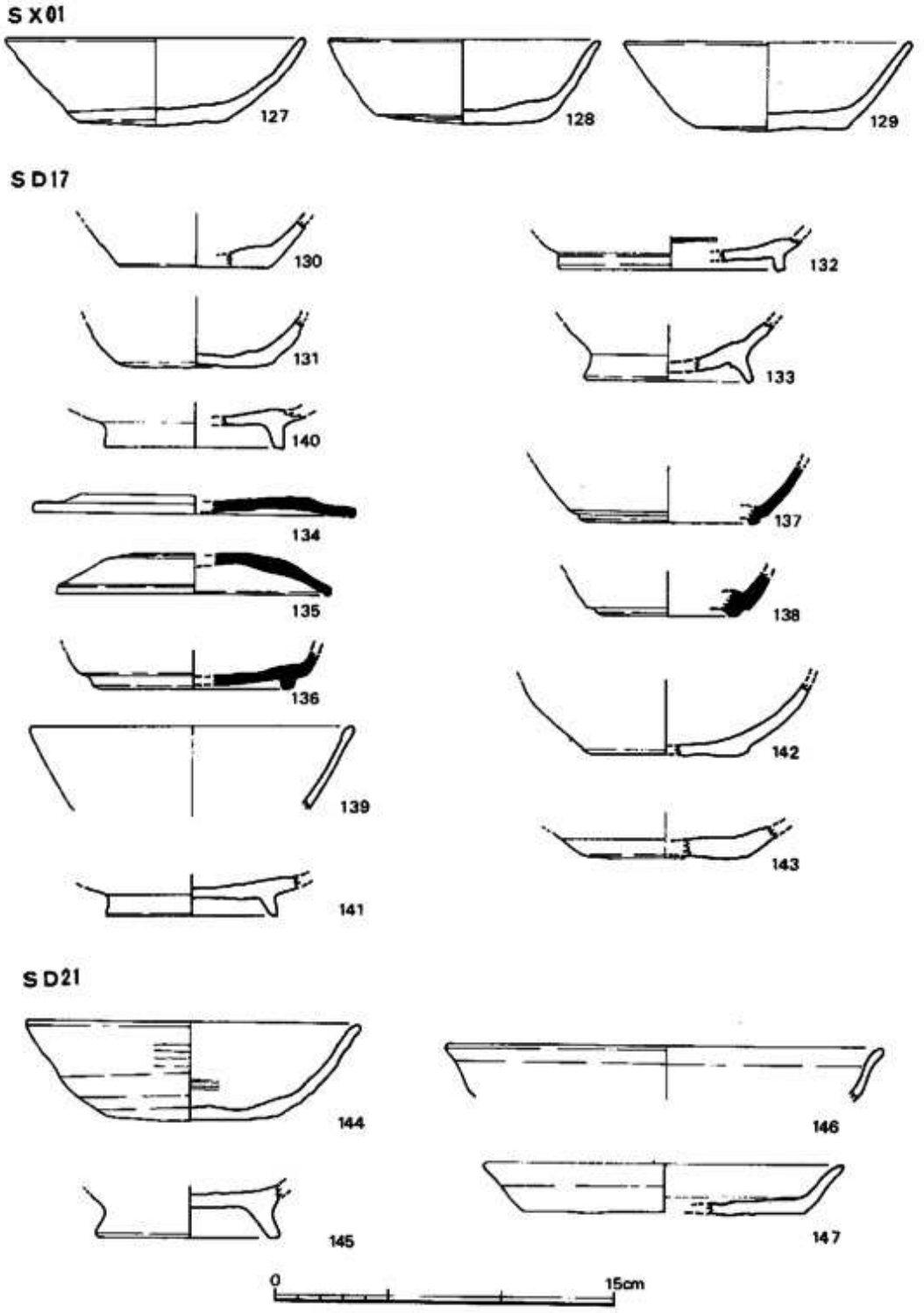


Fig.22　出土遺物実測図Ⅷ（SX01、SD17･21出土土器）

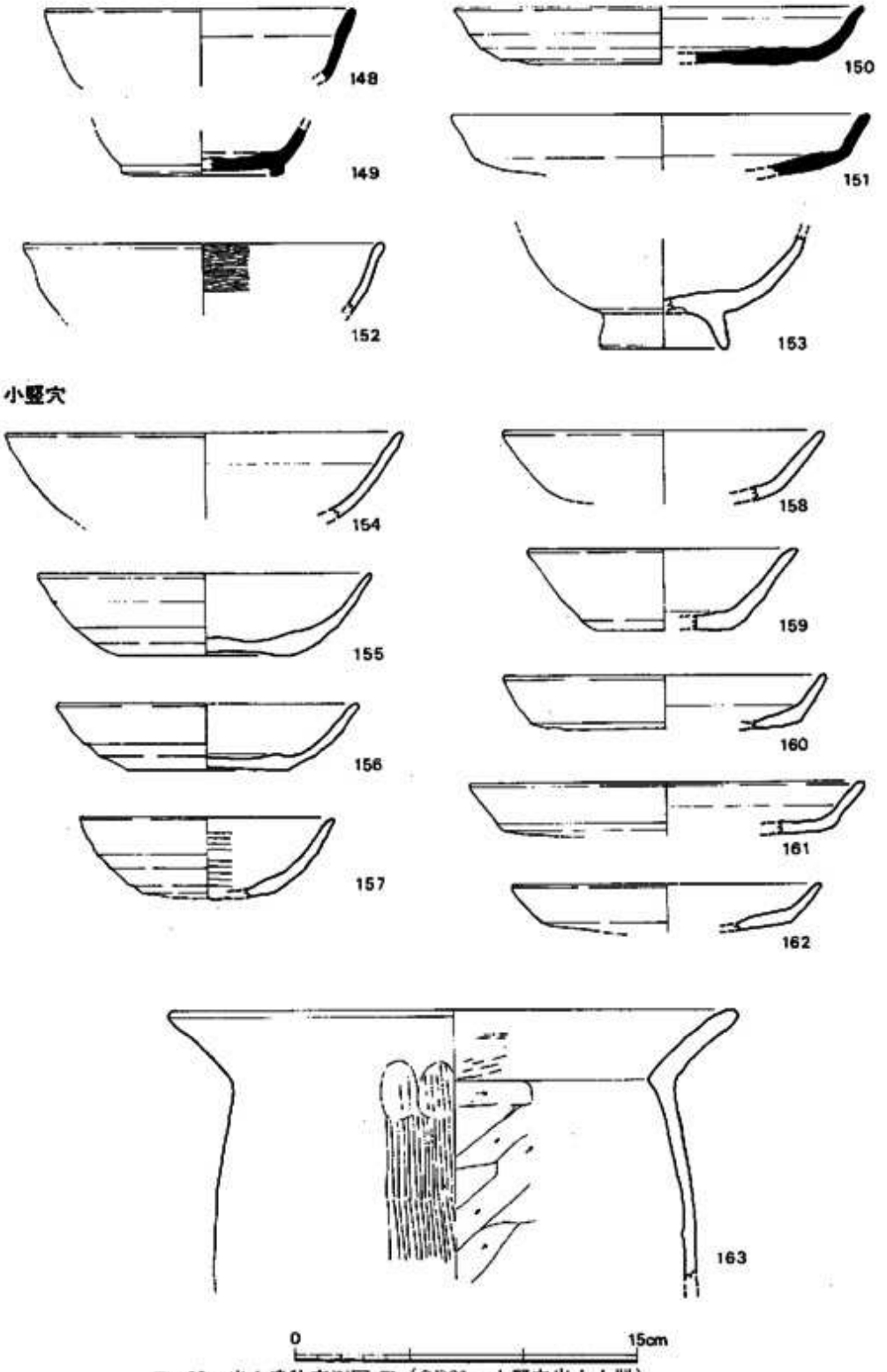


Fig.23　出土遺物実測図 Ⅸ（SD21、小竪穴出土土器）

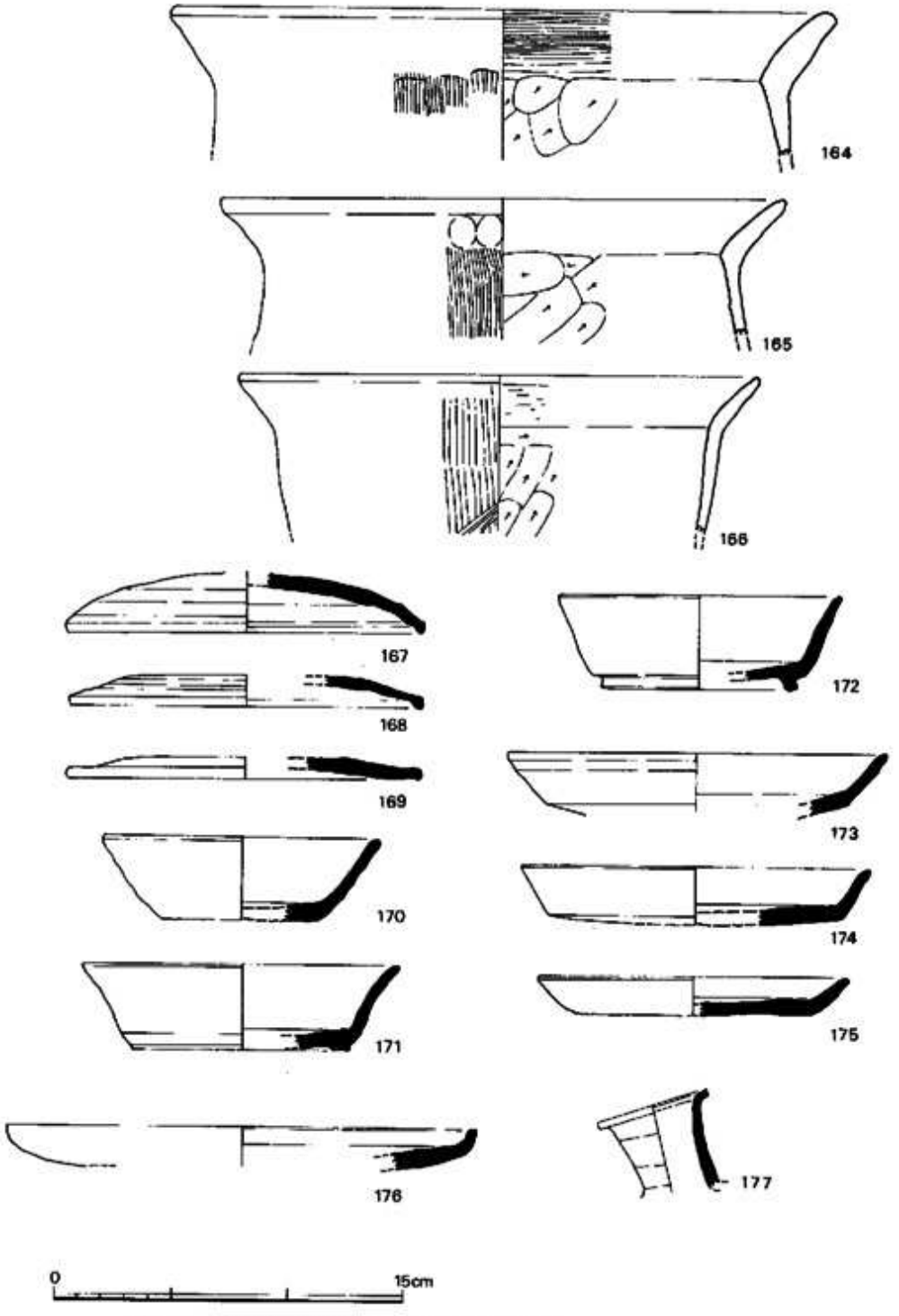


Fig.24　出土遺物実測図 X（小竪穴出土土器）

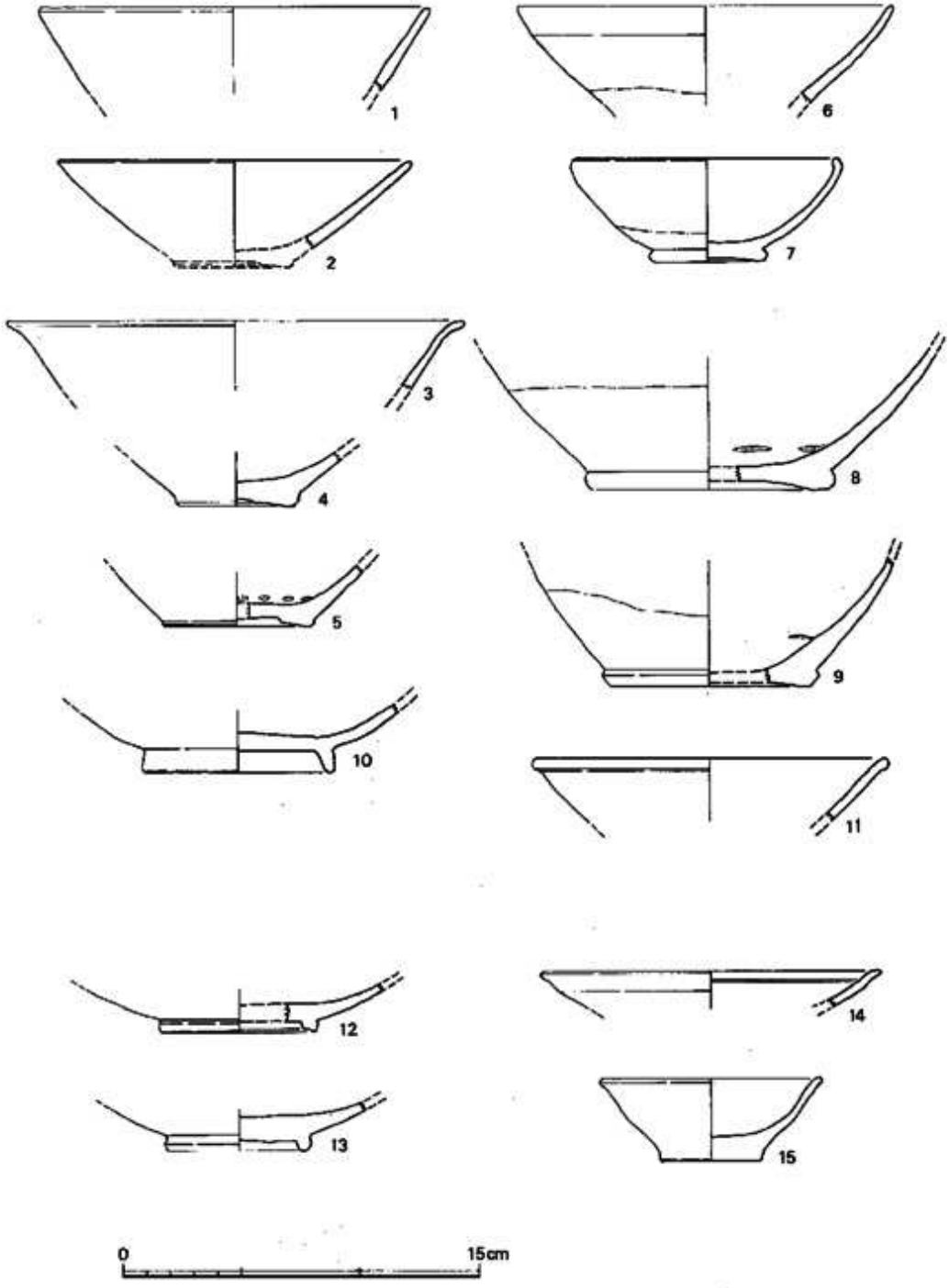


Fig.25　出土遺物実測図Ⅺ（施釉陶磁器）

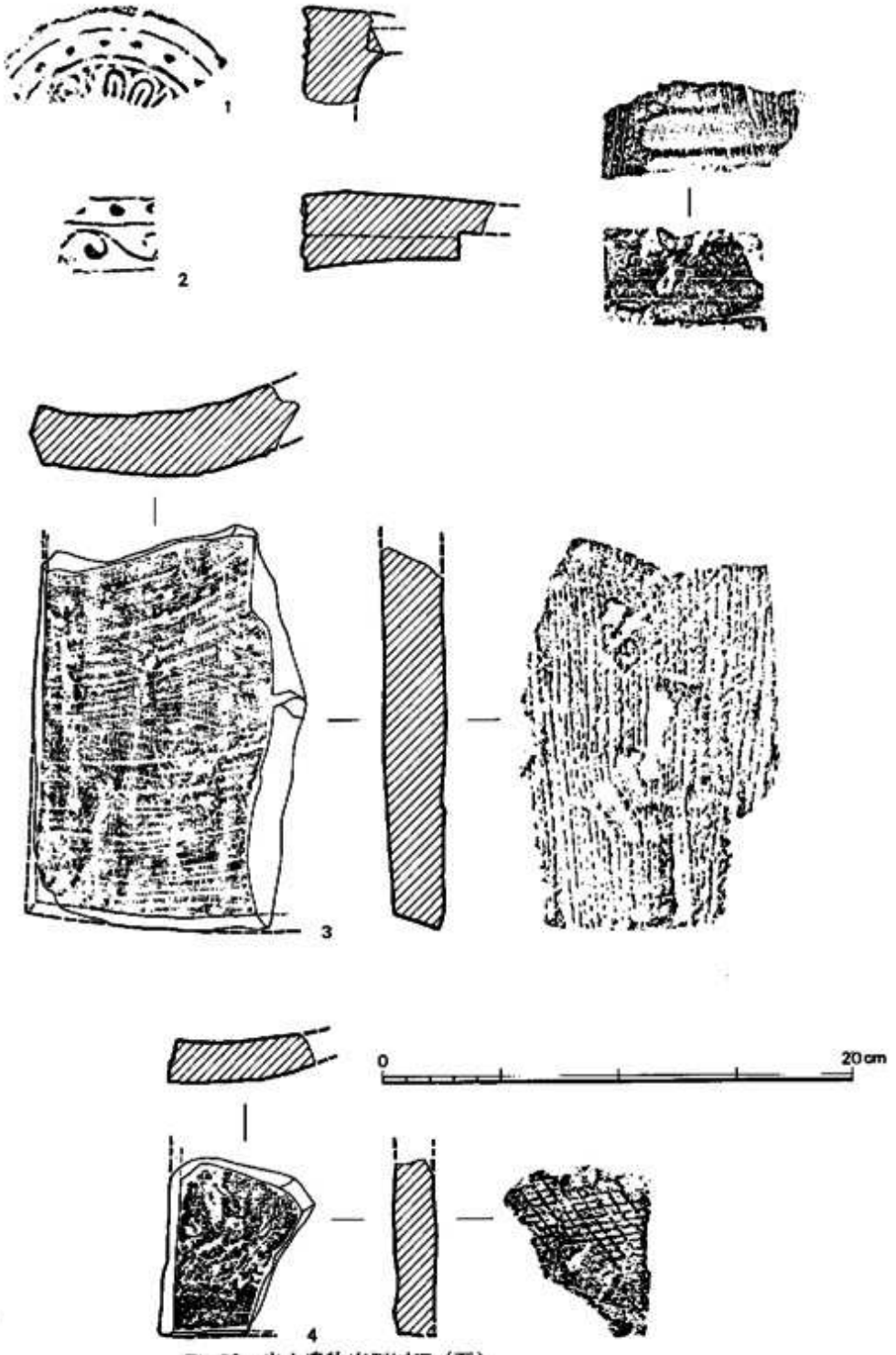


Fig.26　出土遺物実測図Ⅲ（瓦）

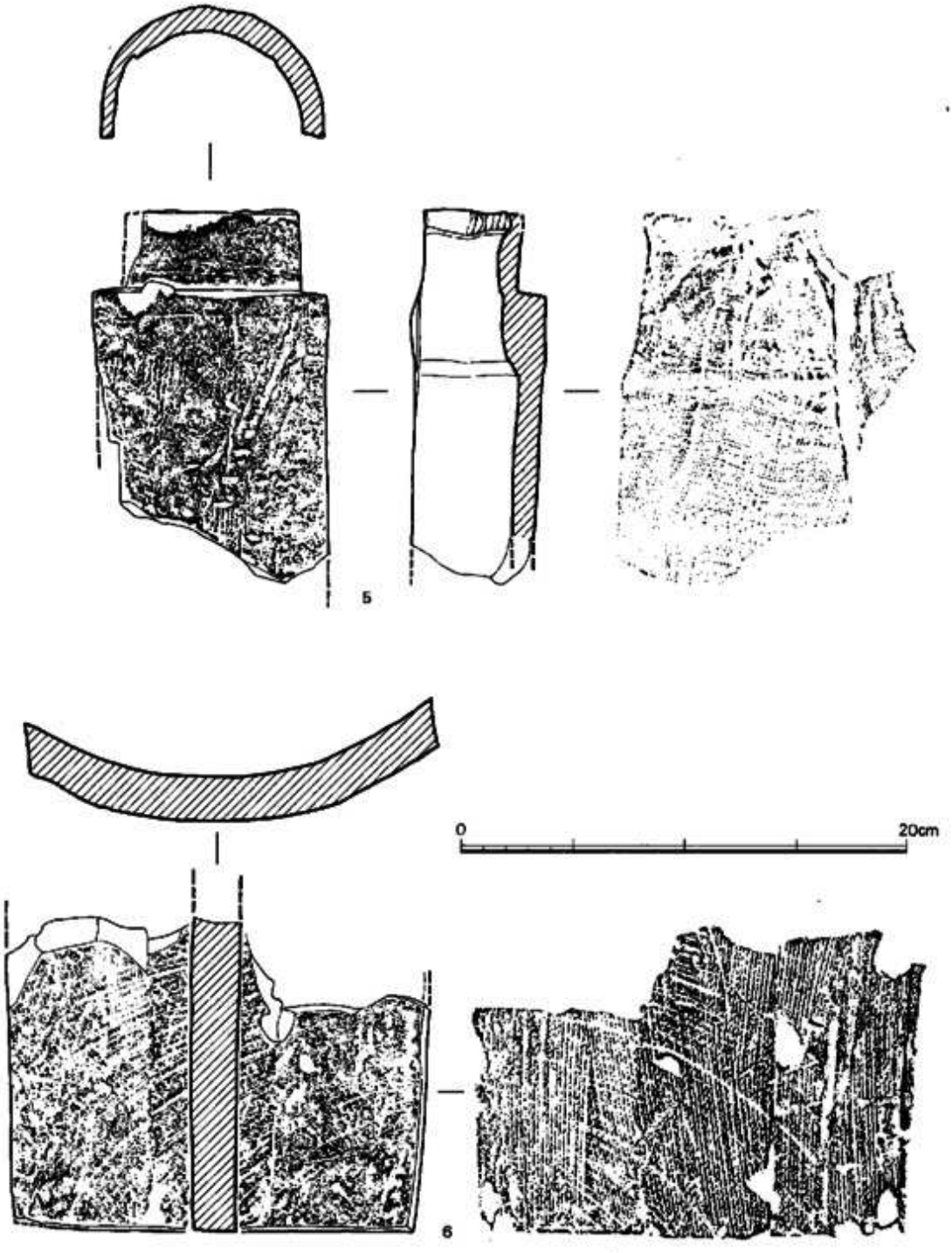


Fig.27　出土遺物実測図XIII（瓦）

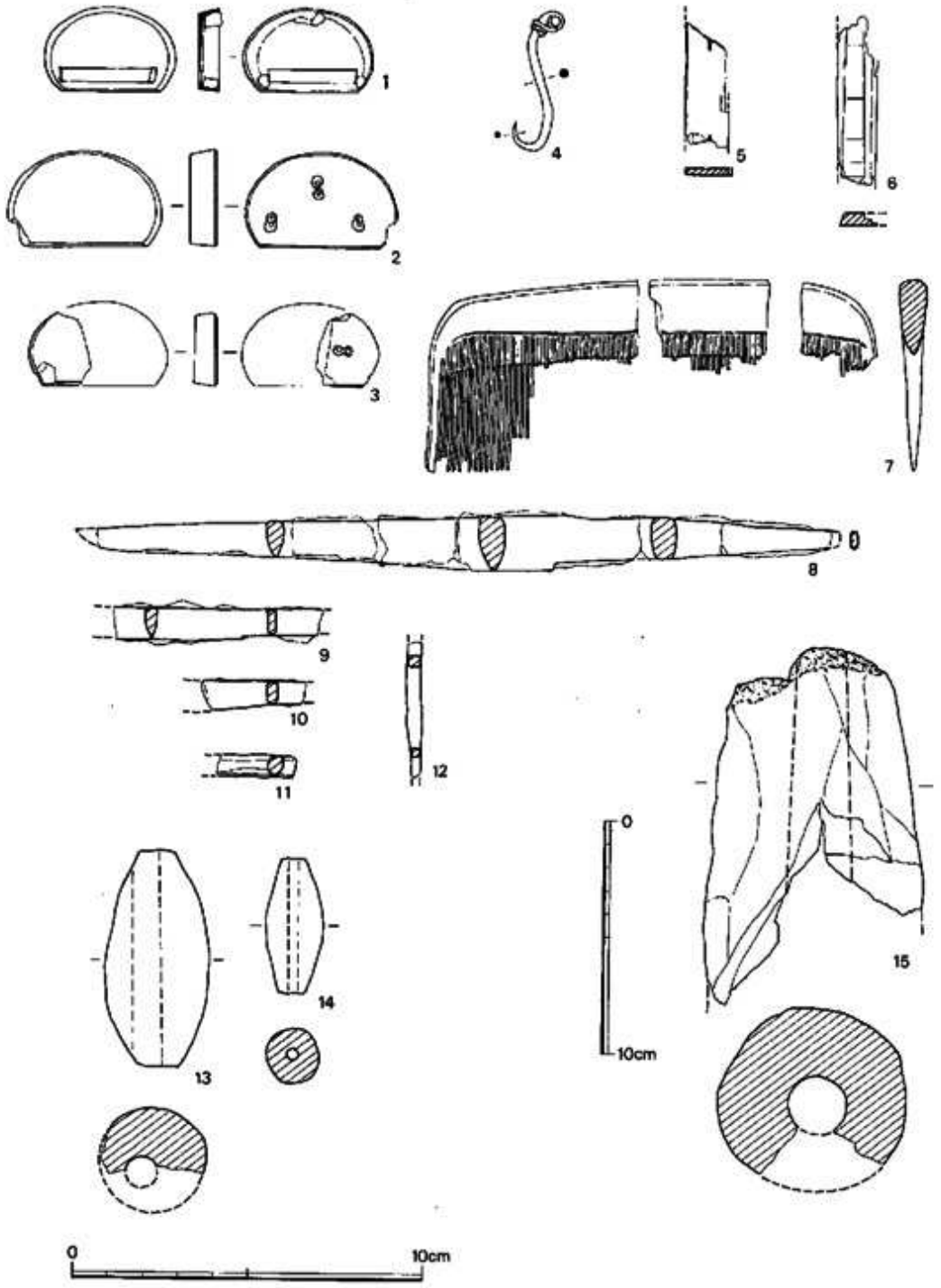


Fig.28　出土遺物実測図XIV（金属、石、木、土製品）

別　　表

凡例
1．法量の単位はcmとする。
2．( )内の数値は反転復原径を示す。
3．蓋の場合、「体部・底部」は各々、「天井部・上半・下半」に該当させる。

I

器種	番号	口径	器高	底径	手法 体部	手法 底部	色調	備考
包含層								
土師器								
蓋	1	(14.2)	2.3		a1	b1	橙褐色	
	2	(17.5)			a1	b1	橙褐色	
	3	(18.4)			a1	b1	淡橙褐色	
	19	(17.4)			a1	c3	灰褐色	
杯A	4	(15.4)	4.9	(8.0)	a1	b1	橙褐色	
	5	(16.6)	3.4	(9.3)	b1	b1	橙褐色	
	6	(16.3)	4.0	(8.2)	b1	b1	橙褐色	
	7	(14.5)	3.4	8.7	c1	c3	橙褐色	
	8	(14.1)	3.4	(9.7)	c1	c3	淡橙褐色	
	9	(13.3)	2.9	8.0	c1	c3	暗灰色	
	10	(11.1)	3.1	6.7	c1	c3	淡橙褐色	底部穿孔
	11	(11.1)	1.6	(8.0)	c1	c3	淡橙褐色	
	12			(7.3)			橙褐色	底部糸切り
杯B	13	(17.8)			a1		淡橙褐色	内面にa1，外面磨耗
	14			(8.0)	c1	c3	淡橙褐色	
	15			(9.0)		c3	暗灰褐色	
	16			(8.5)	?	?	灰褐色	器表磨耗
	17			(8.7)	c1	c3	橙褐色	
	18			(9.2)	c1	c3	淡灰褐色	
甕	21	(30.7)					淡灰褐色	
	22	(26.9)					暗橙褐色	
	23	(23.4)					暗灰褐色	
	24	(35.8)					灰褐色	
	25	(22.0)					赤褐色	
須恵器								
蓋	29	(19.4)			c1	c1	灰色	91と同一個体
	30	(17.5)			c1	c3	灰色	92と同一個体
	31	(14.8)			c1		淡青灰色	
	32	(17.9)			c1	c1	灰色	
	33	(14.6)			c1	c1	灰白色	
	34	(15.4)			b1	b1	淡青灰色	
	35	(14.0)			c1	c1	青灰色	
	36	(13.6)			c1		淡青灰色	
	37	(12.9)			c1	b1	青灰色	
	38	(12.4)			c1		青灰色	
	39	(12.2)	1.5		b1	b1	暗灰色	
	40	(15.5)			c1		灰色	
	41	(13.6)			c1	c3	灰色	
	42	(13.9)			c1		灰白色	
	43	(15.1)	3.1	(9.9)	c1		青灰色	
杯A	44	(18.6)	4.5	(8.9)	c1	c3	暗灰色	
	45	(15.1)	3.9	(9.0)	c1	c3	灰白色	外面淡黒色

器種	番号	口径	器高	底径	手法 体部	手法 底部	色調	備考
	46	(17.8)	4.6	(9.2)	c1	c3	淡青灰色	
杯B	47	(14.1)	3.9	(9.7)	c1		淡青灰色	
	48	(14.1)	3.7	(7.2)	c1		暗灰色	
	49	(11.6)			c1		淡青灰色	
	50	(11.2)	3.7	(7.2)	c1	c1	青灰色	
	51			(7.3)	c1	c3	灰色	
	52			(7.8)	c1	c3	青灰色	
	53			(7.6)	c1		淡青灰色	
皿	54	(17.0)	2.5	(14.8)	c1	c3	淡青灰色	
甕	55	(28.2)					灰色	
壺	56			(14.4)	b1	b1	青灰色	鉢?
	57			(8.6)	b1	c3	青灰色	鉢?
	58			(5.3)	c1	c3	青灰色	
甕	59	(12.7)					灰色	
黒色土器								
杯B	20			(7.3)		a2	灰褐色	内底にa2, 黒色A
SK01								
土師器								
蓋	60	(20.0)			c1	c3	淡橙褐色	器表磨耗
甕	61	(24.4)					淡橙褐色	
須恵器								
	63	(15.5)			c1	c3	灰色	
蓋	64	(13.8)			c1	c1	暗灰色	外面に一部c3
杯A	65	(12.6)	3.6	(9.2)	c1	c3	灰色	
SK03								
土師器								
蓋	66	(20.0)			c1	a1	橙褐色	
甕	67	(24.4)					淡赤褐色	
	68	(23.4)					灰褐色	
須恵器								
蓋	69	(14.0)			c1	c3	淡青灰色	
	70	(15.2)			c1	c3	灰色	
	71	(13.9)			c1	c3	青灰色	
	72	(11.5)			c1		灰色	底部不調整?
杯B	73	(17.9)	5.7	(10.2)	c1	?	青灰色	
	74	(15.6)	5.5	(10.2)	c1	c3	淡青灰色	
皿	75	(18.4)	2.0	(15.3)	c1	c3	灰色	
	76	(18.8)		(16.0)	c1	c3	灰色	
SK04								
土師器								
杯A	77			8.6	b1	b1	淡橙褐色	
	78	(9 .7)	3.7	(5.4)	c1	c2	淡橙褐色	
杯B	79			(15.2)	a1	b1	淡橙褐色	
皿	80	(17.2)	1.7	(13.0)	a1	b1	淡橙褐色	
甕	81	(14.2)					赤褐色	
	82	(29.7)					明橙褐色	

器種	番号	口径	器高	底径	手法 体部	手法 底部	色調	備考
				須恵器				
蓋	83	(18.2)	1.5		C1	C3	灰色	
皿	84	(16.8)	1.4	(11.2)	C1	C3	青灰色	
SK 06								
				土師器				
蓋	85	(16.5)			C1	C3	青灰色	
	86	(11.9)			C1	C3	青灰色	
	87	(12.2)			C1		暗灰色	
SK 07								
				土師器				
杯 B	88			(6.7)		C1	淡橙褐色	
甕	89	(16.6)					暗灰褐色	
	90	(14.0)					淡赤褐色	
				須恵器				
	91	(19.4)			C1	C1	灰色	29と同一個体
蓋	92	17.5	1.5		C1	C3	灰色	30と同一個体
	93	(12.4)			C1	C2	灰色	
杯 B	94	(15.0)	3.9	(10.6)	C1		淡灰褐色	外面淡黒褐色
	95	(13.8)	3.7	(9.2)	C1	C2	灰色	
				黒色土器				
杯 B	96			(7.4)		a?	橙褐色	内底a，黒色A
SK 08								
				土師器				
蓋	97	(15.9)			a1	C3	淡橙褐色	
杯 B	98			(9.8)	a1	C2	淡橙褐色	
皿	99	(19.1)	2.3	(15.0)	a1	b1	淡橙褐色	
甕	100	(17.5)					淡橙褐色	
				須恵器				
蓋	101	(77.5)			C1	b1	青灰色	
	102	(22.7)			C1		淡赤褐色	
SK 09								
				土師器				
蓋	103	(15.0)			C1		淡橙褐色	
杯 A	104	(12.6)	4.3	(6.1)			淡橙褐色	
杯	105	(15.0)			C1		淡橙褐色	
杯 B	106			8.5	b1	c1	淡橙褐色	内底にa1?
				須恵器				
蓋	107	(15.3)			C1		淡赤褐色	
	108	(16.0)			C1	C3	淡橙褐色	
杯 B	109	(15.4)	4.8	9.6	C1	C2	灰白色	外面、淡黒色
	110			(7.8)	C1	C2	灰色	
	111	(14.7)	5.5	(7.8)	C1	C3	灰色	
	112	(11.3)	3.6	(7.2)	C1	C2	淡青灰色	
	113	11.7	3.6	7 5	C1	C1	暗灰色	

器種	番号	口径	器高	底径	手法 体部	手法 底部	色調	備考
SK 10								
土師器								
甕	114	(19.6)					淡橙褐色	
須恵器								
蓋	115	(12.0)			c_1	c_1	青灰色	
杯B	116			(5.8)	c_1		暗灰色	
SK 12								
土師器								
皿	117	16.6	1.7	13.0	c_1	b_1	橙褐色	器表磨耗
甕	118	(15.8)					橙褐色	内外面にタタキ
SE 01（上層）								
土師器								
杯B	119	(17.4)	5.7	(9.6)	b_1	b_1	淡橙褐色	体部上半内面にa_1？
	120			(11.2)	a_1	c_1	淡橙褐色	内面にもa_1
	121			(11.3)	b_1	b_1	淡橙褐色	
甕	122	(13.6)					淡橙褐色	
須恵器								
杯B	123	(13.4)	3.4	(7.6)	c_1	c_3	淡青灰色	体部下半外面、暗灰色
SE 01（下層）								
土師器								
甕	124	(12.8)					淡赤褐色	
須恵器								
蓋	125	(15.8)			c_2	c_2	灰色	
	126	(14.6)			c_1	c_2	青灰色	
SX 01								
土師器								
杯A	127	13.1	3.9	6.7	b_1	c_3	灰褐色	
	128	11.9	3.7	7.7	c_1	?	淡橙褐色	器表磨耗
	129	12.7	3.9	6.8	c_1	?	淡橙褐色	器表磨耗
SD 17								
土師器								
杯A	130			(6.4)	c_1	c_3	淡橙褐色	
	131			(6.0)	c_1	c_3	橙褐色	
杯B	132			(10.2)		c_2	淡橙褐色	内底にa_1
	133			(7.4)	c_1	c_3	淡橙褐色	
須恵器								
蓋	134	(14.9)			c_1	c_2	青灰色	
	135	(12.2)			c_1	c_2	淡青灰色	内面に重ね焼き痕跡
杯B	136	(8.9)			c_1	c_3	淡青灰色	
	137	(8.1)			c_1		青灰色	
	138	(6.4)			c_1		灰色	

V

器種	番号	口径	器高	底径	手法 体部	手法 底部	色調	備考
				黒色土器				
杯	139	(14.2)		6	a1		淡橙褐色	内面にa1，黒色A
杯B	140			(8.0)		?	淡橙褐色	内底は調整不明，黒色A
	141			(7.6)		c3	淡橙褐色	内底はc3?，黒色A
杯A	142			(6.0)	?	?	橙褐色	器表腐蝕，黒色A
	143			(7.4)	b1	c2	淡黒褐色	内面腐蝕，黒色B
SD 21								
				土師器				
杯A	144	14.7	4.3	7.5	b1	b1	淡橙褐色	体部内面にa1?
杯B	14					c3	淡橙褐色	底部糸切り?
皿	146	(19.2)			c1		淡灰褐色	雲母を多く含む
	147	(15.6)	2.1	(12.4)	c1	c3	淡橙褐色	雲母を多く含む
				須恵器				
杯	148	(13.7)			c1		灰色	
杯B	149			(7.1)	c1	c2	灰白色	
皿	150	(17.9)	2.5	(13.9)	c1	c2	灰色	
	151	(18.4)			c1	c3	灰色	
				黒色土器				
杯B	152	(15.8)			a2		灰褐色	内面にa2，黒色A
	153			(5.8)		a	淡橙褐色	内面にa1，黒色A
小竪穴								
				土師器				
杯A	154	(17.4)			?		橙褐色	C2区P25
	155	(14.9)	3.6	(7.8)	b1	b1	淡橙褐色	D2区P12
	156	(13.5)	3.0	(7.2)	b1	b1	淡橙褐色	C2区 64
	157	(11.4)	3.6		b1	b1	橙褐色	体部内面にa1?，D2区P
	158	(14.4)			?	?	淡橙褐色	C2区P25
	159	(12.0)	3.6	(6.0)	c1	?	淡灰褐色	D2区P13
甕	160	(14.4)	2.4	(13.2)	c1	c3	淡橙褐色	C2区P28
	161	(17.7)			c1	b1	淡橙褐色	C2区P25
	162	(13.8)			c1	c3	淡灰褐色	C2区P52
	163	(24.5)					暗灰褐色	D2区P14
	164	(28.3)					淡橙褐色	C2区P56
	165	(24.5)					淡赤褐色	C2区P60
	166	(22.7)					赤褐色	C2区P25
				須恵器				
蓋	167	(15.4)			c1	c3	灰色	C2区P60
	168	(15.3)			c1	c1	灰色	C2区P68
	169	(15.5)			c1	c2	淡青灰色	C2区P31
杯A	170	(12.0)	3.7	(7.0)	c1	?	灰色	D2区P10
杯B	171	(13.8)	3.8	(9.6)	c1	c3	淡灰色	D2区P13
	172	(12.3)			c1	c3	暗赤褐色	C2区P22
皿	173	(16.6)			c1	?	灰色	C2区P25
	174	(15.3)	2.5	(12.9)	c1	c3	暗灰色	C2区P65
	175	(13.6)	1.7	(10.4)	c1	c2	灰色	D2区P 7
	176	(22.6)			c1	c3	青灰色	C2区P68

図　版

PLATES

多々良川
1
2
3

多々良込田遺跡周辺空中写真(1:40000)

1.多々良込田遺跡　2.内橋廃寺　3.「夷守駅」推定地　……は律令時代西海道　(1969年国土地理院作製)

▲第３次調査地区調査前全景（南西から）

▼Ⅰ期調査区全景（南西から）

▲Ⅰ期調査区全景(南東から)

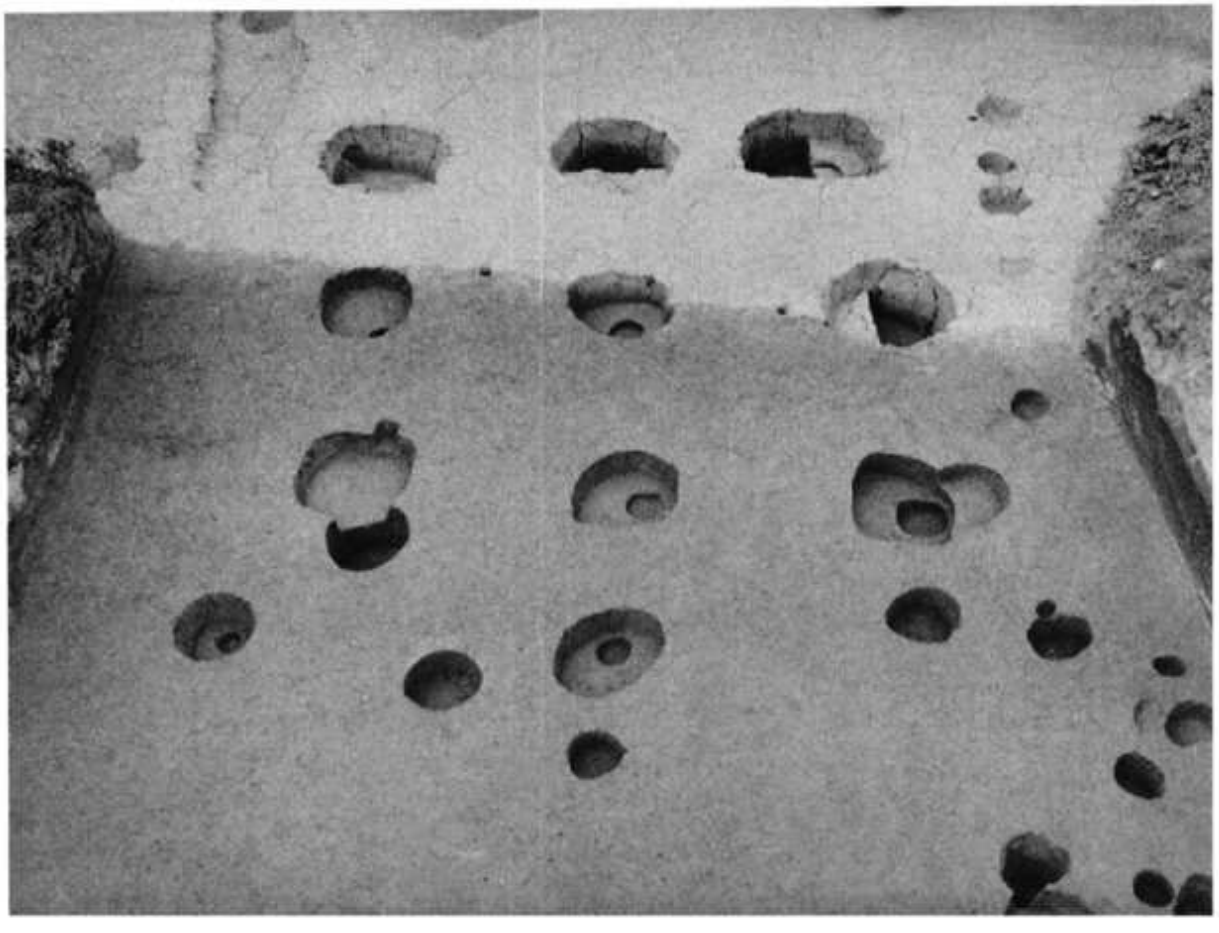
▲Ⅱ期調査区全景(東から)

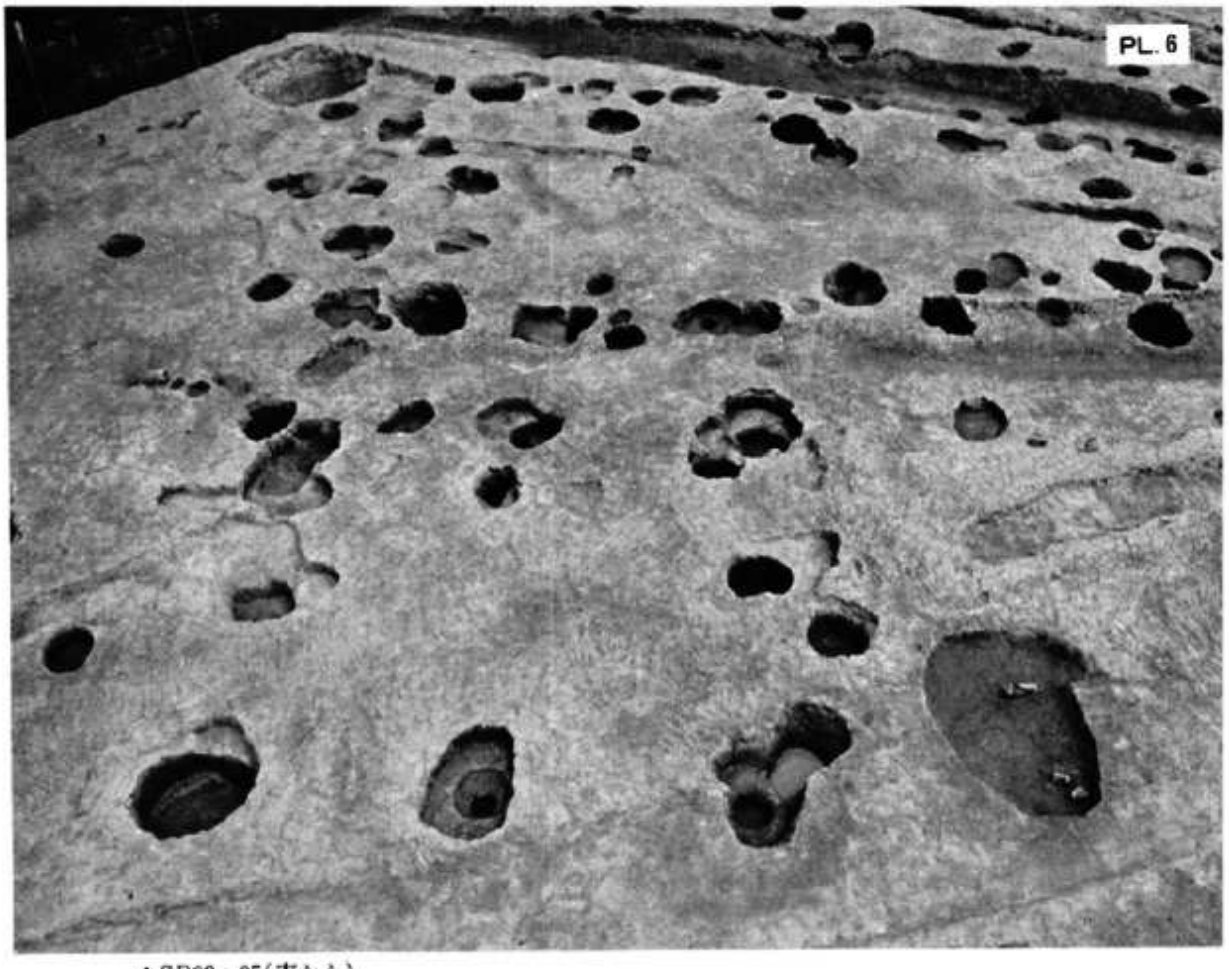
▲C2区建物群全景(南から)

▼同建物群全景(北から)

▲SB01(北から)

▼SB02・13(南から)





▲SB03～05(南から)

▼SB03(南から)

▲SB04・05(西から)

▼SB03～05(北から)

▲SB06～08(南から)

▼SB06～08(北から)

▲SB08・09(南から)

▶
SB02・06～08
(北から)

▲SB11(東から)

SB05 掘方3

SB02 掘方2

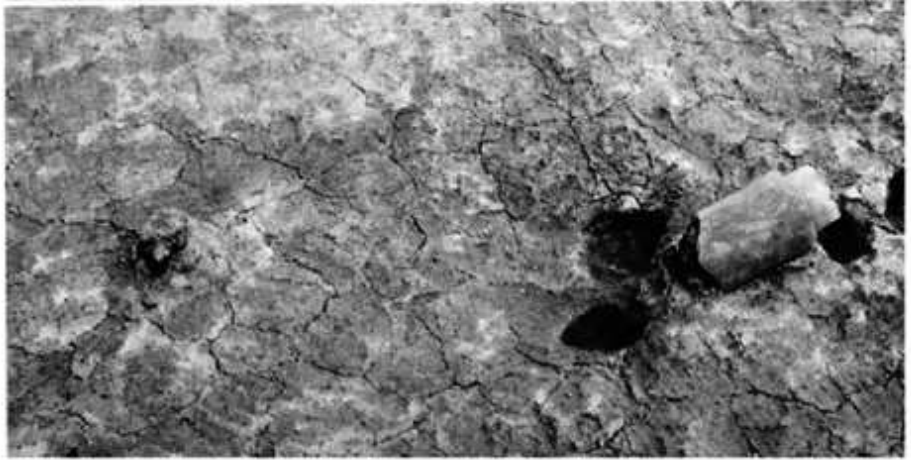
SB04 掘方3

▲井戸SE01(北から)

▼土壙墓SX01(西から)

▲SK06(南西から)

▶ SK06
(丸瓦と輪羽口)



▶ SK07
(丸瓦と鉄滓)

▲SD04(西から)

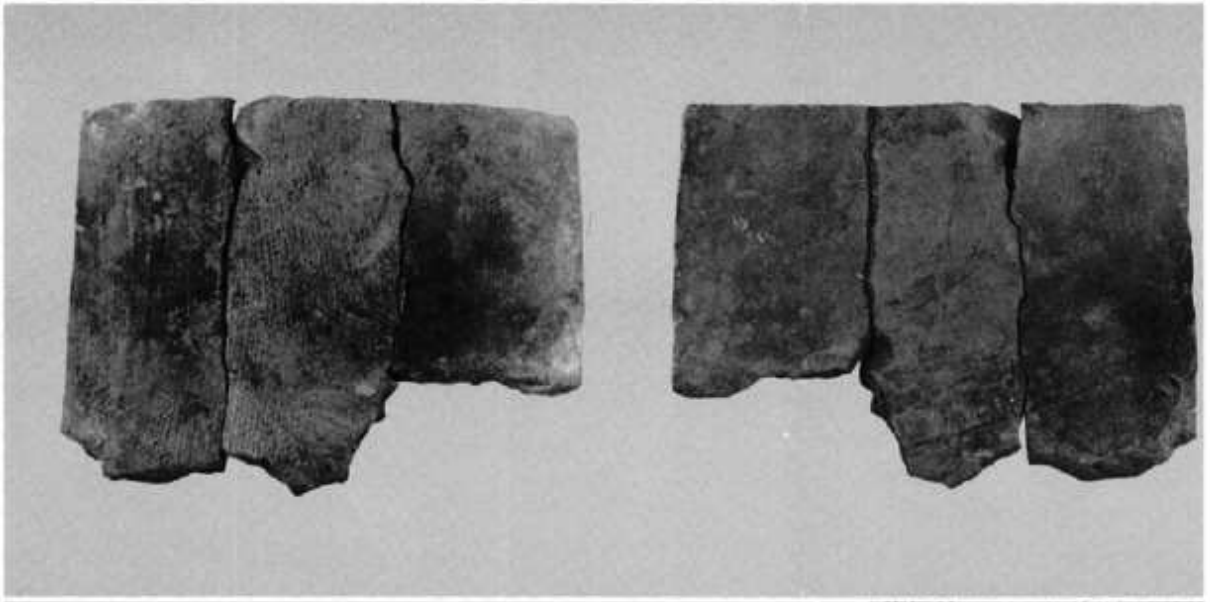
▶SD04発掘区西壁断面

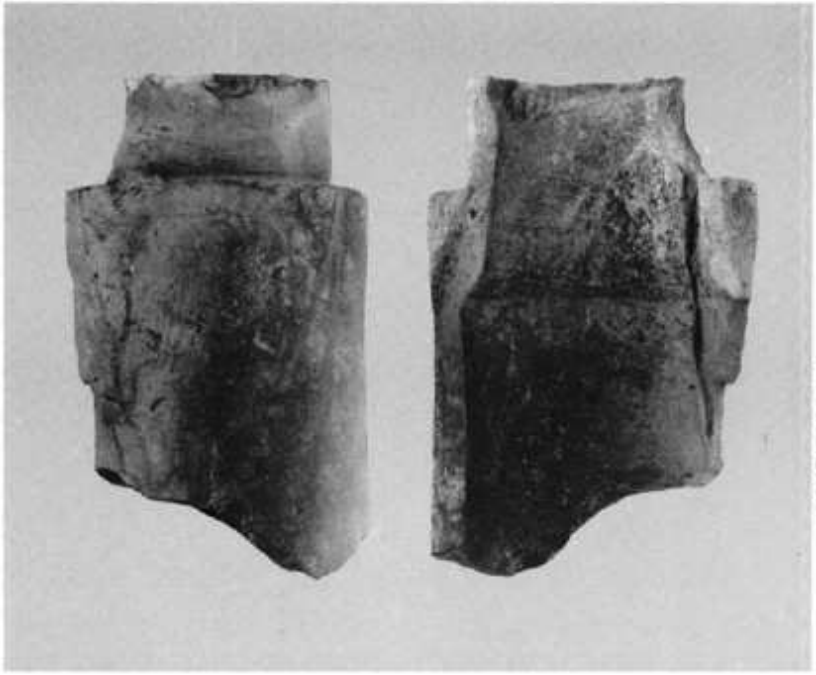
▶同東壁断面

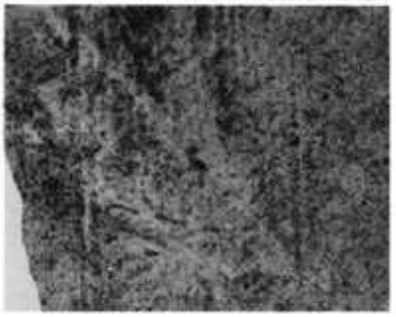
▲SD04と南側建物群(東から)

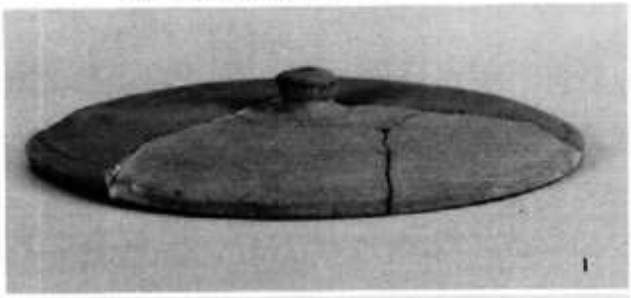
▶
SD04下層出土遺物
(軒丸瓦)

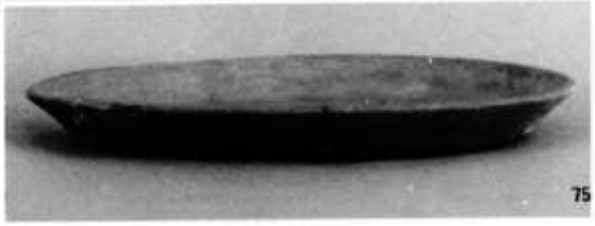
▶
SD04下層出土遺物
(馬歯)



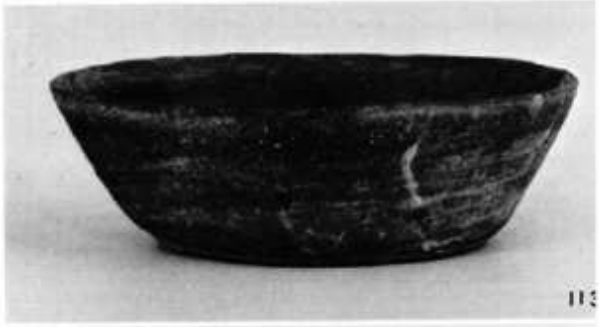




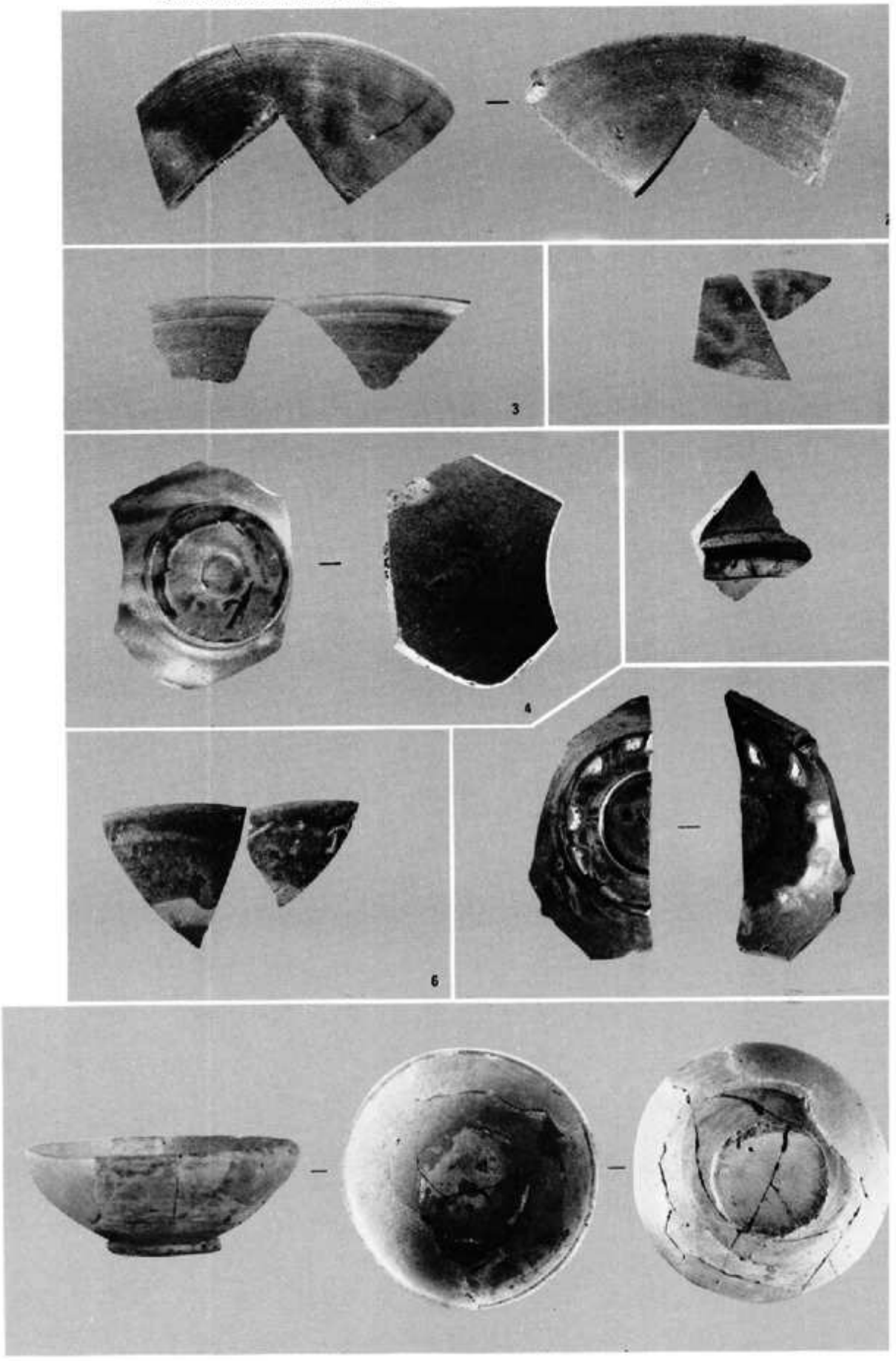


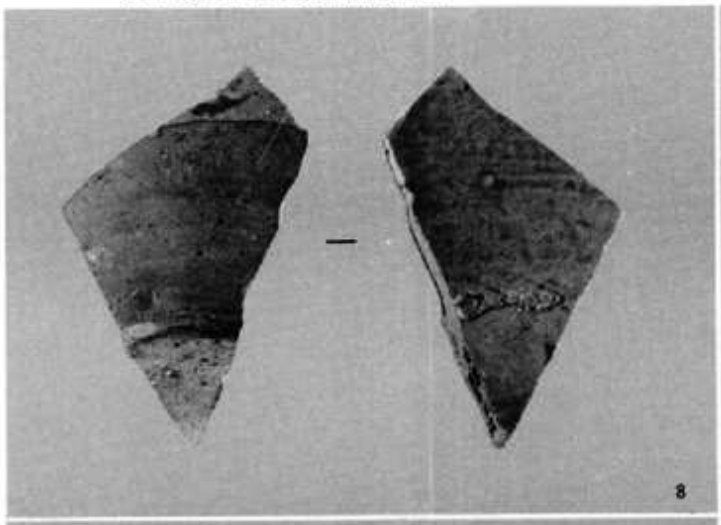


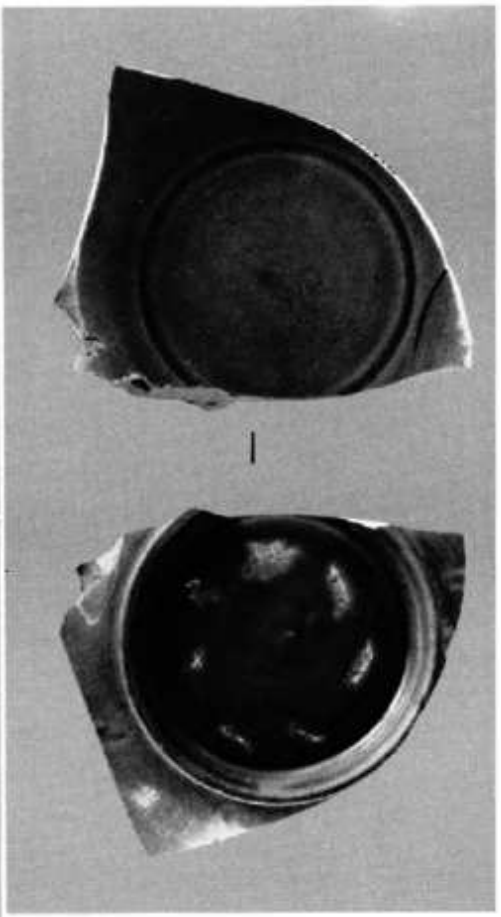
包含層(1・6・7・9・10・32・44・54・61)
SK03(74・75)

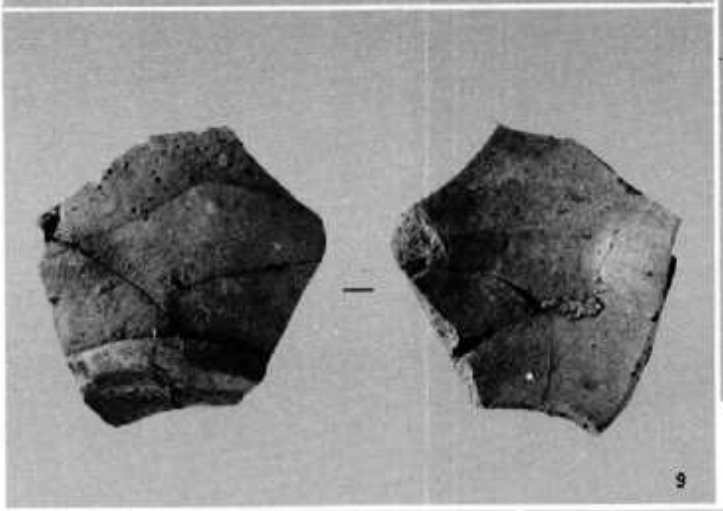


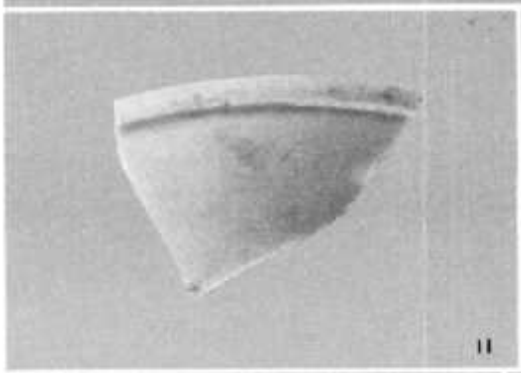
SK04(78)、SK05(82)、SK08(99)
SK09(111～113)、3SK12(117)
SX01(127～129) SD21(144)


3
4
6

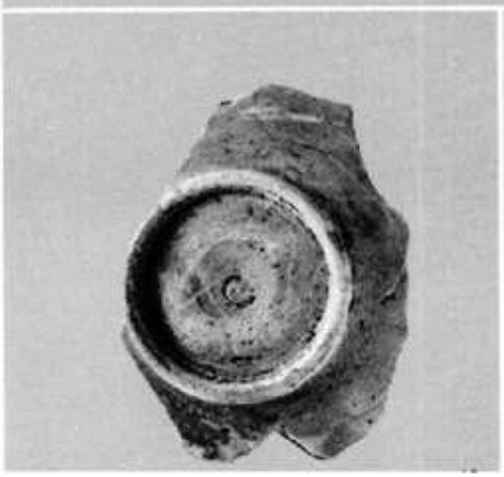

8

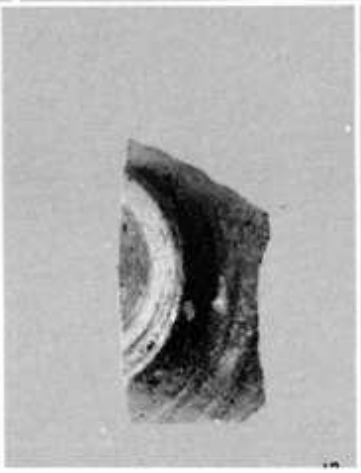


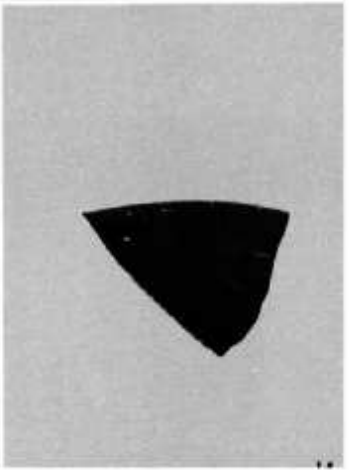

9

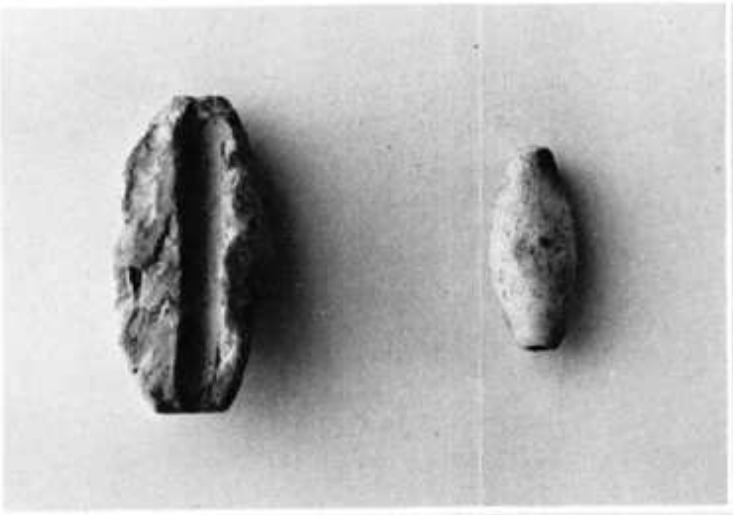

11

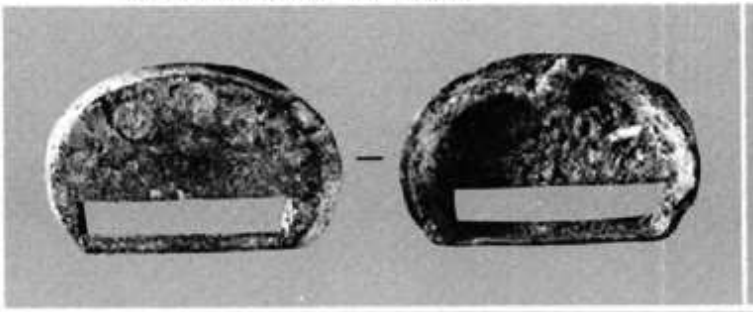
15

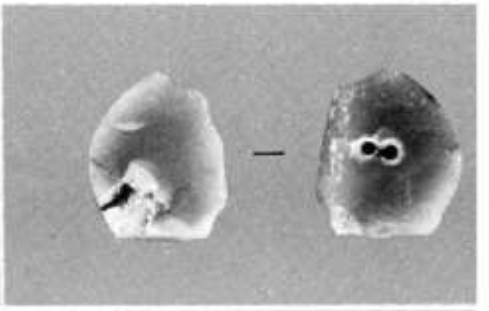


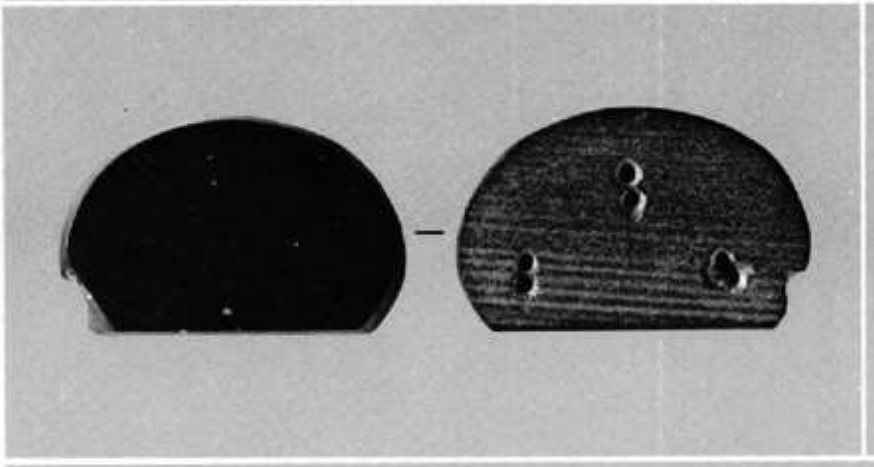


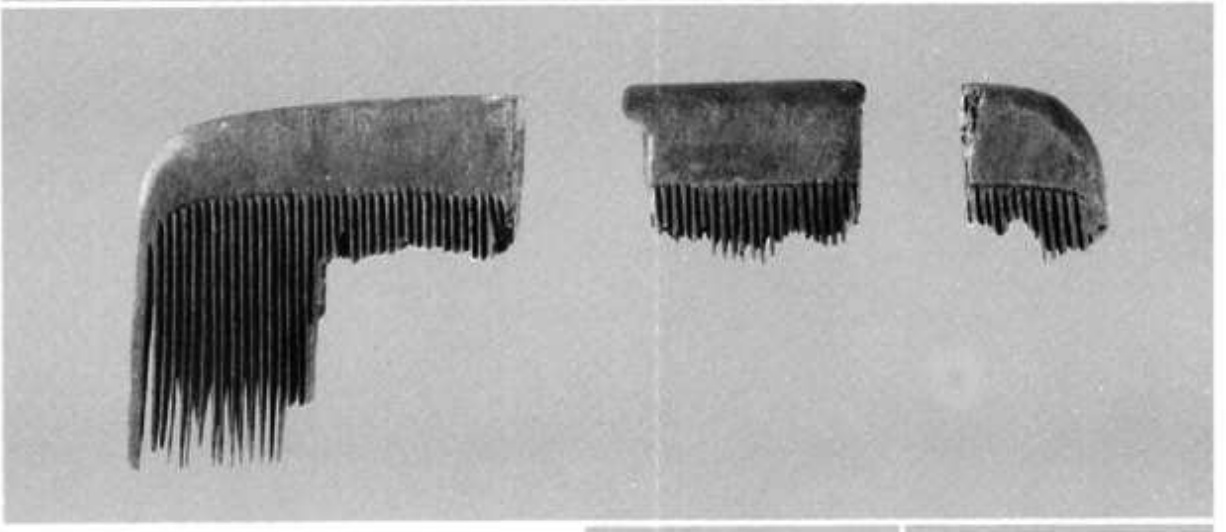


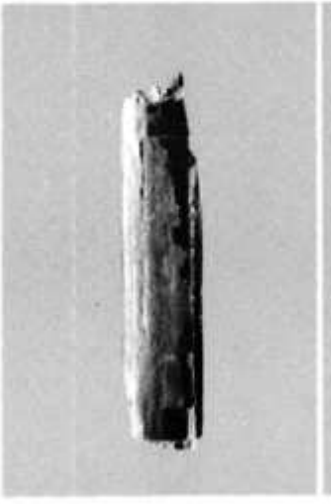


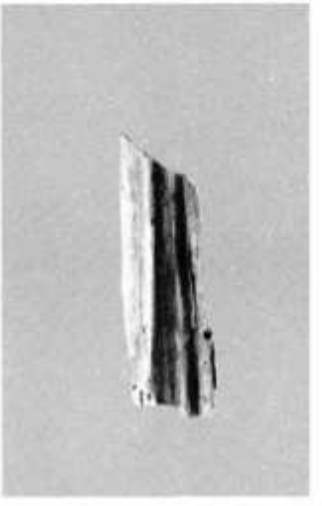






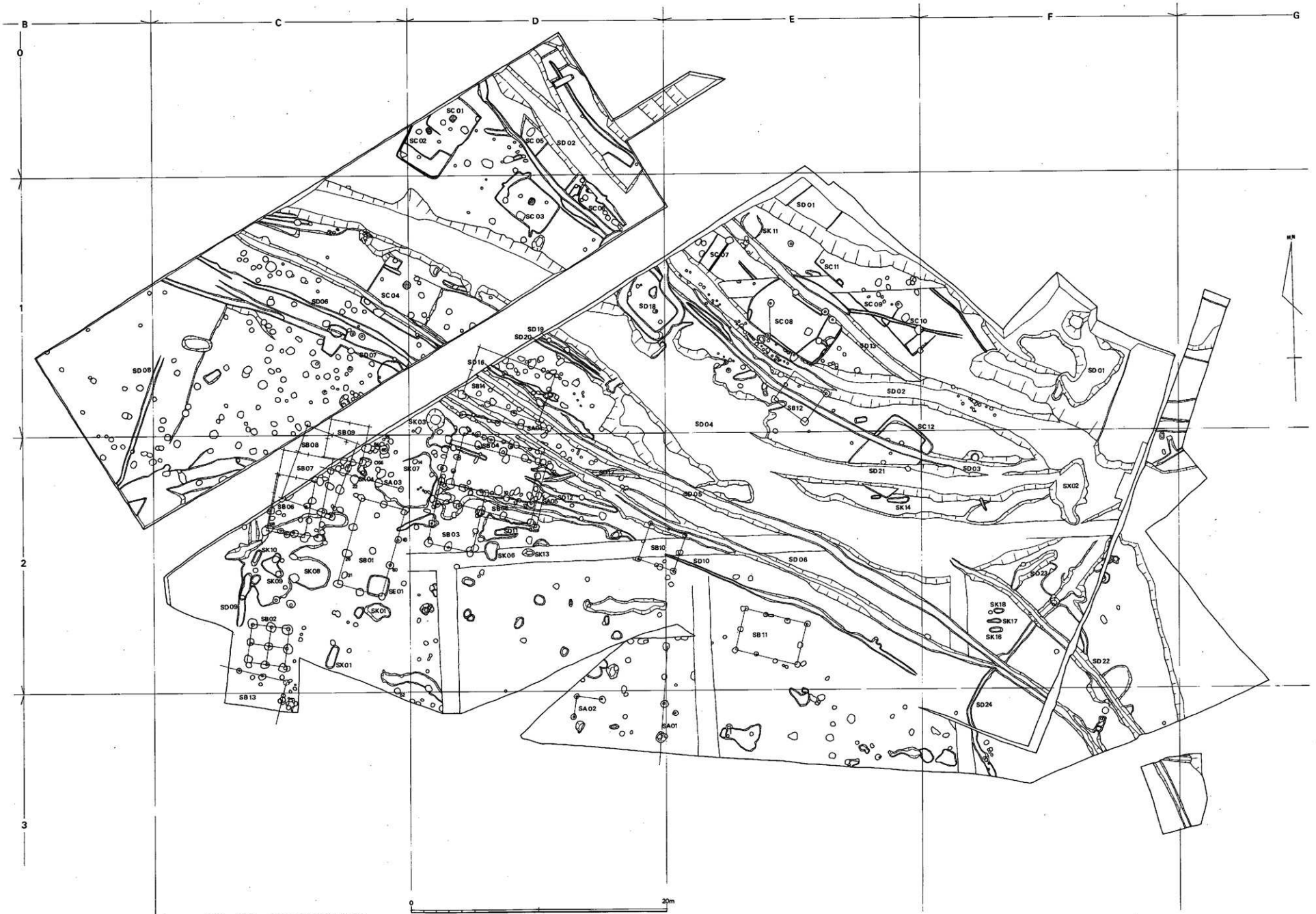






「多々良込田遺跡Ⅱ」正誤表

頁	行	誤	正
1	22	調査依託者	調査委託者
9	24	沖積微高地	沖積微高地
11	24	樽屋郡糸里	粕屋郡糸里
17	5	梁は6尺の等間である北の	梁は6尺の等間である。北の
23	32	胴部から外上向に	胴部から外上方に
26	19	91は25	91は29
26	29	天井部内外面にはa1手法	天井部外面にはa1手法
26	29	外面にはb1手法	内面にはc3手法
27	12	それほとんどが	そのほとんどが
27	21	盌は小形の	盌（118）は小形の
27	25	新旧は逆の波をうる。	新旧は逆の波をうける。
28	1	（126・127）	（125・126）
29	13	は器表の	他は器表の
30	14	胎土な密で	胎土は密で
31	18	山城小塩窯の製品。第1次	山城小塩窯の製品。15は第1次
31	19	班点状に	斑点状に
31	27	蓋弁は1+7ある。	蓋子は1+7である。
36	12	粕屋郡北七図八里	粕屋郡西郷北七図八里
36	25	早急な討策	早急な対策
36	註①	「府出土の－－－」	「大宰府出土の－－－」
36	註③	「東北考古学の諸問題」	「東北考古学の諸問題」
36－37	Fig. 14	筑前国－－－における条遺について	筑前国－－－における条里について



付図　第１～３次調査区遺構実測図

福 岡 市 東 区

多々良込田遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第53集

1980年 3月31日

発 行　福 岡 市 教 育 委 員 会
福岡市中央区天神1－8－1

印 刷　祥文社印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南4－15－17

多々良込田遺跡II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第53集

福岡市教育委員会